

大分県文化財調査報告書第92輯

大分の装飾古墳

1995

大分県教育委員会

大分の装飾古墳

1 9 9 5

大分県教育委員会

序 文

大分県の古墳の特色は、熊本県北部から福岡県にかけて分布の中心を持つ装飾古墳が及んでいることにあり、本県の古墳文化に彩りを添えております。古墳の石室に描かれた具象画や抽象的な絵画は、遙千数百年の時を隔てて、素朴であるが故に我々現代人に語りかけるものが多いように感じます。日田の生んだ現代画家宇治山哲平が、その抽象画のモチーフを装飾古墳に求めたのはよく知られたところです。

さて、そのような装飾古墳も近年の諸開発事業により破壊の危機に直面したり、周辺部の開発によりその環境が大きく変化したりしたところもあります。また、最近話題の酸性雨も少なからず装飾古墳に影響を与えていると考えられます。このような事態に鑑み、大分県教育委員会では平成5年度と6年度の2か年にわたって国の補助を得て、保存対策策定のための装飾古墳発掘調査事業を行いました。この報告書には事業の成果である基礎資料を掲載しております。もとより、この報告書は終着点ではなく、将来の保存整備事業へ向けての新たなスタートとなるものと考えておりますので、どうか忌憚のないご意見をお寄せいただきたいと存じます。

終りになりましたが、この調査にあたり多大な御協力をいただいた地権者の方々、調査の指導にあたっていただいた諸先生方、および各市町村教育委員会の皆様に心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成7年3月31日

大分県教育委員会
教育長 帯刀将人

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が国の補助を得て平成5年度と同6年度に実施した「県内装飾古墳発掘調査事業」の調査報告書である。
2. 本書で使用了した図面の内、穴観音古墳、鬼塚古墳、鬼ヶ城古墳、鬼の岩屋1号墳、千代丸古墳の石室、およびそれらの古墳の墳丘と穴瀬横穴墓群、法恩寺山古墳群の地形測量は外部委託により測量をおこなったもので、それ以外は明記したものは各報告書より転載、そのほかは今回新たに調査員が測量を行ったものである。
3. 装飾の写真のうち、穴観音古墳、法恩寺山3号墳、ガランドヤ2号墳、玖珠鬼塚古墳、泉の岩屋1号墳、同2号墳、千代丸古墳の壁画については石丸洋氏(九州歴史資料館参事補佐)の撮影による。また、鬼ヶ城古墳と伊美鬼塚古墳および装飾横穴墓群の一部については、九州歴史資料館より写真の提供を受けた。さらに、ガランドヤ古墳群については日田市教育委員会に写真の提供を受けた。それ以外は今回の調査時に調査員が撮影したものである。
4. 本書の執筆は第1章から第3章を小柳和宏、第4章は村上久和、小柳和宏が分担し、文責は各項ごとに最後に示した。第5章は山田拓伸、第6章1は小柳と村上、同2は渋谷忠章による。
5. 本書中で使用する石室内の右側壁、左側壁あるいは右側袖石、左側袖石とあるものは、すべて奥門側から玄室内に向って「右側」、「左側」の壁、あるいは袖石を表わしている。
6. 本書の編集は渋谷忠章、村上久和、小柳和宏が行った。

目 次

序文

例言

第1章 序 説・・・・・・・・・・・・・・ 1

1. 調査に至る経緯 1
2. 調査の内容と経過 1
3. 調査団の構成 2

第2章 装飾古墳の分布・・・・・・・・・・・・ 3

第3章 装飾古墳保護・研究の歴史・・・・・・・・ 10

第4章 装飾古墳概説・・・・・・・・・・・・ 11

1. 穴観音古墳 12
2. 法恩寺山3号墳 20
3. ガランドヤ1号墳 27
4. ガランドヤ2号墳 33
5. 鬼塚古墳 38
6. 鬼ヶ城古墳 46
7. 鬼の岩屋1号墳 51
8. 鬼の岩屋2号墳 57
9. 千代丸古墳 64
10. 伊美鬼塚古墳 69
11. 鷹巣4号横穴墓 77
12. 城山装飾横穴墓 81
13. 水雲横穴墓群 84
14. 四日市横穴墓群 89
15. 貴船平下の裏山装飾横穴墓 95
16. 観音山横穴墓群 98
17. 穴瀬横穴墓群 102

第5章 石室内温湿度測定調査・・・・・・・・ 108

第6章 まとめ・・・・・・・・・・・・・・ 112

1. 大分の装飾古墳 112
2. 大分県装飾古墳の現状と課題 114

付図1 穴観音古墳石室測量図

- 2 鬼塚古墳石室測量図
- 3 鬼ヶ城古墳石室測量図
- 4 鬼の岩屋1号墳石室測量図
- 5 千代丸古墳石室測量図
- 6 法恩寺山古墳群地形測量図
- 7 穴瀬横穴墓群地形測量図

第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

大分県では8群10基の装飾古墳、および7群17基の装飾横穴墓が現在確認されている。しかし、昭和32年に口田市教育委員会によって学術調査された法恩寺山3号墳、昭和59、60年に同じく口田市教育委員会によって資料整備のための調査がなされたガランドヤ古墳群、昭和60年度に国見町教育委員会によって整備のための調査がなされた伊美鬼塚古墳、平成4年度玖珠町教育委員会の緊急調査によってその所在が初めて明らかにされた鷹巣横穴墓群以外には、学術的な調査は行われて来なかった。大部分は装飾の正確な実測図が無いばかりか、石室の実測図や墳丘測量図も作成されておらず、基礎資料の整備が遅れているのが現状であった。

しかし、近年確認された鷹巣、水塚、城山、観音山の各横穴墓群以外は7件(群)が国指定史跡、他の4件(群)が県の史跡に指定され保護されている。とはいうものの、具体的な保護対策となると立ち入りの制限の他は行われていないのが現状であり、近年装飾の褪色や石室への落書きなど看過できない事態も生じている。そこで、大分県では装飾古墳の保存・公開における原則の策定、さらに各古墳に適した保存・公開方法の検討を進めるべく、平成5年度と6年度の2カ年にわたって国の補助を受け、県内の装飾古墳・装飾横穴墓の基礎資料の作成をおこなうことになったのである。

2. 調査の内容と経過

調査は、墳丘の図面(200分の1)および石室、横穴墓の図面(20分の1)の整備を第一に、そして一部については古墳の規模を確認するために周溝の検出調査(発掘調査)をおこなった。さらに、装飾そのものについては写真撮影をおこない、現状の記録をおこなった。また、ガランドヤ1号墳については1年間を通して温度の計測をおこなった。以下、各年度ごとの調査内容を列記する。

・平成5年度

【発掘調査】

周溝の検出による古墳規模の確認を目的として、穴観音古墳、鬼ヶ城古墳、鬼の岩屋1号墳の3古墳の周囲にトレンチを設定し、発掘調査を行った。

【測量委託】

上記の3古墳に玖珠鬼塚古墳を加えた4古墳について、墳丘及び周辺の200分1の地形測量図、および横穴式石室の測量と装飾の図化(写真測量)、および法恩寺山古墳群の200分1の地形測量図作成を委託により行った。

・平成6年度

【測量委託】

千代丸古墳の石室と装飾、および墳丘地形測量図、穴瀬横穴墓群の200分1の地形測量図作成を委託により行った。

【実測調査】

装飾横穴墓の内、いまだ測量図の無かった城山横穴墓、水雲横穴墓群、および穴瀬横穴墓群の一部の測量と、新発見装飾横穴墓である観音山横穴墓の測量を行った。

・以下、簡単に経過を記しておく。

平成5年12月13日から12月20日、鬼ヶ城古墳の発掘調査。周溝は確認できず。

平成6年1月6日から1月12日、穴観音古墳の発掘調査。周溝は確認できなかったが、墳端が確認でき、古墳規模がわかる。

平成6年1月24日から1月26日まで、穴観音古墳、法恩寺山3号墳、ガランドヤ2号墳の写真撮影。

平成6年2月7日から2月15日、鬼の岩屋1号墳の発掘調査。周溝が確認され、古墳規模がわかる。

平成6年3月29日から31日まで、調査委員会。

平成6年11月29日から12月1日まで、鬼塚古墳と鬼の岩屋古墳、千代丸古墳の写真撮影。

平成7年1月18日から19日まで、調査委員会。

平成7年3月1日から3日まで、横穴墓を中心とした写真撮影。

3. 調査団の構成

調査の組織は次のとおりである。

【調査主体】

大分県教育委員会

【調査委員】

平成5年度

沢田 正昭（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）

賀川 光夫（別府大学教授、大分県文化財保護審議会委員）

水野 正好（奈良大学学長）

後藤 宗俊（別府大学教授）

佐田 茂（佐賀大学教授）

石山 勲（福岡県総務部国立博物館対策室室長補佐）

石丸 洋（福岡県立九州歴史資料館参事補佐）

平成6年度

賀川 光夫（別府大学教授、大分県文化財保護審議会委員）

小田富士雄（福岡大学教授、大分県文化財保護審議会委員）

後藤 宗俊（別府大学教授、大分県文化財保護審議会委員）

白石 太郎（国立歴史民俗博物館教授）

石山 勲（福岡県総務部国立博物館対策室室長補佐）

石丸 洋（福岡県立九州歴史資料館参事補佐）

【調査員】

渋谷 忠章（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

村上 久和（同 主査）

小柳 和宏（同 主任）

綿貫 俊一（同 主任）

山田 拓伸（大分県立宇佐鳳土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）

第2章 装飾古墳の分布

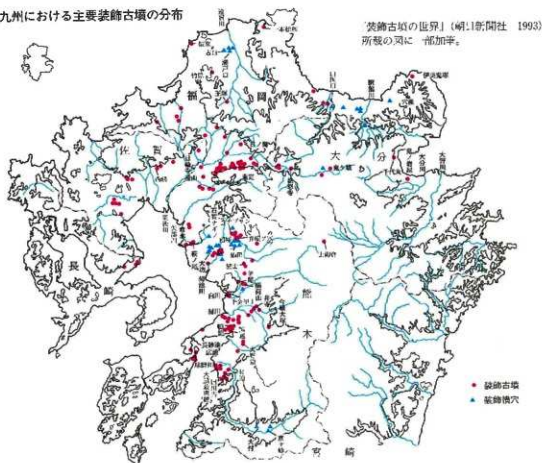
大分県内では既述のように15件、27基の装飾古墳、および装飾横穴墓が確認されている(4頁表参照)。周知のように壁画系装飾古墳は彩色系と線刻系に分けられるが、前者は主に筑後川の上流部にあたる玖珠川流域に多く、後者は国東半島、別府湾岸、玖珠川流域というように点在している。彩色系の装飾古墳を見ると、円文を多用するもの(玖珠町鬼塚古墳、H田市法恩寺山3号墳)、舟や馬などをモチーフにするもの(ガランドヤ1、2号墳、穴観音古墳)など、あきらかに筑後川上流域から熊本県北部地域の装飾古墳の影響下にあることがわかる。その中で、H田市の3古墳に十字形の「飛鳥」が共通の意匠として用いられているのが注意される。忙しない動きを表しており、絵画全体を動きのあるものになっている。

その他、石室の形態などにも彼地の影響が窺える。下代丸古墳と鬼ヶ城古墳には石甕が、そして穴観音古墳、ガランドヤ1号墳には疑似石甕があり、鬼の岩屋1号墳には県内唯一の石甕形が据えられている。また、ガランドヤ2号墳と法恩寺山3号墳は胴張りプランの石室形態で、いずれも、肥後地方北部から筑後地方の影響を多分に受けている。注意されるのは、横穴式石室墳の少ない豊後地域にあって、装飾と横穴式石室は密接な関係をもっていることである。つまり、両者は一体のものとして有力地域豪族に受容されたと考えられよう。

いずれにしても、大分の装飾古墳は筑後地域などの装飾古墳中心部からは地理勾配を示すが、モチーフの独自性とガランドヤ1号墳や鬼の岩屋2号墳などに見られる奔放な筆致は一つの地域性を表していると言えよう。

装飾横穴墓は入口部外壁に彩色するものと内部の壁に彩色するものがあるが、前者は旧豊前国にあたる地域からそれに隣接する地域(すなわち県北部)に集中し、後者は玖珠川流域で最近1基確認された。これらは多くの場合各群で複数存在するという特徴がある。文様は同心円文や円文を主体としながらも円文の回りに鉤状の手を伸ばすものや人物の様な文様などがあり、横穴墓群の中では大型のものに施文される傾向がある。

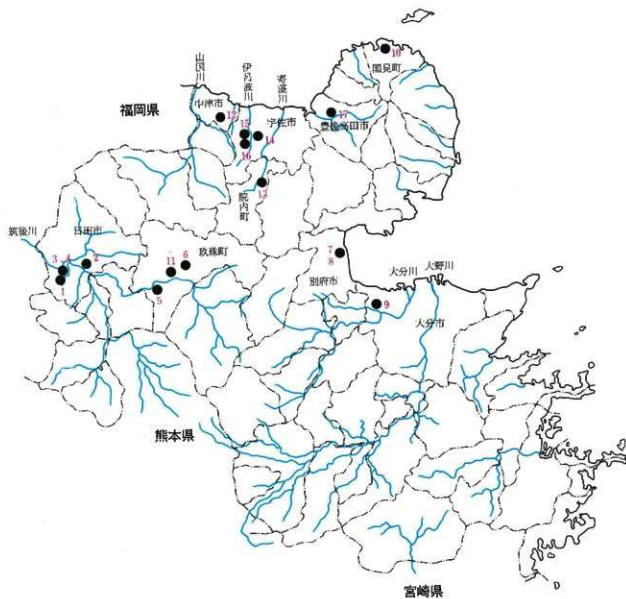
第1図 北部九州における主要装飾古墳の分布



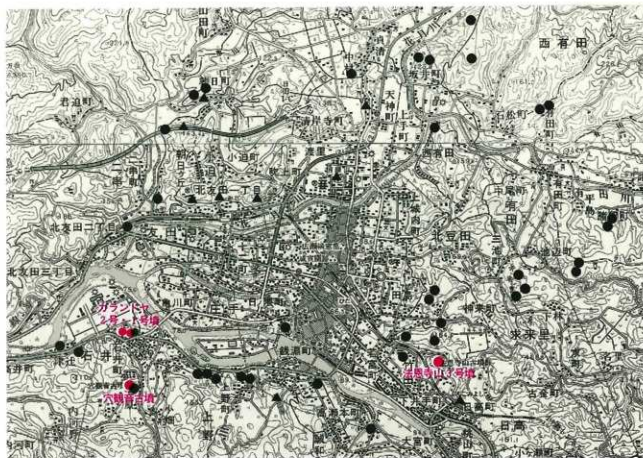
県内装飾古墳一覧表

番号	指定区分	名 称	指定年月日	所 在 地	装飾の内容	構 造	所有者、管理団体・その他
1	国	穴観音古墳	昭和8・2・28	日田市大字内河野9	円文・一角文・人物・舟・飛鳥など	横穴式石室・彩色	日田市・S47復旧建設
2	市	法恩寺山3号墳	昭和34・5・13	日田市大字日高641ほか	円文・同心円文・飛鳥・馬など	横穴式石室・彩色	日田市
3	市	ガランドヤ1号墳	平成4・10・13	日田市石井町字西の園1187	人物・馬・舟・円文・飛鳥など	横穴式石室・彩色	日田市
4	市	2号墳	市	市	騎馬人物・鹿・円文・円文	横穴式石室・彩色	日田市
5	市	鬼塚古墳	昭和28・4・20	玖珠町大字小田910	円文・同心円文・人物・舟など	横穴式石室・彩色	地区・S53修理
6	市	鬼ヶ城古墳	昭和24・10・25	玖珠町大字帆足1980	木の葉など	横穴式石室・彫刻	個人
7	国	鬼の岩屋1号墳	昭和32・11・28	別府市大字北石垣172	龍・人物・舟など	横穴式石室・彩色	別府市・S41所蔵
8	市	2号墳	市	132-1	円文・一角文・鹿・人物など	横穴式石室・彩色	別府市・S41所蔵
9	市	千代丸古墳	昭和9・5・1	大分市大字宮元宇千代丸595の4	連続三角文・人物・動物	横穴式石室・彩色	大分市・S45保存施設
10	市	伊美鬼塚古墳	昭和32・11・28	国見町大字12428 1	舟・人物・群鳥・樹木など	横穴式石室・彩色	国見町・S60保存施設
11	未指定	鹿島岡穴墓群	市	玖珠町大字帆足字鹿島	円文・人物	横穴墓・彩色	個人・1基
12	市	城山横穴墓群	市	中津市大字伊藤田字城山	円文	横穴墓・彩色	個人・1基
13	市	水雲横穴墓群	市	院内町大字上副字水雲	円文・舟?	横穴墓・彩色	個人・4基・装飾一部剥落
14	国	四日市横穴墓群	昭和32・11・28	宇佐市大字四日市宇一見手・加賀山	同心円文・人物?	横穴墓・彩色	宇佐市・3基
15	市	貴船平下の裏山横穴墓群	昭和46・3・23	宇佐市大字山下・上元永	同心円文・六角輪状文	横穴墓・彩色	個人・1基
16	未指定	観音山横穴墓群	市	宇佐市大字上元永字観音山	同心円文など	横穴墓・彩色	個人・2基
17	市	穴瀬横穴墓群	昭和46・3・23	豊後高田市大字美和・上屋敷	同心円文・円文など	横穴墓・彩色	個人・5基

※名称については指定名称とは異なる場合がある。
 ※指定地の範囲については、所在地に記した地番の一部の場合がある。
 ※その他の項目の基数は装飾横穴墓の基数である。

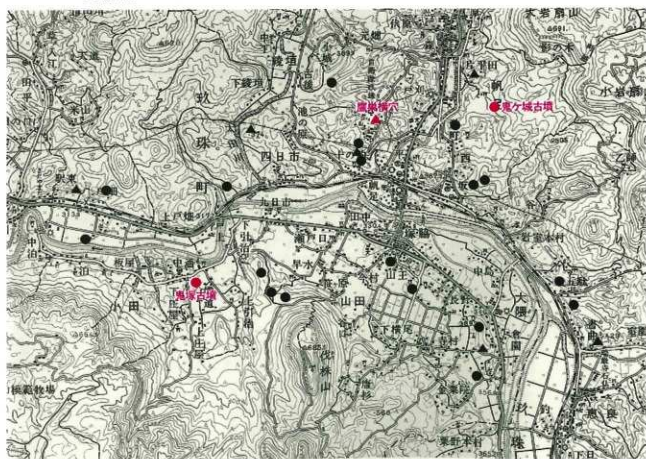


第2図 県内装飾古墳の分布

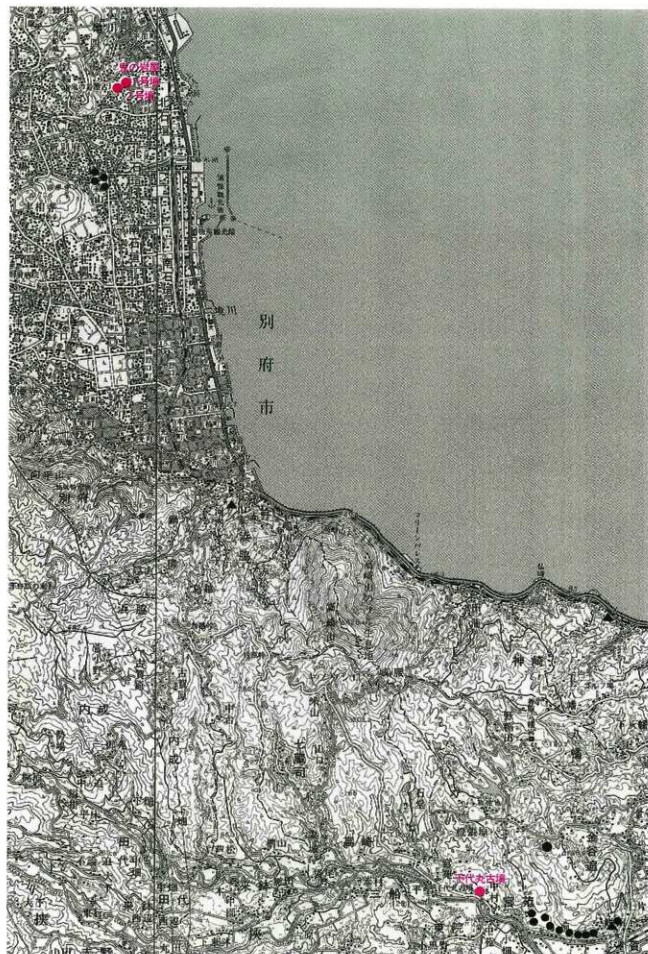


● 古墳
▲ 横穴墓

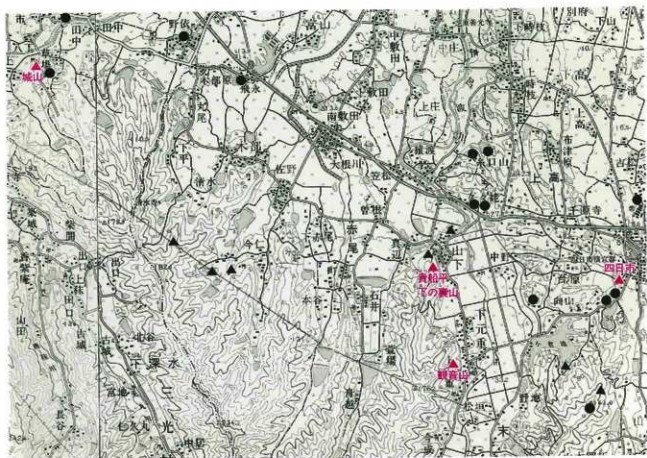
第3図 日田地域の装飾古墳位置図 (5万分の1)



第4図 玖珠地域の装飾古墳位置図 (5万分の1)

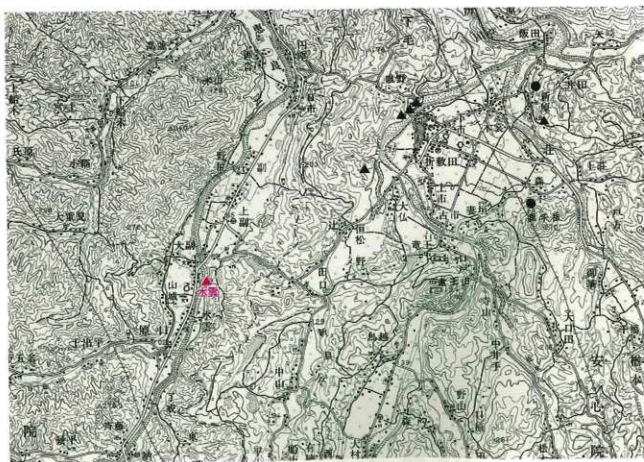


第5図 別府・大分地域の装飾古墳位置図 (5万分の1)

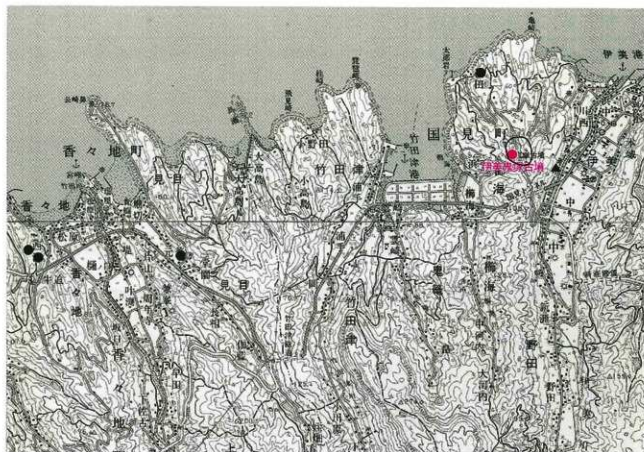


- 古墳
▲ 横穴墓

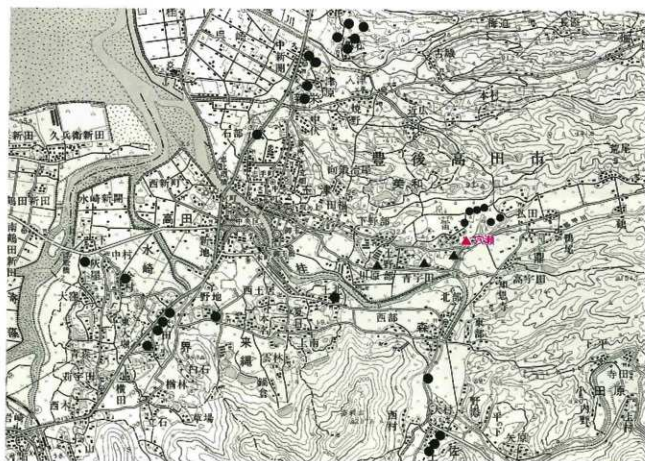
第6図 宇佐・中津地域の裝飾横穴墓位置図 (5万分の1)



第7図 水雲横穴墓位置図 (5万分の1)



第8図 伊美鬼塚古墳位置図 (5万分の1)



第9図 穴瀬横穴墓位置図 (5万分の1)

第3章 装飾古墳保護・研究の歴史

大分県の装飾古墳は小田富士雄氏が指摘する¹⁹⁾ように、福岡県西部から熊本県北部地域の装飾古墳の中心地に対して、「周辺地域に展開した潮流とも思える装飾古墳は華やかな脚光を浴びることもなく、それゆえにこそひっそりと今日まで激動の時代を生きたびその命脈を保ち」つづけてきたと言えるであろう。しかし、そのことが決して装飾古墳の保存に良い結果を与えてきたわけではなかった。むしろ、保護対策が「行政上真剣にとりあげられたことはなかった」というのは事実として受け入れざるを得ないものであろう。実際、装飾古墳は大半が昭和30年代までに同または県の史跡に指定されているが、抜本的な保護対策はほとんど施されてこなかった。その中で一部の古墳では覆屋をつくったり、石室の石積みの隙間にコンクリートを詰めたりの対策をおこなっているが、現在ではそれらの行為が封土の流失を招いたり、景観上の問題を引き起こしているのは当時の状況としては致し方ないものではあろう。

ようやく、1984年になって国見町が国庫補助を得て鬼塚古墳の保存修理事業を行ったのが本格的な保存・修復事業の嚆矢といえよう²⁰⁾。同年には日田市がガランドヤ1号、2号墳の発掘調査を行っている²¹⁾。これは、国指定に向けて基本資料を整備する目的で行ったもので、1992年には国指定史跡となり保存修復へ向けた取組が現在なされている。また、宇佐市内の国指定装飾古墳穴蔵では覆屋を造るなどの対策も取られ、さらに、1988年には日門市横穴墓群の地形測量図を作成している²²⁾。

ところで、福岡県や熊本県など大分県と比較して多くの装飾古墳を有する県では、一部古墳で比較的古くから保存施設が造られており、また他の古墳も基本的には石室内部への立ち入りが制限されるなど、かなり厳格な保護措置がとられてきた経緯がある。それに比較して大分県では比較的自由に石室内への立ち入りを許してきた。結局上記の3古墳を除いては、入口に扉を設け立ち入りを制限するといった消極的な対策しか施されていないのが現状である。しかし、完全に立ち入りを禁止しているわけではなく、この間現在に至るまで、石室への落書き、あるいは装飾のものをへ手を加えるといった事態も起きている。勿論、自然現象として彩色の褪色、キャンパスである岩肌の剥離といった現象も徐々に進行しており、各古墳に見合った抜本的な保護対策を練る時期に至っているという認識が、やや遅きに失した感是否めないがようやく高まってきたといってもよい。

最後に装飾古墳の学術面での調査・研究の歴史についても若干触れておきたい。大分県における装飾古墳に対する解釈は、幾つかの特定の古墳に対する全体的な視野から見た研究書や概説書、あるいは写真集などによってなされてきた。それについては一々ここでは取り上げないが、大部分に詳細な図面が無いことなどにより一定以上の深まりは得られなかったことと、概略図もない古墳についてはほとんど取り上げられなかったことは、大分の装飾古墳研究、ひいては保護対策を遅延させる要因になった。そのような中で日下八光氏によるガランドヤ1号墳と穴蔵古墳の装飾壁画の模写は、ガランドヤ1号墳における四神の存在の指摘など、重要な進展をもたらした。また、伊美鬼塚古墳とガランドヤ古墳群の調査報告書は詳細な図面を掲載し、後の研究に資することになった。特に後者の報告書では談谷忠章によって県内の装飾古墳が概観されている。

また1981年に発行された『大分県史美術編』、1989年に発行された『大分県史先史編II』では大分県の装飾古墳の概要が紹介されている。そして、1985年には『別府大学紀要第26号』、『同27号』において坂田邦洋氏らによって、実測図をもとにした鬼の岩屋1号、2号墳の壁面についての考察がみられる。特に後者の古墳はまったく詳細が不明であっただけに、今後絵画の解釈を巡って論議を呼ぶものと思われる。

以上の状況から、詳細な実測図の整備と写真撮影は保存対策上は勿論のこと、今後の装飾古墳研究にとっても急務であることは明らかであろう。

19) 『国見古墳』(宇佐市教育委員会、1975年) 34ページ。

20) 『鬼塚古墳保存修理報告書』(国見町、1986年)。

21) 『ガランドヤ古墳群』(日田市教育委員会、1986年)。

22) 『宇佐地区遺跡発掘調査概報』(宇佐市教育委員会、1988年)。

第4章 装飾古墳概説

ここでは、大分県内に所在する装飾古墳、装飾横穴墓の概要を位置・指定・立地・墳丘・石室・装飾・発掘所見・出土遺物の各項に分けて記す。なお、発掘所見は今回の調査、および以前の発掘調査時の所見もあわせて記載する。また、参考文献を最後に付すが、概略図が示されるなどの主要なものにとどめる。



穴類古墳



法恩寺山3号墳



ガランドヤ1号墳



伊美塚古墳



四日市横穴墓群



ガランドヤ2号墳



千代丸古墳



鹿瀬横穴墓群



鬼塚古墳



鬼の岩屋2号墳



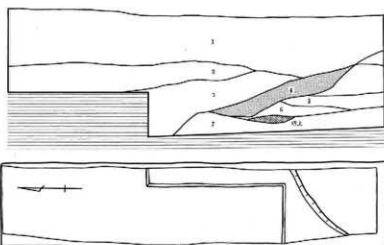
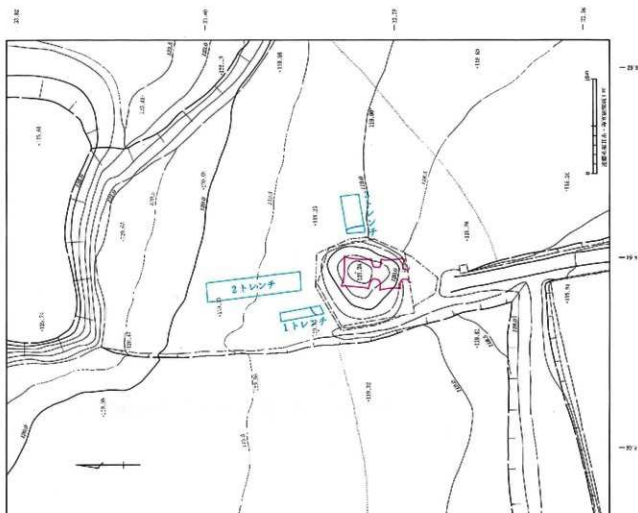
鬼の岩屋1号墳



鬼ヶ城古墳

あなかんの
1. 穴観音古墳

位置	日田市大字内河野 9 番地
指定	昭和 8 年 2 月 28 日 国指定史跡
立地	日田盆地の南側に広がる洪積台地上に立地している。台地縁辺部からは約 500 ㍍南側に入り込んだところであり、微視的に見ると古墳の南側に浅い谷が入り込み、北側の背後には丘陵を背負う場所である。そして、背後の丘陵を馬蹄形に削り込んでいる可能性が高い。元来は、背後の丘陵からゆるやかな傾斜をもった地形であったと思われるが、古墳の周囲約 50 ㍍四方は平坦に削られ、背後に約 5 ㍍の段差の崖が扇形に巡っている。
墳丘	墳丘は、現状で直径 10 ㍍、高さ 2.3 ㍍である。一部石室の石組みが表面に露出している部分があり、表土の流出が認められる。特に昭和 17 年に墳丘の覆屋を構築してからは特にそれが著しいという。今回の周溝確認調査によって、東側から北側にかけて墳端が確認されており、周溝はわからなかったものの、古墳の規模はほぼ復元できた。それによると直径 12 ㍍ほどに想定できる。
石室	石室は複室構造の横穴式石室で、羨道部まで含めた全長は 3.5 ㍍、前室の幅 1.5 ㍍長さ 1.2 ㍍、玄室は幅 1.5 ㍍長さ 1.5 ㍍、高さは現状で 1.25 ㍍である。平面プランは胴張りの無い方形で、前後室とも幅がほとんど変わらない。側壁は最下部に大きな鰐石を据え、その上に比較的大きな石をやや持ち送りながら平積みする。割り石の使用はそれほど多くない。奥壁は大きな鰐石を据え、天井石との間には 2 段に渡って石腰状に板状の石を突出させている。
装飾	装飾は、前室左右側壁と玄室右側壁、さらに奥壁に描かれている。前室右側壁は、横長の大きな腰石に横幅いっぱい描かれる。右側から円文、同心円文、舟、両手を広げた人物、同心円文？、意味不明の図形が描かれる。特に、三つの円文と舟の本体部分は、ごく僅かに塗られている。左側壁には舟が二艘と同心円文が描かれている。舟は 2 艘とも内部を浅く塗って、縁取りをしている。玄室右側壁には腰石に内部を塗りつぶした円文 2 つ、輪郭のみの円文 1 つ、飛鳥と思われる小さな十字形のもの約 10、大きな飛鳥を表現したと思われるもの、さらに中段の石には直径 37 ㍍ほどの大きな円文が描かれている。奥壁には、赤と緑を交互に塗り分けた同心円文が 2 段にわたって 9 つ描かれている。しかし、これらは単なる同心円文ではなく、一部は中心部から外側の円に向かって連結するように線が延びているものがある。その内の一部は顔料が流れたものの可能性もあるが、確実に顔料の認められる部分もあり、いわゆる「車輪文様」とも言うような特異な文様が表現されている。また、これらの円文の左下側には直線文の下に山形文が認められる。現状では右側に読めないが、連続山形文であった可能性もあろう。また、上部には円文を挟むように直線文が認められる。そして、円文群の間には形態は不明であるが、幾つかの文様が描かれている。
発掘所見	墳丘確認のため古墳墳頭の東側に幅 2 ㍍、長さ 3.5 ㍍のトレンチ 1 本と北側に幅 1 ㍍、長さ 10 ㍍と 4 ㍍のトレンチ各 1 本を設定した。その結果、東側トレンチ（3 トレンチ）では旧表土をカットした地山削りだしの墳端が検出された。北側トレンチ（2 トレンチ）では 3 トレンチ同様の地山削りだしの墳端と 1 トレンチでは茶褐色と下層に粘土を含む暗茶褐色土の互層をなす墳丘土と地山削りだしの墳端が確認された。以上のことから本古墳は径 12 ㍍前後の円墳であることが確認された。
出土遺物	なし
まとめ	本古墳は屋根などの保存施設があるが、それがかえって墳丘土を乾燥させ、動物等により掘り返された跡がある。さらに石室には白カビ状のものも認められる。墳丘も指定地外に広がるのが確認されたのでそれを含めた保存対策が必要である。
参考文献	『日田市周辺の装飾古墳』『大分県日田市法恩寺古墳』（日田市教育委員会、1959 年）（村上）

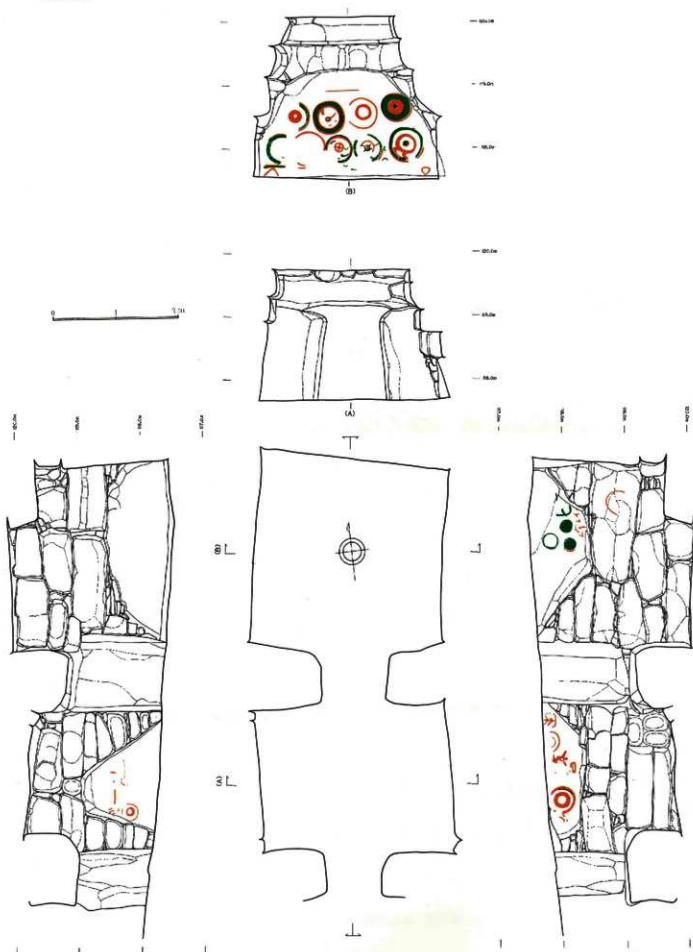


第1トレンチ



1. 墳頂外周部(19号～20号層)
2. 墳頂内周部(17号～18号層)
3. 埋葬層(16号層)
4. 埋葬層下(15号層)
5. 埋葬層下(14号層)
6. 埋葬層下(13号層)
7. 埋葬層下(12号層)

第10図 墳丘測量図及びトレンチ実測図



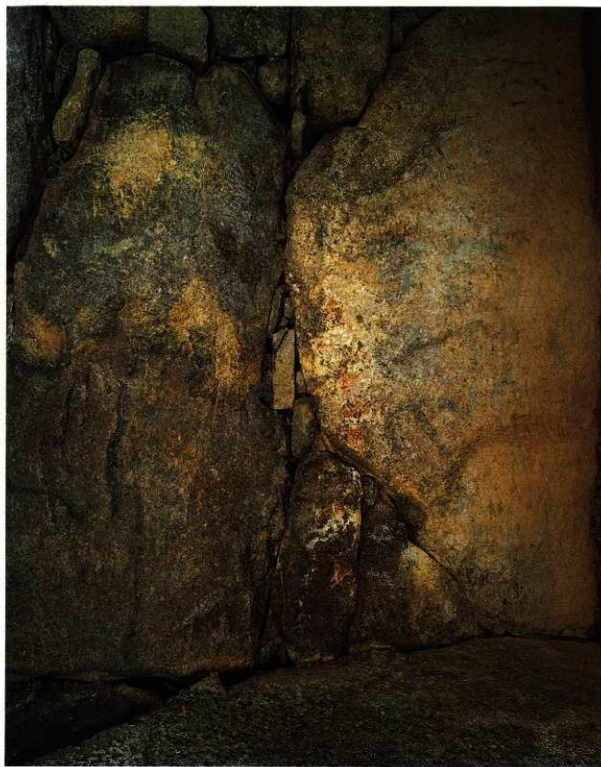
第11図 石室実測図



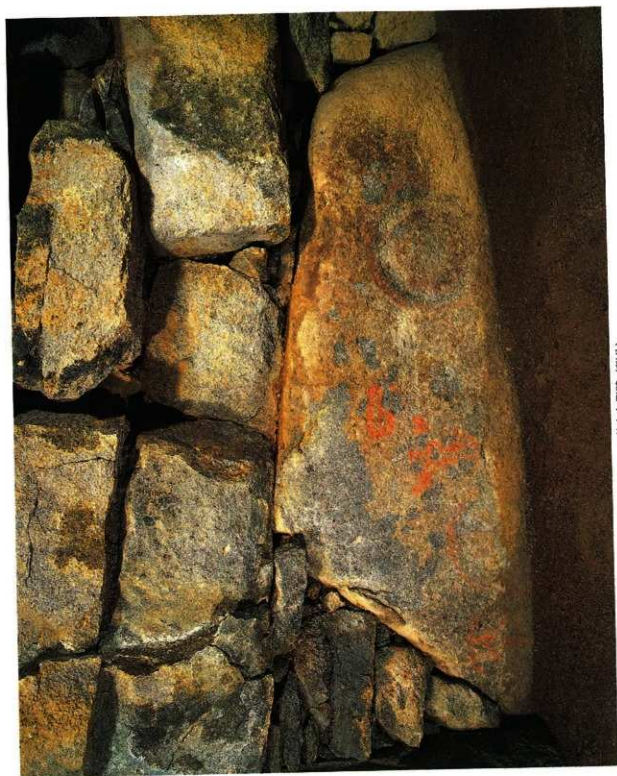
玄室（前室より望む）



次觀音古墳



玄室右側壁（部分）



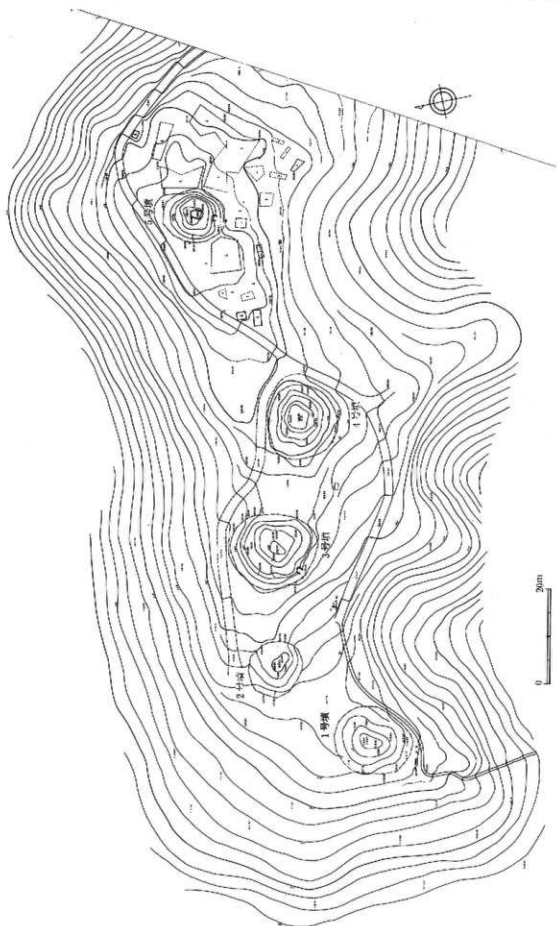
前室右側壁（部分）



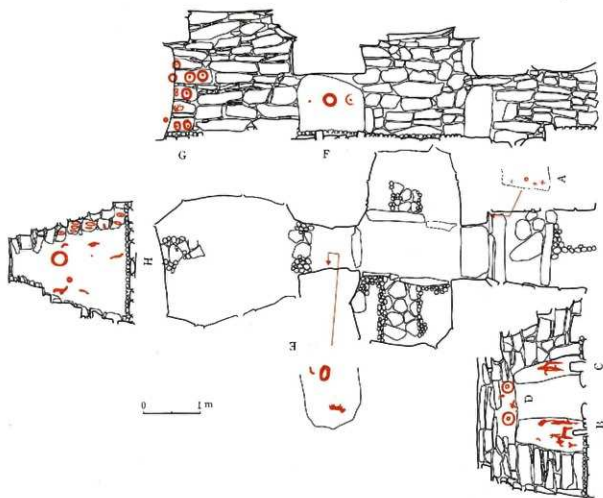
南室左側壁（部分）

2. 法恩寺山3号墳

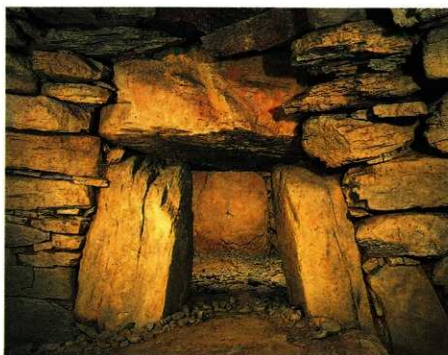
位置	日田市大字H高641番地ほか
指定	昭和34年5月13日 国指定史跡
立地	日田盆地の東北部、盆地を望む独立丘陵法恩寺山の頂部に位置する。丘陵の頂部はほとんど平坦面は取れないが、頂部から西側斜面にかけて計7基の古墳が連なっている。丘陵は、沖積地からの比高が30mほどである。
墳丘	西側に傾斜する斜面に立地しているため、やや封土の流出がみられるが、復元すると径20mほどになる。報告書によると「東側地形の高い部分は若干掘り凹めて、その上部に盛土をしているため、全体が半円状に盛りあがって均整のとれた円墳に見えるが、実測の結果では西側の基部が二米程低くなっている」ので、西側からのみかけの高さは5mになる。古墳の裾には「山二米、高さ一米程度の基壇」が存在しその上に盛土をしているため、実質的な盛土は3mほどである。 また、基壇基部や墳丘との境などには基石を配している。
石室	複室の横穴式石室である。前室は樹端に横幅の広い形態で、玄室は胴張りを施するなど、筑後狐塚古墳に類似する。規模は、全長8.0m、前室幅2.25mで長さ1.9m、玄室は最大幅2.35mで長さ2.4mである。側壁には大きな腰石を使わず、比較的均一な割り石を持ち送りながら平積みする。石の隙間には偏平な割り石を挟んでいる。奥壁は高さ1.7mの鏡石を据え、上部には1段の平石を突出させ、疑似石棚状に作る。床面には川原石が全面に敷き詰められており、前室の左右に張り出した部分は高さ20cmほどの仕切り石で区切られ、屍床を形成している。
装飾	昭和25年に発見された。昭和32年の石室内の発掘調査時の報告、および今回の調査により確認された装飾は以下の通りである。 装飾は計8カ所に描かれている。すなわち、羨門部右側袖石(A)、前室側左右袖石(B、C)とまぐさ石(D)、玄室への通路左右(E、F)、玄室右側壁(G)、奥壁(H)である。Aには小さな十字形の飛鳥とおもわれるもの3つと小さな円文、Bには報告書で「馬と人物」とされているが、現状ではほとんど顔料を見いだすことはできない。Cの文様は判然としない。Dは両側に同心円文を描き、その間に文様を描くが(顔料は明瞭に残る)、何を表現しようとしたのかは不明である。Eは馬と楕円形を縦に描く。Fは中央に円文、その右に同心円文、左には小さな円形の線画が認められる。Gは奥壁側に5段に渡って同心円文を中心として文様が描かれる。下から2段目は円文ではなく、やや角張った文様が描かれるが、全体は不明である。Gには中央上部に円文が、その左下に小さな塗り潰しの円文が認められる他は赤彩が認められるものの全形は不明である。
発掘所見	昭和32年の発掘調査では古墳周囲の周溝の確認は行っていないので、正確な古墳規模は不明であるが、石室内部については堆積した土砂の除去作業を行っている。
出土遺物	昭和32年の調査において、玄室から須恵器が、前室から馬具が出土している。須恵器は提瓶で、馬具は書と雲珠である。他に琥珀の蚕玉1とガラス小玉3が出土している。しかし、いずれも詳細は不明であるが、6世紀後半とされる。
まとめ	他の日田市の装飾古墳と同様十字形の飛鳥が見られ地域色を持つが、円文の多用と馬の表現、胴張りの石室など筑後浮羽地域の装飾古墳との密接な関係が窺える。
参考文献	『大分県日田市法恩寺古墳』(日田市教育委員会、1959年) (小柳)



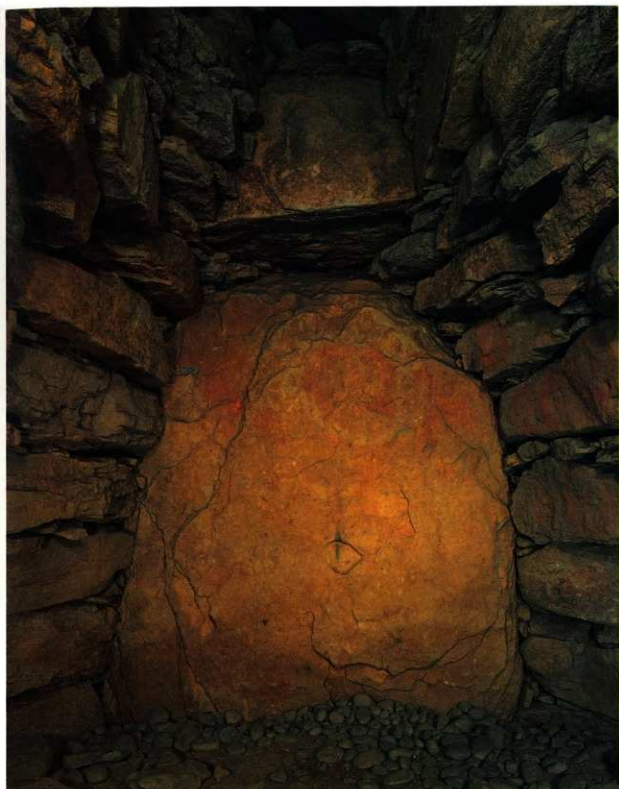
第12図 法恩寺山古墳群 (800分の1)



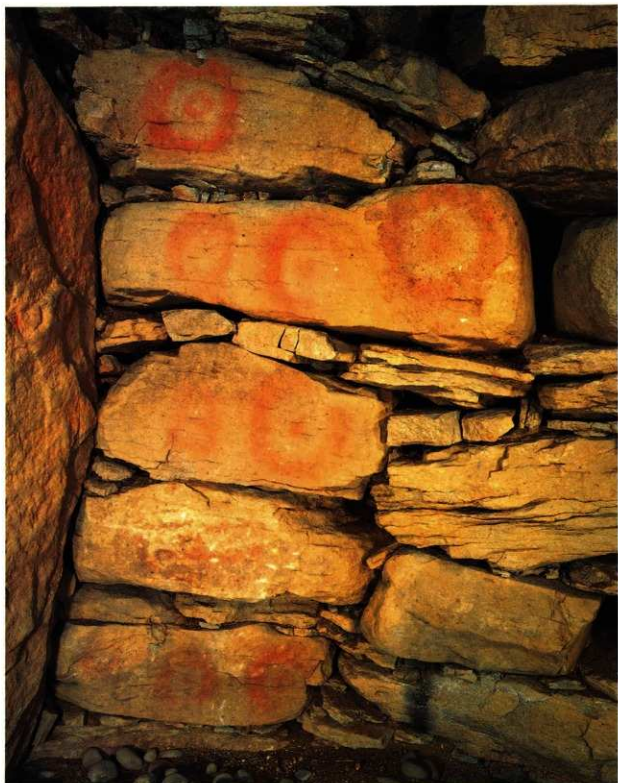
第13図 石室実測図（報告書より転載、一部加筆・修正）



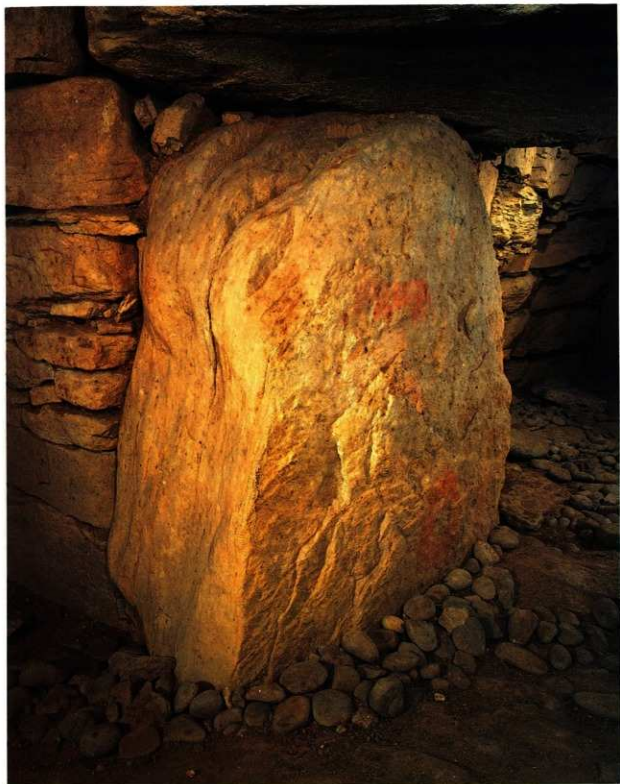
前室から玄室を望む



奥壁(H)



玄室右側壁（G、部分）



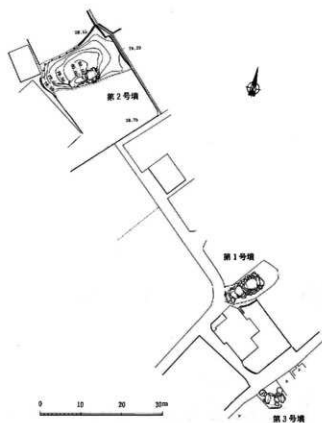
左側袖石 (E)



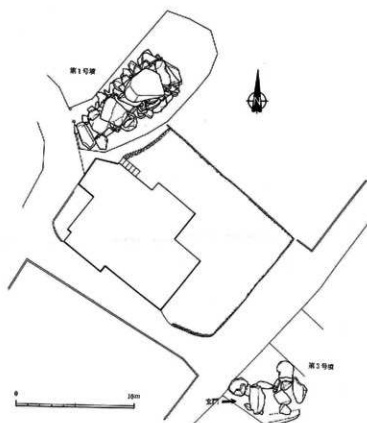
まぐさ玉 (D)

3. ガランドヤ1号墳

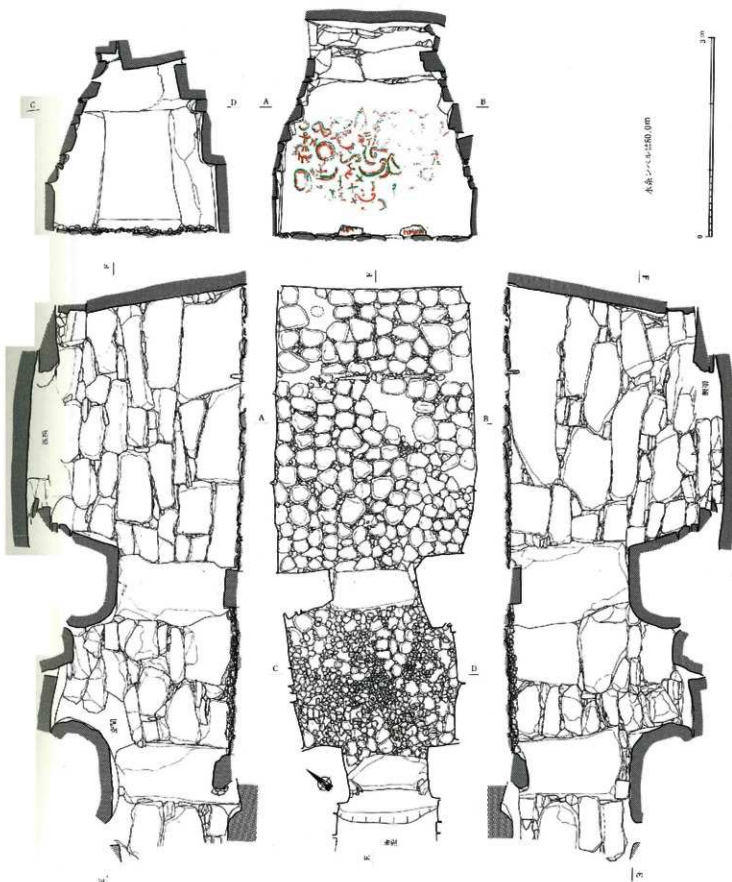
位置	口田市大字石井字西ノ岡1187
指定	平成4年10月13日 国指定史跡
立地	三瀬川左岸段丘上に位置している。氾濫原からの比高差は4m程で、洪積台地上に立地する穴観音古墳などとは全く立地を異にする。
墳丘	封土は全て流出しており、石室の石組みが露出している。昭和59年度の周辺調査によっても周溝は確認されず、古墳の規模は不明である。
石室	玄室と前室とからなる複室で、羨道部を除く全長は6.9m、残存する羨道部迄入れると8.0mとなる。玄室は3.0m×4.3mのほぼ長方形を呈し、胴張りほぼと認められない。腰石を据えた上に、比較的大きな石をやや持ち送りながら積み上げる。奥壁は表面を平坦にした鏡石を据え、上部に二段に渡って石棚状に平石を突出させ、一枚の天井石を支えている。床面は人頭大の礫を敷きつめ、その上に拳大の礫を敷く。奥壁と平行する様に偏平な石で仕切りを作り、屍床としている。 前室は2.0m×2.4mのやや横に広い長方形を呈する。腰石の上は持ち送りを強めながら平積みされ、天井石を支える。床面には人頭大の礫の上に拳大の礫を敷く。 羨道部は0.5mを発掘しただけで、大部分は現在道路の下に埋まっている。
装飾	装飾が描かれているのは、玄室の奥壁と床面に立てられた仕切り石である。奥壁は右側3分の1ほどが石の表面が剝離することによって失われかけており、僅かに痕跡程度を残すにすぎない。左側部分は比較的良好に残っており、赤と緑の二色を巧みに使い分けて様々な文様を描いている。両手を広げた人物、馬、鳥、飛鳥、舟などの具象的なモチーフと、円文、「8」字状の文様、「X」字状の文様、流雲文状の文様など抽象的なモチーフがある。仕切り石には赤と緑の縦縞文様が認められる。
発掘所見	昭和59年度と同60年度の2ケ年に渡り日田市教育委員会によって発掘調査された。調査以前は、前室は半分近く、玄室は10分近く土砂が堆積していた。発掘調査は内部の清掃と、周溝の確認を目的として行われた。内部の調査では床面に接した状況で遺物が出土し、比較的内部が荒らされていないことが判明した。周辺のトレンチ調査では、削平が著しく周溝は確認できなかった。
出土遺物	須恵器、土師器、馬具類(轡、鞍金具、飾り金具、轡珠、辻金具など)、鉄鏃、刀金具、ガラス小玉、碧玉製管玉、耳環などが出土している。6世紀後半代。
まとめ	大分県内で最も自由山面に近い奔放な両風の装飾古墳である。壁面の描かれた奥壁は以前の雨漏りのために全体の3分の1ほどが消失しているが、残された部分のみでも十分にそれを感じ取ることが出来る。しかし、現状で奥壁の壁面の一部を白い黴状の物質が覆っており、装飾文様が見えにくくなってきている。 また、石室は昭和50年頃一度補修作業を受けているが、前室の一部が空洞として残されており(現在はその出入り口となっている)、外気との遮断が十分には出来ない状況になっている。現在、日田市教育委員会によって保存・整備のための検討委員会が設けられており、近い将来何らかの手立てが施される予定である。
参考文献	『ガランドヤ古墳群 大分県日田市所在装飾古墳の調査報告』(日田市教育委員会、1986年) (小柳)



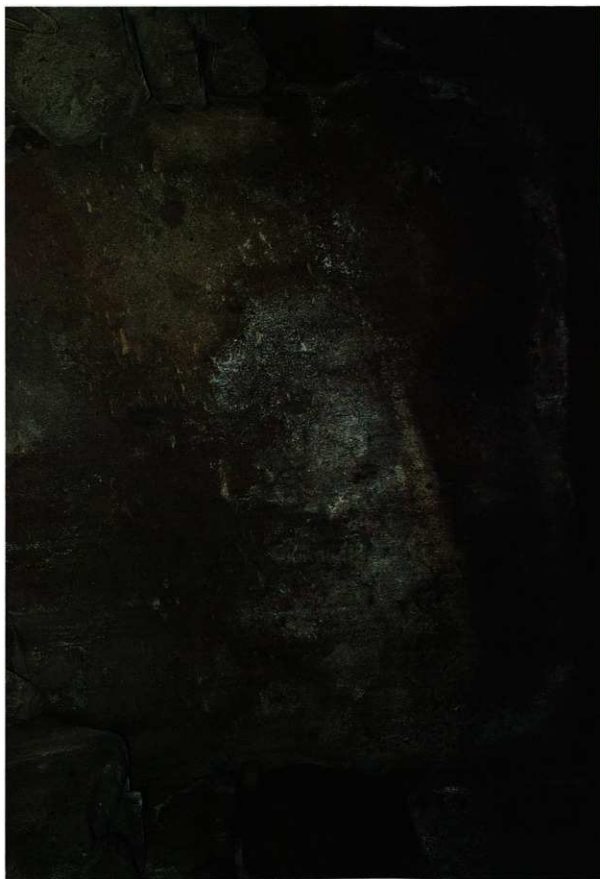
第14図 1～3号墳位置図（報告書より転載）



第15図 1号墳周辺地形図（報告書より転載）



第16図 石室測量図 (報告書より転載)





奥壁（部分）



奥壁（部分）



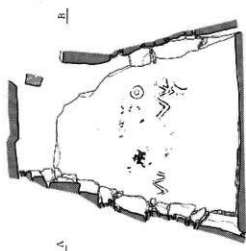
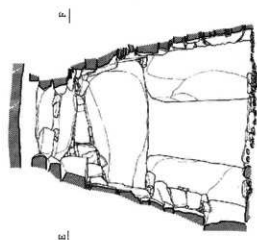
仕切り石 (左側)



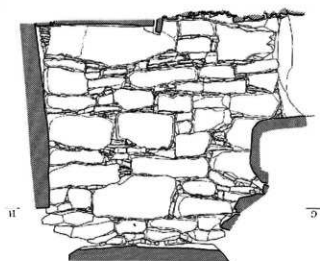
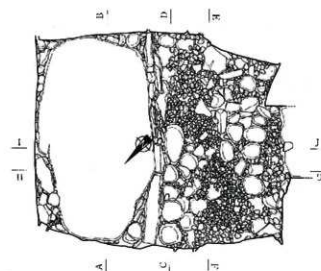
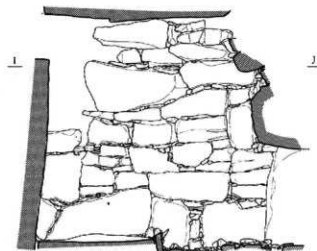
仕切り石 (右側)

4. ガランドヤ2号墳

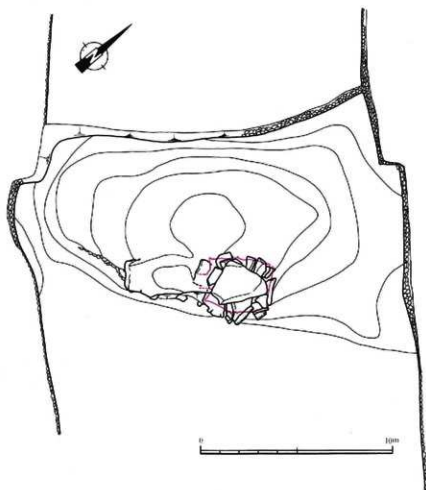
位置	日田市大字石井字西ノ園1187
指定	平成4年10月13日 国指定史跡
立地	三隅川左岸段丘上に位置している。祀霊原からの比高差は4m程で、洪積台地上に立地する穴観音古墳などとは全く立地を異にする。1号墳の北西約60mの地点にあたる。
墳丘	封土の東側半分を失い、上部も石室の石組みが露出している。残存する規模は20m×9mであり、本来は直径20m近い円墳であったと考えられる。周辺部のトレンチ調査によっても良好な形では周溝が確認できなかった。
石室	石室は右側側壁の奥壁側上部の石が抜け落ちており、空洞となっている。また、羨道部の石積みも半分が露出しており崩壊の危険が高かったため、調査は玄室部のみを対象として行われた。そのため、前室の有無や羨道部の形状については不明である。しかし、露出した石組みを見るかぎり、前室の天井石に相当するものは認められないため、単室かあるいは小さな前室を有するものである。 玄室は割張りの認められる2.4～2.8m×3.3mの長方形である。奥壁は一枚の鰐石を据えているが、上部と天井部の間には空間があることから、石棚状の石（疑似石棚）が玄室内に突出していたことも考えられる。側壁は、腰石を据えた上にレベルを整えながら持ち送っていき、隙間には比較的多くの板石が使用されている。 床面は、中央付近に奥壁と平行に障石をたて並べ、奥壁側には2.4m×2.7mの板状の平石を据え屍床としている。屍床部以外は床面に川原石を敷きその上に拳大の石を敷いている。
装飾	石室内は全面を赤色のベタ塗りにし、平坦に加工された奥壁にはその上から重ねて緑色で装飾文様を描く。文様は奥壁の中心付近に帯状に描かれている。下部に連続の複線山形文を描き、その上部に騎射像と同心円文を描くが、その他は何を描いているのかは不明である。従前には3つの円文があったとされるが、現在では1つしか確認できない。
発掘所見	この古墳の装飾は早くから知られていたが、石室が半分近く埋まっていたために詳細は判らなかった。発掘では床面まで掘り下げたことにより、奥壁の壁画が全て判明したが、緑色顔料の剥落により図柄の不明なものが多い。床面は埋葬時のままに保存されており、直刀が屍床上で原位置のまま出土するなど成果が得られている。周辺部は削平が著しく、明確な墳丘の復元は出来ていない。
出土遺物	須恵器、珠文鏡、直刀、馬具、鉄鏃、鏃、壺、銅剣、耳環、玉類などが出土している。6世紀後半代。
まとめ	石室は割張りのもので、全体は不明であるものの、明らかに筑後浮羽地方の影響下に出現したものである。玄室の状況は法恩寺山3号墳によく似ているが、法恩寺山3号墳に比較して大きな石を使用しており、新しい要素が窺取できる。この種の石室は、以後豊後地域では採用されなくなる。
参考文献	『ガランドヤ古墳群 大分県日田市所在装飾古墳の調査報告』（日田市教育委員会、1986年） (小柳)



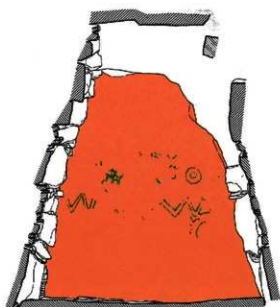
小糸レベルはC-Dは78.0m
差は80.0mである。



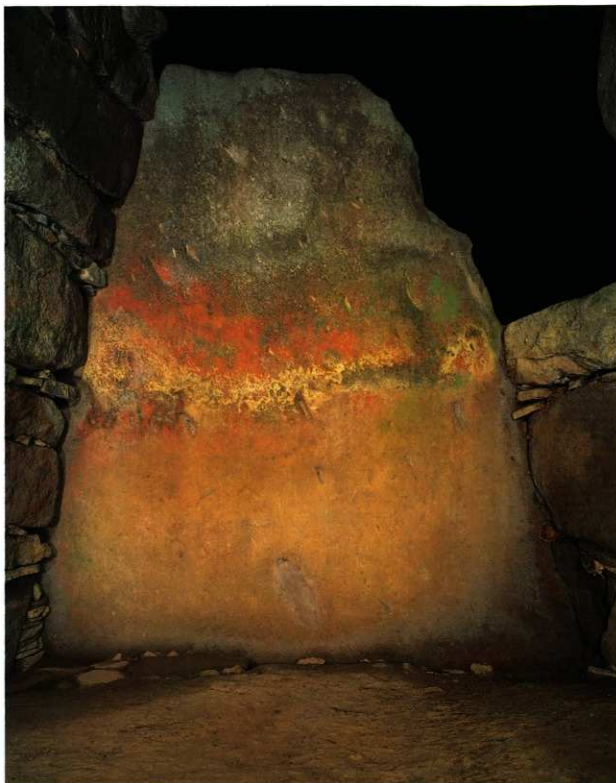
第17図 石室横断面図 (報告資料より転載)



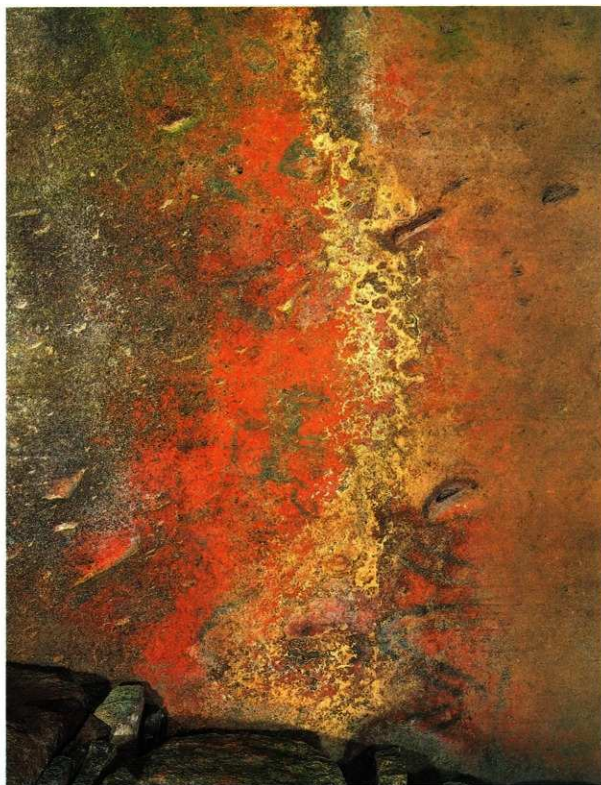
第18図 墳丘測量図（報告書より転載）



第19図 装飾実測図（報告書より転載、一部加工）



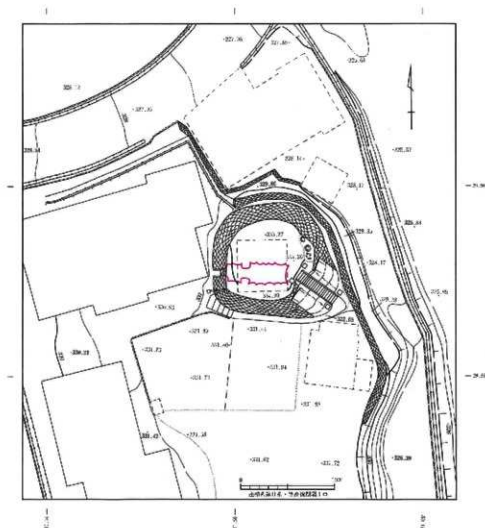
奥 壁



図版 (部分)

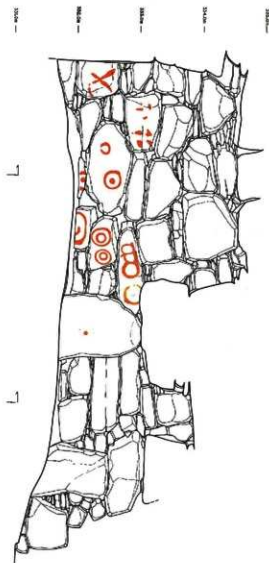
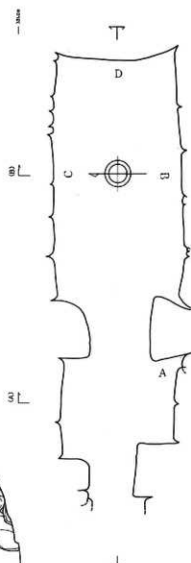
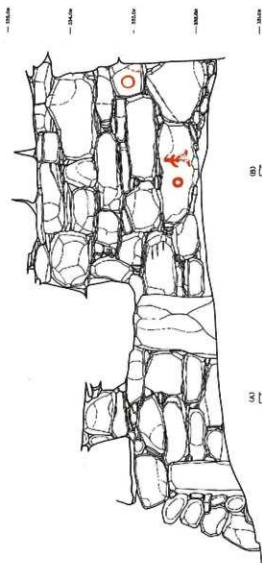
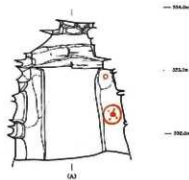
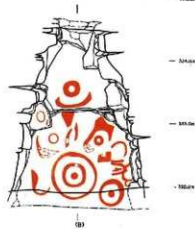
おにづか
5. 鬼塚古墳

位置	玖珠郡玖珠町大字小田字中通
指定	昭和28年4月20日 県指定史跡
立地	切株山の西麓に開ける扇状地の木端付近に位置しており、小さな谷を隔む丘陵部の先端に立地している。
墳丘	墳丘は周岡を削られ原形を止めていないが、現在は一応川原石によって周岡を全て覆われており、完全な崩壊は防がれている。現状では直径約12mで高さ約4mであるが、墳丘上で大井石が一部露出しており、墳丘の高さもさらに高かったことがわかる。また、墳頂には社殿が建っている。
石室	石室は羨道部を除いてほぼ原形を止めている。現存長3.6mで、複室構造を持つ。床面はかなりの土砂で埋まっており、腰石の確認は出来ないが、大きな石の使用は現状では認められない。平面プランは長方形で、やや埋まっていることを考慮すると、むしろの胴張りを持つと考えられる。この構造の石室は豊後ではほとんど類例がないが、福岡県浮羽郡吉井町周辺の古墳に近いと見られる。
装飾	装飾は前室と玄室を区切る右袖石の前室側(A)、玄室の右側壁(B)、同左側壁(C)、奥壁(D)の4カ所に見られる。Aには同心円文と思われるものが上下2つ描かれる。その内下のものは中心の円から4カ所外に向かって線が延びている。上のものは中心部の円文のみが残っており、外周のものは確認できなかった。Bには、現状で中央部付近から下位に描かれている。明らかに同心円文と思われるのは4つ(半分近く埋まっているものも加えて)で、他に円文とおもわれるもの2つと円文が3つ連なったもの、さらに図柄の不明なものも3カ所に描かれている。Cには円文が2つと人物の可能性のある図柄が描かれる。ただし、人物とするには余分な線があり、断定はできない。Dには中央下に大きな3重の同心円文が描かれ、その右下にも同心円文が、さらに右上と左上にも円文が見られ、その周囲には形状の不明な文様が描かれている。また、上の石には中央に円文が描かれ、その下に弧状の文様が描かれる。弧状の文様は他例から察して船を描いたものと考えられる。これらは基本的に赤色であるが、一部白色あるいは黄色の可能性のある顔料で塗り分けられている。
まとめ	鬼塚古墳は周知の装飾古墳でありながら、正確な測量図がなかったために、あまり取り上げられることはなかった。今回の測量調査の結果、筑後川上流の内で最も東部に位置する彩色古墳の実態が明らかになった。装飾は同心円文の多用と船の絵柄など基本的に筑後浮羽地方の伝統に則っており、日田地域ののびのびとした自由画風の絵柄と比べるとやや型式的である。巾の狭い石室のプランも、日田地域のものとは異なる。
参考文献	【大分県史料 (20) 第六部考古資料】(大分県史料刊行会、1961年) (小柳)

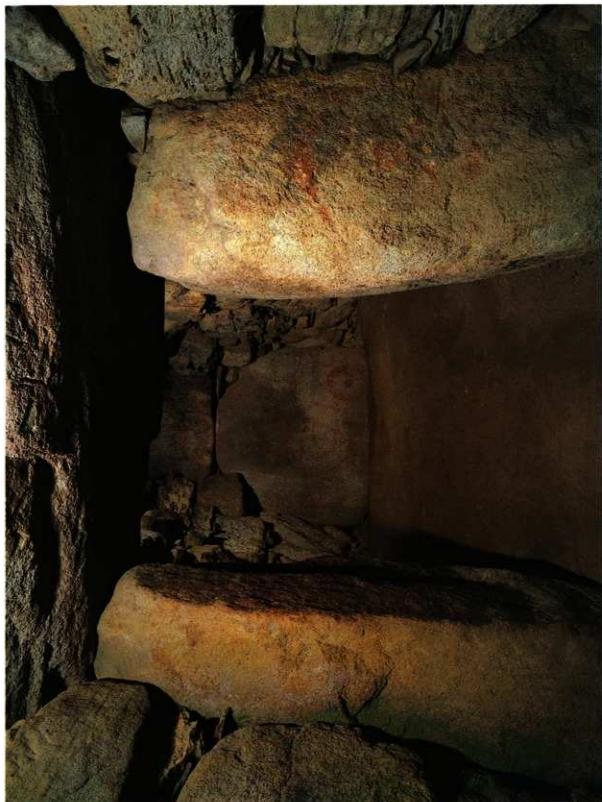


第20図 古墳周辺の地形図

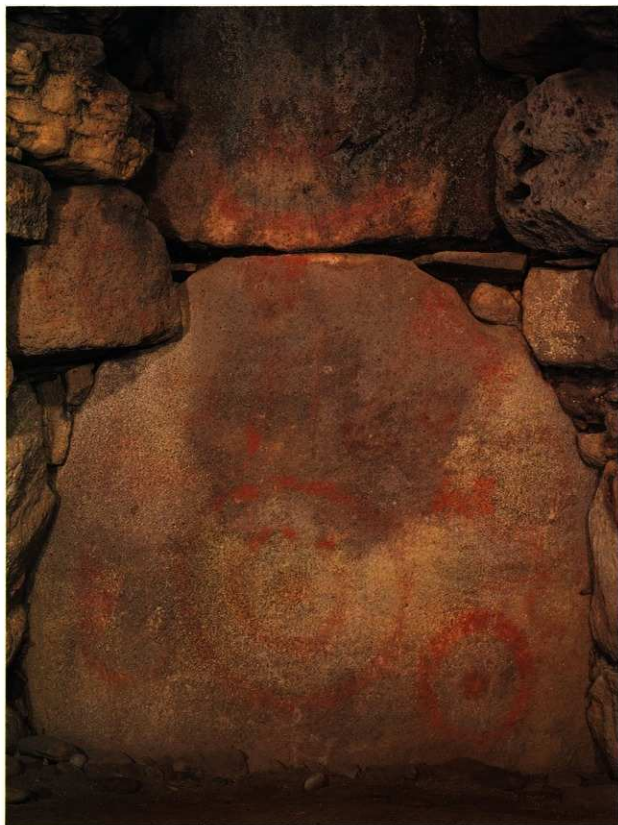
鬼屋古墳



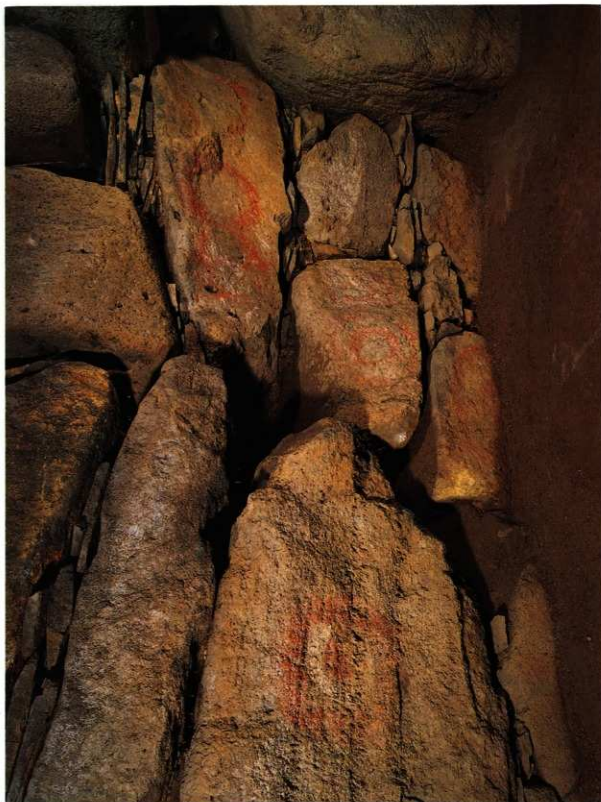
第21図 石室実測図



前室から玄室を望む



奥壁



玄室 右側壁（部分）



右側袖石（前室から玄室側を望む）



玄室 右側壁（部分）



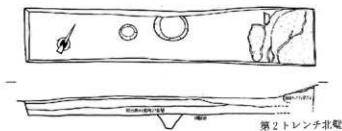
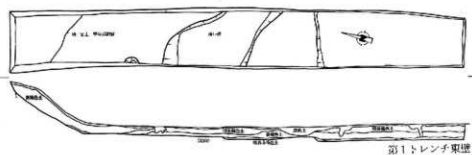
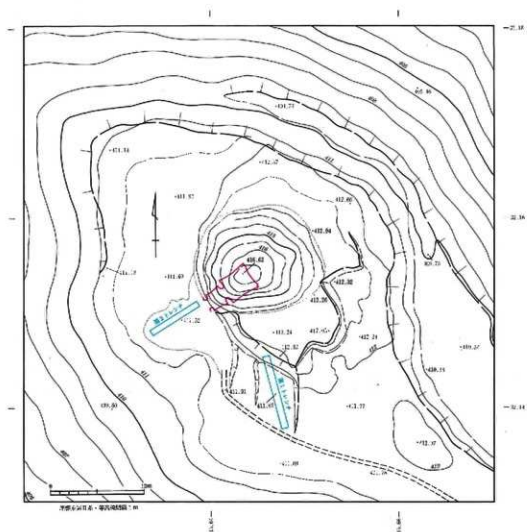
玄室 左側壁（部分）



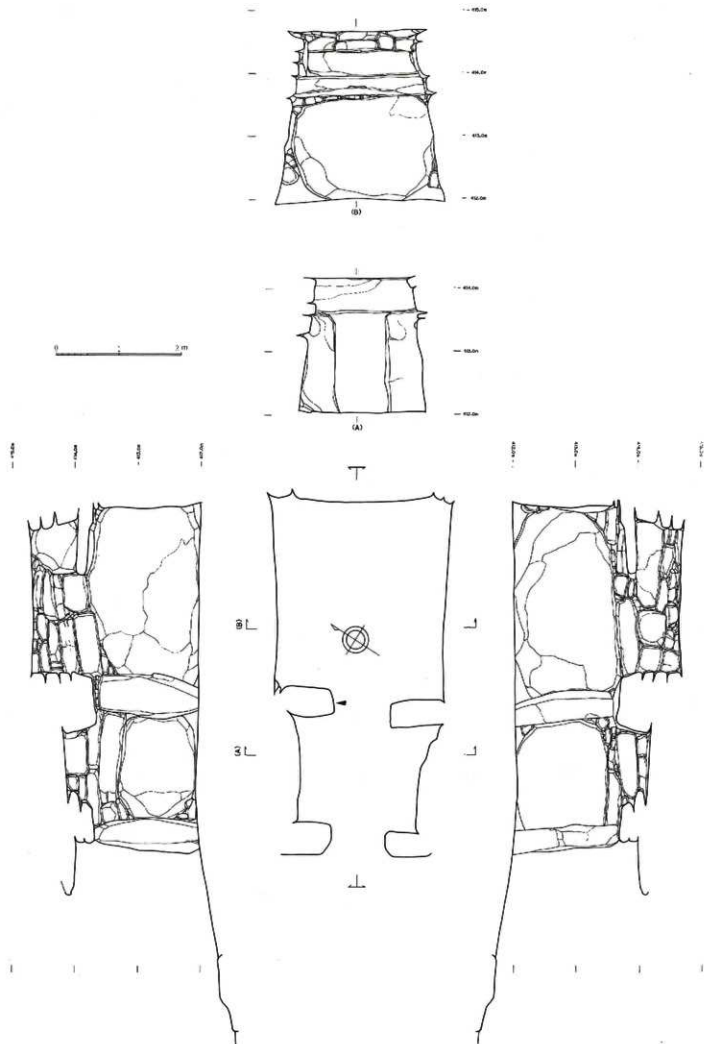
玄室 左側壁（部分）

6. 鬼ヶ城 古墳

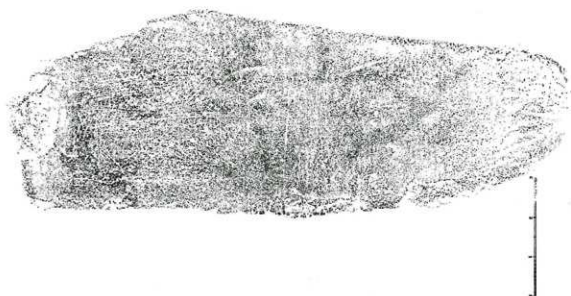
位置	玖珠町大字帆足1980
指定	昭和24年10月25日 県指定史跡
立地	玖珠川（筑後川）とその支流である森川の合流点から北側、すなわち森川に沿って約1km遡った標高410m近い丘陵上に立地している。沖積地からの比高差は70mほどある。古墳からは沖積地を望むことは出来ない。
墳丘	古墳の周囲は植林の杉林であったが、昭和63年9月の台風19号により全て倒され、墳丘にも大きな傷痕を残した。幸い墳丘上の杉は幹の途中で折れたため倒壊は免れたが、墳丘裾部の杉は悉く倒壊し、大きく地山を持ち上げている。そのため裾部の形状が変わってしまった部分もあるが、現状で概ね直径南北11m、東西14m、高さ約5mである。墳丘周囲に設定したトレンチでは周溝が確認できなかった。
石室	現存長2.8mの複室構造の横穴式石室である。前室、玄室ともに腰石に高さ2m近い大きな石を用い、上部はゆるやかな持ち送りで箱形に近い。天井石は前室、玄室とも1枚である。奥壁はやはり1.5m近い鏡石を据え、その上部には石棚を突出させる。その上部は3段に平積みしている。床面はやや土砂の堆積があるものと思われる。
装飾	前室と玄室を画する左袖石の通路側の面に線刻で描かれる。石の表面は平滑で、全面に線刻が認められるが、明確に形状が判るのは下部に描かれた「木の葉」だけである。以前の報告では、「人物」や「群鳥」、「舟」なども見られたというが、今は確認することが出来ない。ただし、現状では明らかに追刻と認められる線も確認できなかった。
発掘所見	墳丘周囲に周溝を確認する目的でトレンチを2ヵ所設けたが、いずれも確認する事が出来なかった。第1トレンチではトレンチ北側の1.5m近い段差が何に由来するものなのかを確認する目的もあったが、高まりは地山であることと段差は明治以降に作られた可能性が高いことがわかった。第2トレンチでも表土中から多くの明治以降の陶磁器が出土し、明治期に大きな削平がなされたことが推測された。
出土遺物 まとめ	以前周辺で表採された須恵器があるが、この古墳に直接伴うものであるかどうかは不明である。筑後川流域では類例のない線刻壁画を持つ古墳である。「木の葉」文様などむしろ周防灘沿岸の諸古墳や横穴墓に類似する要素であるが、石室が石棚を持つなど福岡県南部から熊本県北部にかけての石室構造との類似が指摘できる。この種の石室は大大分市千代丸古墳（線刻壁画）にも認められ、やはり筑後川経由での影響を考慮すべきであろう。
参考文献	賀川光夫『大分県の考古学』（古川弘文館、1971年） (小柳)



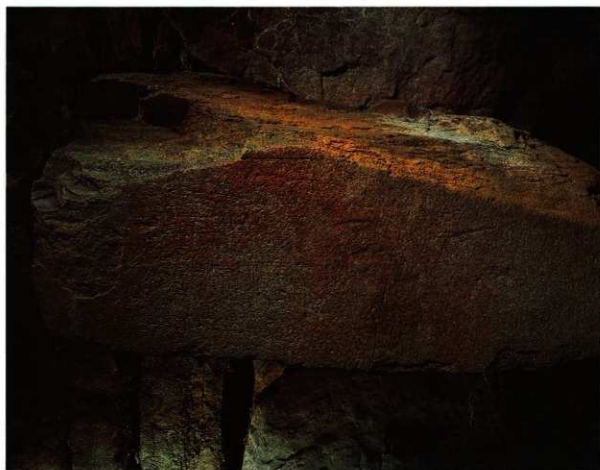
第22図 墳丘測量図とトレンチ実測図



第23図 石室実測図 (欠印が線刻のある部分)



第24図 縁刻石影図



左側棺石



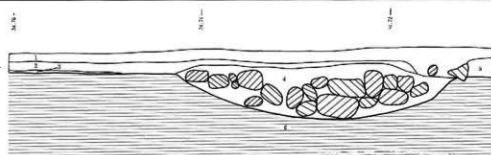
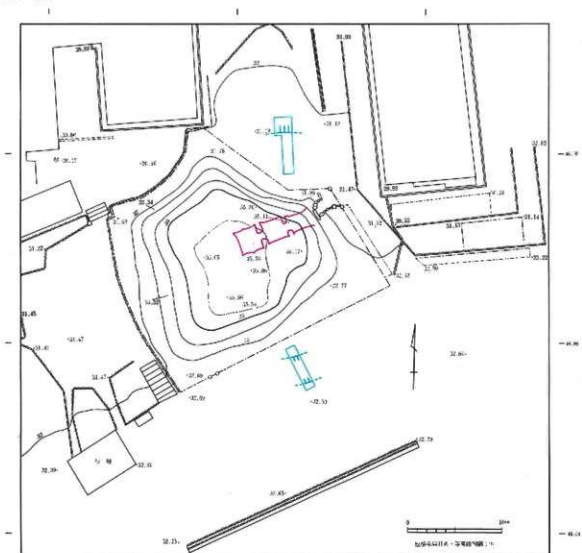
墳 丘（中央部・北東から望む）



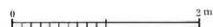
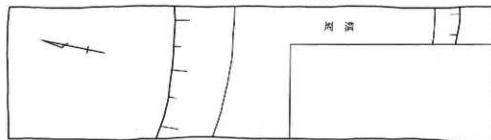
石室羨門前調査状況（周辺の木は台風による風倒木）

7. 鬼の岩屋1号墳

位置	別府市大字北石垣字塚原172番地
指定	昭和33年11月28日 国指定史跡
立地	別府市の南西にある春木川と平田川に挟まれた標高30m前後の西南側に高くなった扇状地形の上に構築されている。
墳丘	墳丘は、現状で直径約20m、高さ約6mである。墳丘上には少なくとも3段にわたって列石が円形に巡っている。 今回の周溝確認調査によって、南側では現状で幅3.0m、深さ0.4mの周溝が、北側では幅2m以上、深さ0.2mの周溝の一部が確認された。このことから本古墳は、直径24m、高さ6mに想定できる。
石室	石室は複室構造の横穴式石室で、羨門付近が一部崩壊しているが全長は7.7m、羨道の幅1.6m、長さ2.2m、前室の幅2.2m、長さ2.2m、玄室は幅2.5m、長さ2.2m、現状の床面からの高さは玄室で3.1m、前室で2.5m、羨道で1.5mを測る。平面プランは玄室と前室がほぼ同規模の方形であり、前後室とも幅がほとんど変わらないのが特徴である。玄室奥壁に平行して幅1.6m、長さ0.6m、高さは現状で1m前後の石段形を付設している。側壁は最下部に大きな腰石を据え、その上に比較的大きな石をやや持ち送りながら平積みする。割り石の使用はそれほど多くない。奥壁は大きな親石を据え、その上に比較的大きな石を重箱積みしている。
装飾	装飾は、前室の奥壁に向かって右側壁と前室と玄室の間の袖石に描かれている。右側壁は腰石上面に黄色で山形文様を連続して10個描いている。また、袖石前面には上面に黄色で穀、穂、弧状の文様、下面に黒色で三角文を中心に弧状及びS字状文様が描かれる。
発掘所見	今回の発掘では南北両トレンチで周溝が確認された。その結果径24mの円墳であることが推定できる。
出土遺物	北トレンチ掘削土中から須恵器甕胴部小片が出土した。時期は6世紀末前後のものである。
まとめ	本古墳は県内最大規模の横穴式石室であり、墳丘の保存状態も良い。ただし、石室内の石が部分的に割れているところもある。床面に堆積土が多いところから正式な発掘調査を行い、その結果で保存措置等を考えるのが望ましい。
参考文献	坂田邦洋・宇都宮英治・遠藤和幸「鬼の岩屋1号墳の壁画について」『別府大学紀要』第27号（別府大学、1986年） (村上)



1. 石室の内部（石室の内部）
2. 石室の内部（石室の内部）
3. 石室の内部（石室の内部）
4. 石室の内部（石室の内部）



第25図 墳丘測量図及び南トレンチ実測図

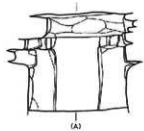
30.14

30.14

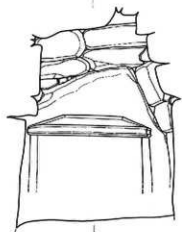
30.14

30.14

30.14



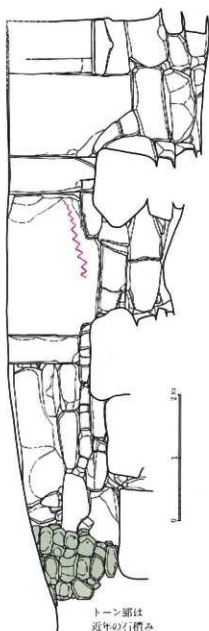
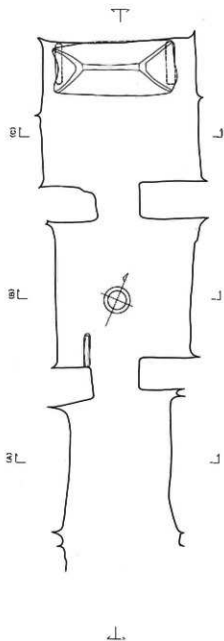
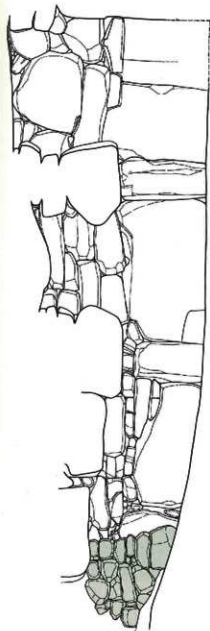
(A)



(C)

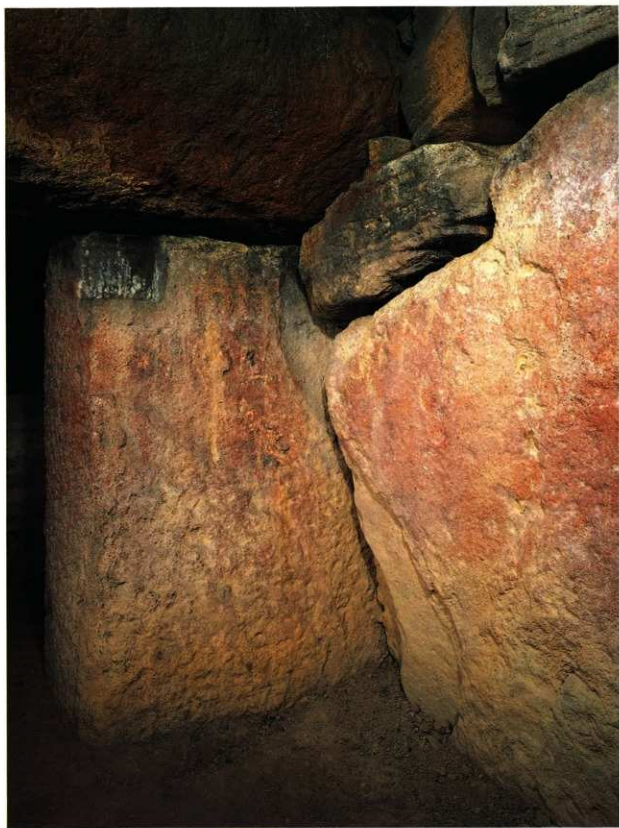


(B)



トーン部は
近年の石積み

第26図 石室測量図 (石屋形の屋根は復位)



前室右側壁から右側袖石にかけて



前室右側壁（部分）



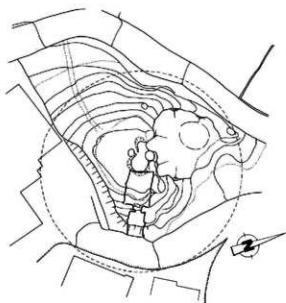
前室から後室を望む



周溝検出状況（南トレンチ）

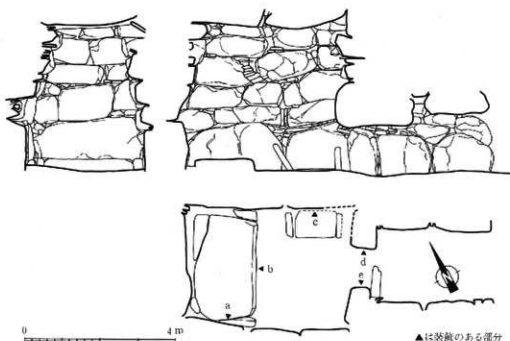
8. 鬼の岩屋2号墳

位置	別府市大字北石垣字塚原132の1
指定	昭和32年11月28日 国指定史跡
立地	1号墳の南西100mの所に位置している。南側墳裾は宅地によって大きく削平されている。古墳は西南側に高くなった扇状地形の上に築造されていると考えられるが、道路や住宅によって囲まれているために、現状では周溝などの施設については確認できない。
墳丘	墳丘は土取りと隣接する住宅によって、なだらかな裾部まで観察することのできるの墳頂から西側の部分だけで、およそ全体の1/4にあたる。墳丘と石室の位置関係は玄室奥壁の中央あたりを墳丘の中心として築造された可能性が高い。そう考えた場合墳丘規模は直径30m前後、高さ6m前後と推定される。
石室	石室は単室構造の横穴式石室である。東南方向に開口し、後門付近が一部破壊されていると考えられるが現存長約8mである。後室部は長さ3m、幅1.8mを測る。玄室とを隔てる袖石の外側には、奥壁に向かって左側だけ扉石が残存している。扉石は縦向き構造と考えられ、中央部に合わせ目加工されている。玄室は幅3m、長さ4.2mとやや縦長の長方形を呈す。天井は現状の床面からの高さは玄室で4m、後室で1.5mと玄室天井の高さが目立つ。屍床は奥壁に平行して幅1.8m、長さ2.8m、厚さ0.4mの巨大な板石を敷いたものと側壁緩道寄りの所に幅1.7m、長さ0.7mの床石を敷き、その左右に高さ0.6mの側壁を立てた石室形状の小型の「つが」認められる。石室の構築法については側壁に大形の腰石を横長に据えて、その上に巨石を平積みし隙間に削石をつめていく。縦断面の石積みはほぼ垂直に近い箱形石室形を呈する。奥壁も大形の腰石を横長に据えて、その上に巨石を四段レンガ状に持送り積みをしている。
装飾	装飾は玄室左右袖石（a）、d、玄室右屍床中の側壁（c）、中央屍床の正面（b）、屍床中央左腰石から一段目の側石（e）の5カ所に認められる。石室内は全面的に顔色顔料を塗布していたとも考えられるが、現状では腰石部分しか明瞭でない。 壁面は黒色顔料を用いて描かれているが、複雑な文様が多く全部は理解できない。次にそれぞれの個所の装飾文様を現時点で理解できる範囲で観察する。まず、屍床正面（b）は邪視文の穴（深さ10cm程度）を中央に掘込み、それを中心に右・左約1mの範囲に文様が描かれている。邪視文上面には楕（？）の文様が、またその左側には動物（馬？）が、さらに左側には横方向の双脚輪状文様が認められる。これ以外に獣手状文様が全面に見られるが、部分的に埋もれた個所もあり現状では何を描いているのか把握するのは困難である。左側壁（a）には同心円文が二つ並列して描かれており、これが本古墳の装飾文様中最も明瞭である。玄室右屍床の側壁（c）の文様は屍床に付随する文様として理解できる。中央に左右対称で棒状の縦方向直線の横に三角文を三個描き、その空間に唐草文の文様が認められる。その下位には上部に4本の突起がある四角形文様が描かれている。その形状から穀とも考えられるが1号墳のものとは比べ短く描かれているので若干問題が残る。他は獣手状文様が描かれている。玄室右腰石中央下面（d）には獣手状文様が6個前後、左腰石（e）には上部に唐草を下部に扇状に並んだ円文三個を縁で結んだ文様が認められる。
出土遺物	昭和19年に真野和久氏が石室の発掘調査を行った時に6世紀後半の須恵器杯の破片を採集している。
まとめ	本古墳は玄室規模の巨大さ、中心屍床の大きさとその装飾文様の変化に富む様相などまだ解決しなければならない課題も多い。また、天井部が部分的に開口しており、床面も堆積土が多く一部装飾文様も確認できない。さらに墳丘も明確でないところから保存整備に向けた調査が必要であろう。
参考文献	坂文邦洋・副枝幸治「鬼の岩屋第2号墳の壁面について」『別府大学紀要』第26号（別府大学、1985年）（付1）

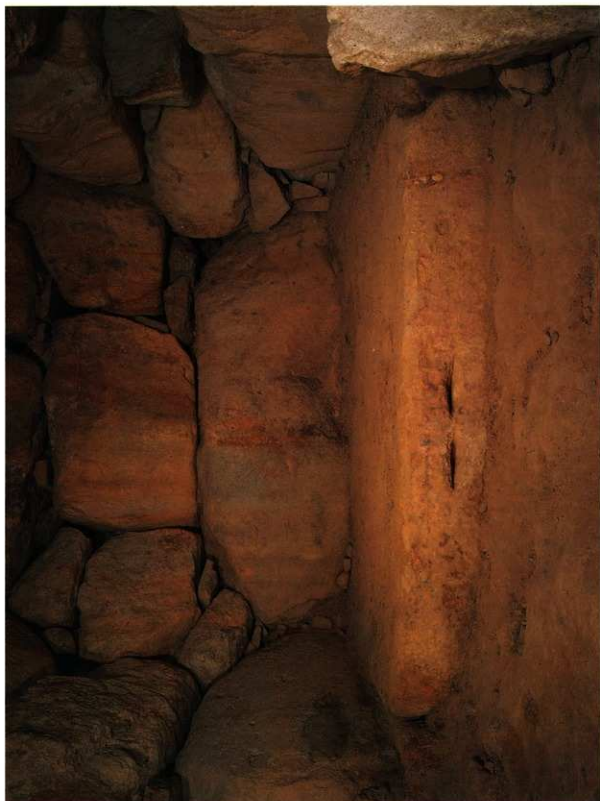


(コンタは50cm間隔)

第27図 墳丘測量図 (『別府市史』より転載、縮尺不詳)



第28図 石室測量図 (『別府市史』より転載、一部加筆)



玄室部床 (b)



右側壁（小型石室部分、c）



女室左側壁 (a)



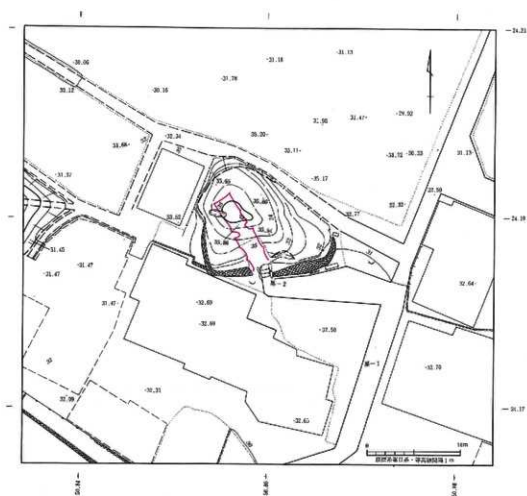
左側袖石 (e)



扉状側面 (b)

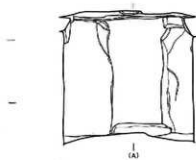
9. 千代丸古墳

位置	大分市大字宮苑字千代丸595の4
指定	昭和9年5月1日 国指定史跡
立地	大分川の支流である賀束川の流域に開ける狭く細長い平野の左岸に形成された河岸段丘上に位置する。沖積面との比高差は約5mほどあり、古墳は沖積地を見下ろす段丘の端部付近に立地する。背後の丘陵との間には巾約300mの平坦地が展開する。
墳丘	墳丘は北側半分を水田により周囲を削られており旧状を止めないが、現状で直径約11m、高さ4.5mである。復元すると直径15m以上になろう。墳頂部は一部石室の石が露出している部分があり、本来はさらに高かったことがわかる。
石室	墳丘の南南東方向に開口する単室の横穴式石室である。全長は4.3mで、玄室部分は長さ1.7m、巾0.95m、羨道部は現存長2.1m、巾1.0mである。羨道部、玄室とも床面からの高さ0.6～0.9m、巾0.7～0.9mの大きな腰石を据え、上部には横長の石を平積するが、持ち送りは顕著ではない。奥壁は床面からの高さ0.65mの鏡石を据えた上に、内側に向かって0.6mほど一枚の平石を突出させ石棚につくる。 床面は玄室奥壁側2分の1が平石を用いて一段高められ、石棚の下部はさらに一段平石を据えて高くしている。一見すると、石棚の位置が低いこととあわせ、石屋形のごとく見える。
装飾	装飾は石棚の前面部分と右側側壁の奥側に見られる。前者は複線の山形文を波長をずらして2重に重ね合わせたもので、三角の内部に長方形の文様を描いている。また、人物が2人と動物が1体描かれている。また、側壁には縦長の長方形が描かれている。これらは全て線刻で、その内部に赤彩が入り込んでいることから、線刻の後に赤彩を行ったことがわかる。石棚の文様は佝僂を描いたものではないかとの見方もあるが、幾何学文である連続三角文に人物や動物を描き足したと見るほうがよからう。
まとめ	大分市域では唯一の装飾古墳で石棚を持つなど、特異な古墳である。装飾文様は山形文と人物、動物と、豊前南部にみられる白山奔放な線刻壁画とは一線を画する。むしろ、その石室構造といい、筑後川流域から肥前地域の影響下に出現したものと考えることができよう。(村上)



第29図 墳丘測量図

千代丸片積



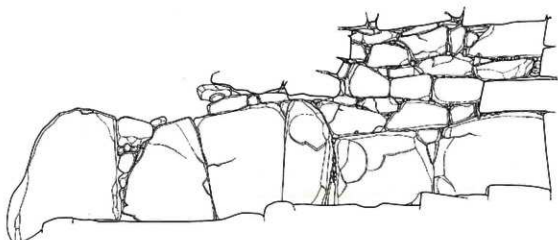
(A)

— 10.0m —
— 15.0m —
— 20.0m —
— 25.0m —
— 30.0m —



(B)

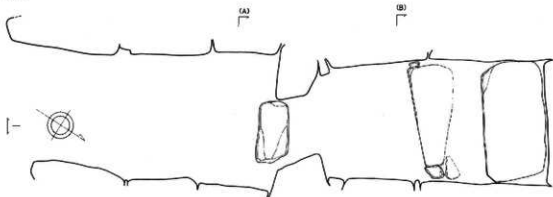
— 30.0m —
— 25.0m —
— 20.0m —
— 15.0m —
— 10.0m —



(A)

(B)

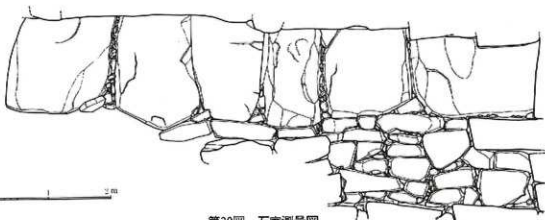
— 10.0m —
— 15.0m —
— 20.0m —
— 25.0m —
— 30.0m —



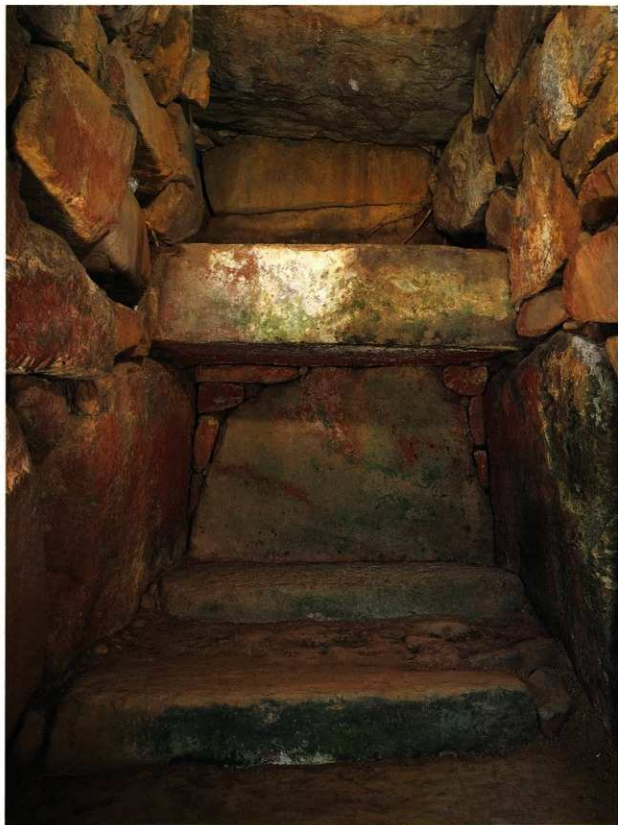
(A)

(B)

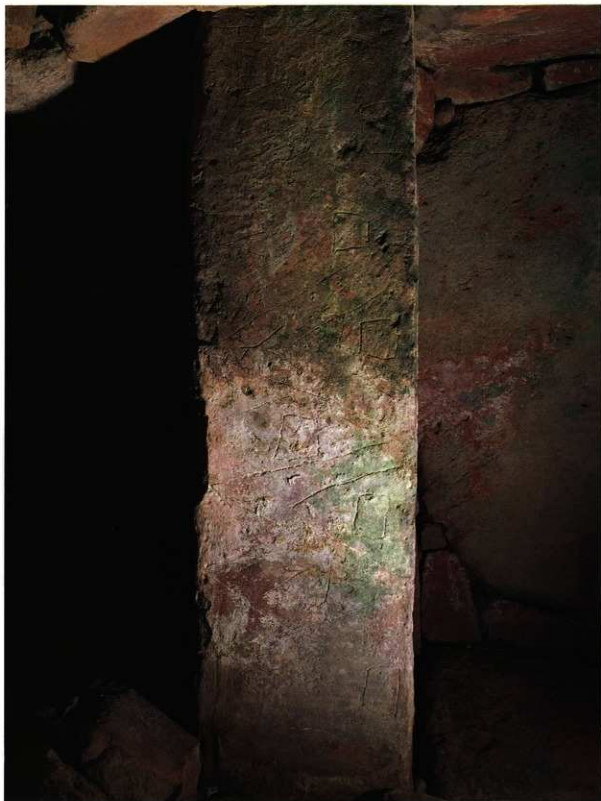
— 10.0m —
— 15.0m —
— 20.0m —
— 25.0m —
— 30.0m —



第30図 石室測量図



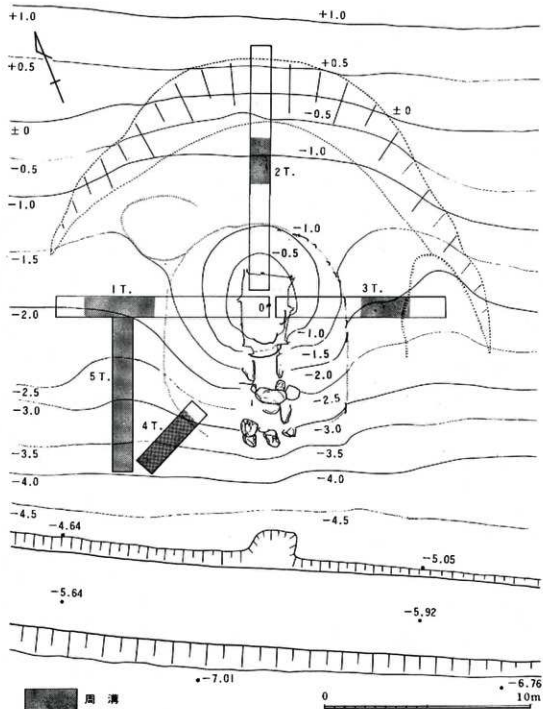
玄室



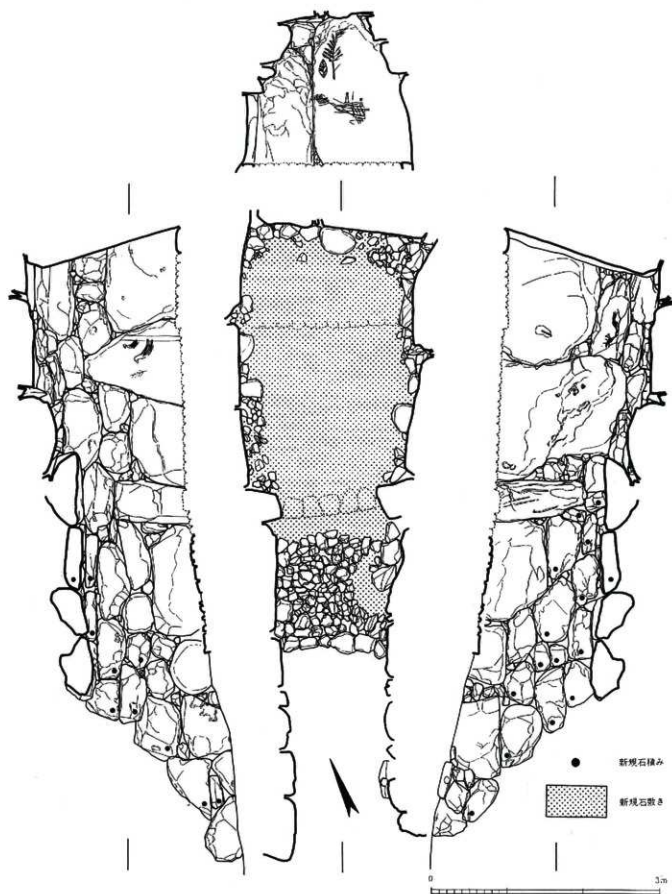
石室の墓石

10. 伊美鬼塚古墳

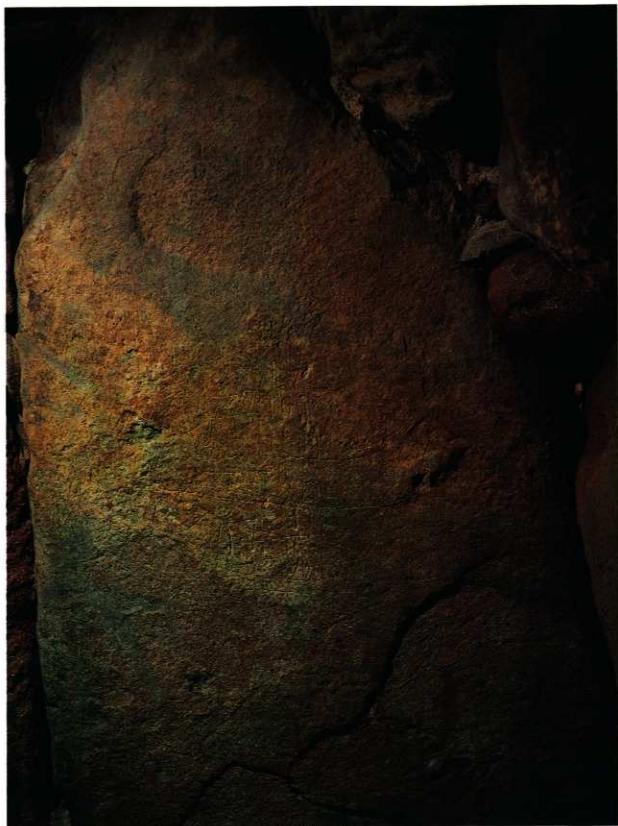
位置	東国東郡国見町大字中2428 1
指定	昭和32年11月28日 国指定史跡
立地	国東半島北端部の標高110mの丘陵先端頂部付近に位置しており、11基で構成される西山古墳群の内の1基である。海岸線からは1km近く内陸部に入るが、丘陵頂部からは瀬戸内海を望むことが出来る。鬼塚古墳は南面する丘陵緩斜面に立地している。
墳丘	墳丘は南北13.4m、東西10.2mほどの楕円形を呈しており、外周には幅2.5～3m、深さ0.4mほどの馬蹄形の周溝が巡る。古墳が緩斜面に作られていることから、墳丘の高さを復元すると正面からの見かけの高さは約4mになるのに対して、背後から見ると2mほどしかないことになる。
石室	幅約1.3～1.5mで長さ約4.2mの羨道部を持つ両袖式単室の横穴式石室である。玄室は奥壁側の幅が2.3m、長さが3.8mの長方形を呈するが、僅かに奥壁側で幅が広がる。羨道部まで含めた長さは約8.5mとなる。 奥壁には縦長の2枚の鏡石を据え、内側に強く傾斜させている。側壁も大型の腰石の上に持ち送りながら平積みしている。床面は本末的には敷石があったが、後世の擾乱により一部しか原形を止めていない。
装飾	奥壁と左右の側壁の計3カ所に線刻画が描かれている。しかし、「線の重複が非常に多く、一つひとつの図柄の抽出が明確に出来にくいことと、古墳造営期の図形と後世の追刻（落書）とを区別することがきわめて困難である」ということから、当初の装飾文様の確定には困難が伴うが、一応報告書に沿って記しておく。奥壁には「樹木」「木の葉」「舟に乗った人物」「葉」が、左側壁には「鳥」と明確ではないが「木の葉」「樹木」「櫓あるいは櫓をもった舟」が、右側壁には「二羽の鳥が嘴を接して向かい合っている」図が描かれている。
発掘所見	発掘は崩壊しかかった石室の修復と墳丘規模の確認を主な目的として実施され、石室床面からの遺物の出土や周溝の確認など成果があがっている。特に羨道部からは良好な形で多くの須恵器が出土しており、6世紀末頃の築造であることが知られた。
出土遺物 まとめ	耳環、太刀、太刀金具、鉄鏃、弓付属金具、須恵器、土師器などが出土している。 国東半島先端部付近に立地する線刻画を有する横穴式石室墳である。線刻画は海に開けた立地条件（直接的には海が望めないが）によってか、舟に乗り櫓を漕ぎながら漁労をする様子を描くといった写実的なものである。他の古墳にみられるような死後の世界（黄泉の国）観を表現したものは異なる。生き活きたとした鳥の表現といい、山山闊達な海人社会の存在を思わせる。
参考文献	『鬼塚古墳保存修理報告書』（大分県東国東郡国見町、1986年） （小柳）



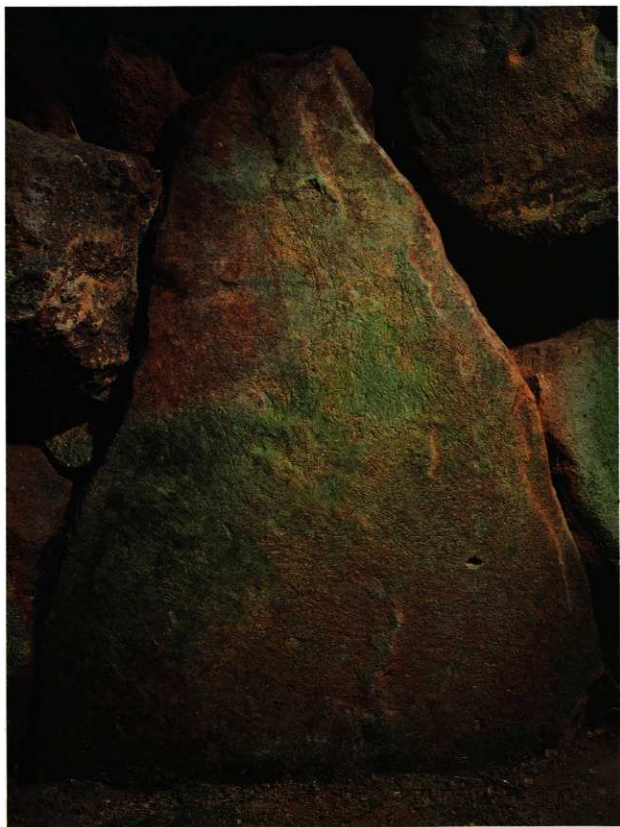
第31図 墳丘測量図 (報告書より転載)



第32図 石室測量図 (報告書より転載)



玄室奥壁（部分）



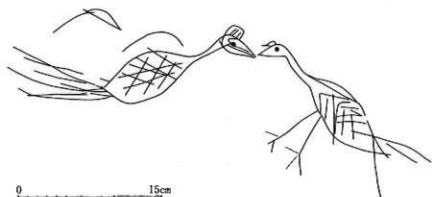
玄室左側壁（部分）



玄室右側壁（部分）



第33図 奥壁の線刻（報告書より転載）



第34図 右側壁の線刻（報告書より転載）



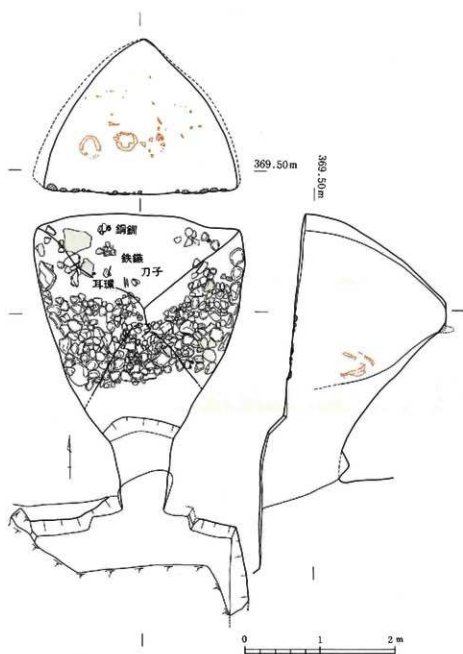
第35図 左側壁の線刻（報告書より転載）

11. 鷹巣4号横穴墓

位置	玖珠郡玖珠町大字帆足字鷹巣
指定	未指定
立地	鷹巣横穴墓群は、玖珠町大字帆足に所在する横穴墓群で森川右岸に位置する台地の南側崖面に開いている。
構造	前庭部の大半はすでに破壊を受け形状等不明であるが、羨門付近で残存0.9m、最大幅3.05mを測る。また、羨門付近では直角に曲り幅1.5mを測る。 羨門はすでに開口しており、閉塞の状態は明らかではない。天井は若干崩落しているが床面幅0.55m、高さ0.2m前後の蒲鉾形を呈している。 羨道は長さ1.4m、玄門幅1.2mとやや長く玄室に向かって広がっているのが特徴である。玄室との境には20cm程の段差がある。 玄室内部の規模は長さ3.15m、奥壁幅3.15mを測り、形態は無軸の隅丸台形を呈する。主軸の方位N-1°-Eである。天井部の形態は四柱寄棟形を呈し、中央付近の横断面形は丸みを帯びた三角形で天井高2.0mを測る。床面は人頭大の安山岩質河原石、玄武岩質板石、卒大の河原石を敷いている。板石は赤色顔料を塗布した長さ1.5m、幅0.4~0.5m大のものが数枚出土したが、玄室内清掃中に不用意に持ち出された。その出土地点から推定して玄室奥壁付近左側に石障のあった可能性が高い。石障内部は板石は認められない。なお敷石は玄門付近には無いが、これは後世に抜き取られたと推定される。
装飾	装飾文様は玄室右側壁・玄門ぎわおよび奥壁に赤色顔料により描かれている。右側壁のものは床面から80cmの所に長さ50cm、幅40cmの範囲に両手を上げた人物像らしき物が認められるが、これは最初に赤色顔料で輪郭を描きその内側を金属器で塗り込んでいる。奥壁のものは剥落が激しいが、横線を2本引き、三段に区画しその内部の下段に円文3個が中・上段に鉤文と思われる斜線の一部が認められる。また、板石及び敷石にも赤色顔料による文様状のものが認められたが図形は明確でない。
遺物	遺物としては馬具、鉄鍬、刀子、銅釦、耳環、ガラス玉等が出土している。時期は横穴墓の形態から7世紀初頭前後のものと考えられる。
まとめ	本横穴墓は調査後人口部を土塞によって閉塞しており一応の仮保存処置ができています。今後は、再度玄室の彩色を確認しその状態の変化を確認する必要がある。
参考文献	『鷹巣横穴墓群』（玖珠町教育委員会、1993年） (村上)



第36図 鷹巣横穴墓群（報告書より転載）



第37図 第4号横穴墓測量図（報告書より転載）



图 4-1-1



右側壁

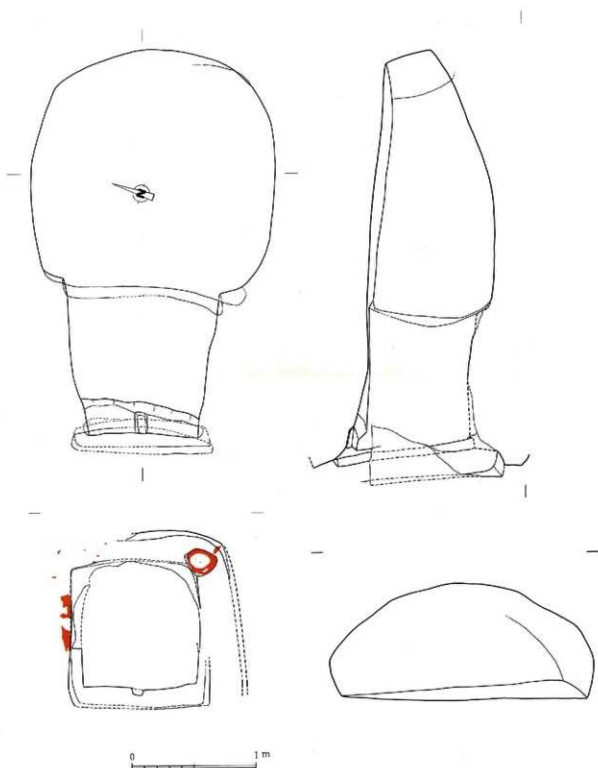


玄室全景

12. 城山装飾横穴墓

位置	中津市大字伊藤田字城山
指定	未指定
立地	中津市の東部を流れる大丸川東岸の丘陵上に位置する。この丘陵は八面山から北方向にハツ手状に延びるものの一つで通称城山丘陵と呼ばれている。この丘陵上には南側から7世紀中頃・後半の須恵器窯跡・瓦窯跡や6世紀前半前後の城山古墳群、中世の土塁の残る城山城跡などがある。
構造	横穴墓群は丘陵の西側斜面中腹に約50基築造されている。装飾のある横穴墓は群のほぼ中央にあり、周辺には入口底部のみを赤色顔料で全面塗ったもの、玄室内を赤色顔料で全面塗ったものなどがある。
装飾	装飾横穴墓は西方向に開口する。全長は約3.2m、玄室主軸方向はN-78°-Wを測る。入口は方形に枠取りした二重庇構造になっている。入口一重目の前面は右上部の庇しか残っており規模等は不明である。二重目の前面幅は1.1m、高さ1.2mを測る。羨門は天井部が落斜しているため高さは明らかでないが幅は0.9mを測る。羨道は長さ1.1m、幅は羨門部で0.8m、玄門部で1.2mを測る。玄門は高さ0.8mの藩錐形を呈す。玄室平面形は袖部を有する隅丸方形で袖部幅1.6m、奥壁幅1.45m、長さ1.9mを測る。縦断面形は高さ0.4mの低い奥壁を形成し、天井は羨門近くが最も高く1.0mを測る。羨門天井とは明確な段を持つ。
装飾	装飾は入口一重目の玄室に向けて右側上段に明確なものが認められる。文様は赤色顔料で地山に露頭した岩を縁取りするように大型の杏仁形文様を描いている。その右上にも三角形の文様がある。左側上位から中位にかけての赤色顔料を塗布した部分があるが文様等は明らかでない。
まとめ	本横穴墓から肩部にボタン状の浮文のついた小型の埴瓶が出土したと伝えられていることや、横穴墓の形態から6世紀末前後の時期が推定される。
	本横穴墓は覆土などの保存施設もなく、周辺は平成3年の台風19号によって風倒木が散乱している。さらに横穴墓にはシダゴケが付着して装飾文様を崩壊させる原因にもなっている。また、周辺には入口部や玄室全体に赤色顔料のついた横穴墓がある。したがって保存対策と地形測量図作成を含めた組織的な調査が望まれる。

(村上)



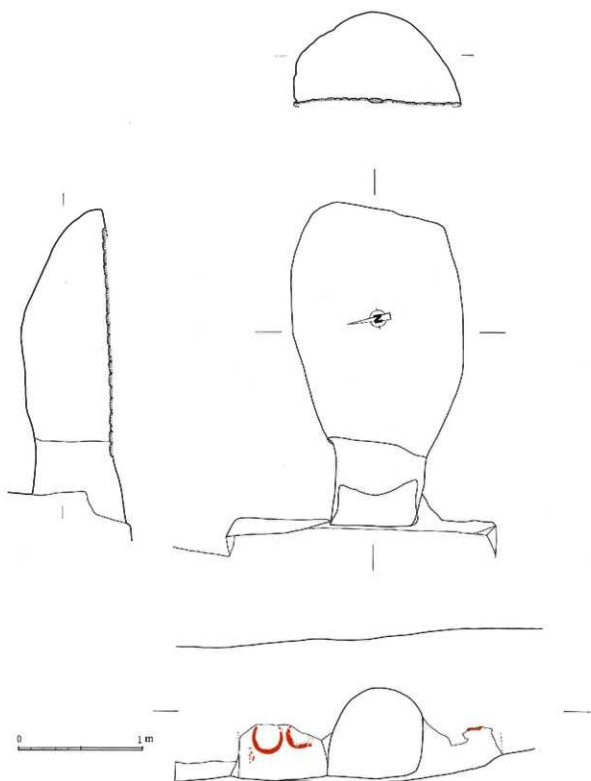
第38图 装饰横穴墓测量图



墓門部裝飾

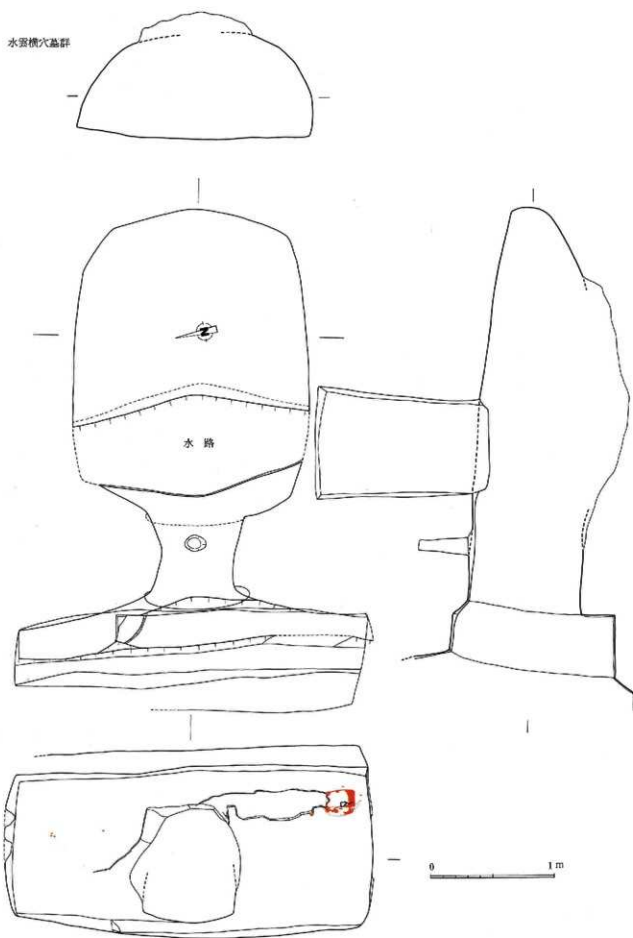
13. 水雲横穴墓群

位置	宇佐郡院内町大字上副字水雲
指定	未指定
立地	恵良川東岸の通称「城山」と呼ばれる丘陵下部の崖面に、ほぼ南北に1列に並ぶ形で横穴墓が築造されている。周囲は藪となっており正確な数は不明であるが、『院内町誌』作成のための調査では47基の横穴墓が確認されている。
A号横穴墓 構造	装飾横穴墓は確實なものは2基、さらに大部分が崩落しているものの赤色顔料の認められるもの2基が確認される。それらを、仮に南側（崖に向かって右側）からA号～D号とするが、今回測量調査を行ったのはA号とD号であり、それについて以下記述する。 A号横穴墓は西方向に開口する。全長は約2.8mである。玄室主軸方向はN-105°-Wを測る。入口は一段の方形に枠取りした庇構造になっている。入口一重目の前面幅は2.1m、現状の高さは0.8mを測る。羨門は幅0.7m、高さ0.7mを測る。羨道は長さ0.6m、幅0.7mの略方形である。玄室平面形は長さ1.9m、幅1.4mの長方形を呈する。
装飾	装飾は一重目の前面左右に描かれている。しかし、岩質が脆く剥がれやすいために、上半部が完全に剝落しており、文様としては辛うじて左側に「門文」が2つ確認されるにすぎない。右側の文様は不明である。これらは十数年前までは完全な形で見えていたと言われ、急速に剝落が進んでいることが予想される。
D号横穴墓 構造	D号横穴墓は西方向に開口する。この横穴墓は水雲横穴墓群の中では比較的良好に残っている。玄室主軸方向はN-106°-Wを測る。入口は一段の長方形の枠取りをした庇構造となっているが、上部のみ二段となる。前面幅は2.8m、現状の高さ1.3mを測る。羨門は幅0.7m、高さ0.9mを測る。羨道は長さ0.6m、幅0.6mの正方形である。玄室平面形は長さ2.4m、幅1.9mの長方形を呈する。
装飾	入口部前面の壁面に赤色顔料で描かれるが、岩肌の剝離が著しく、右側上部と左側のごく一部に赤色顔料が残存しているにすぎない。前者の下半の弧状は明確に認められるので、ベタ塗りの円文の可能性が高い。ただし、上半部が方形に近く復元できる可能性も残り、別のものを描いた可能性も残されている。後者は点状で残っているに過ぎないため何を描いたかは不明である。
まとめ	岩の性質が脆いことと、江戸時代に崖面の横穴墓を縫って水路が構築されているために残存状況は極めて良くない。装飾そのものも前述したようにここ十数年で剝落が進み、このままの状況であれば、近い将来完全に装飾が消滅してしまう可能性が高い。早急な手当てが必要であろう。
参考文献	『院内町誌』（院内町誌刊行会、1983年） (村七)



第39图 A号横穴墓实测图

水窖横穴墓群



第40图 D号横穴墓测量图



A号横穴墓



D号横穴墓

A号横穴墓 (部分)



B号横穴墓



C号横穴墓



ふつかいり
14. 四日市横穴墓群

位置 宇佐市大字四日市字一鬼手・加賀山
指定 昭和32年11月28日 国指定史跡
立地 宇佐市の西部に位置する宇ノ原台地の東側には細長い開折谷が認められる。横穴墓群は台地裾部の凝灰岩の露出した部分に築造されており、谷の南側は加賀山横穴群、北側は一鬼手横穴群と小字名を冠して呼称している。加賀山横穴墓群では2基の装飾横穴墓、一鬼手横穴墓では1基の装飾横穴墓が確認されている。

加賀山横穴墓群

40号墓
構造

本横穴墓群は現状で75基の横穴墓が確認されており、装飾が描かれている39・40号横穴墓は丘陵の先端付近で、墓群のほぼ中央に位置するところから他の横穴墓とは若干の差は認められよう。

40号横穴墓は東方向に開口する。全長は約2.9m、標高は羨門部付近で36m前後である。玄室上軸方向はN-65°-Wを測る。入口（玄門）は南側が2段、北側が3段の方形に杵取りした庇構造になっている。入口一重目の前面幅は1.8m、高さ1.1mを測る。羨道は造られてなく、玄室平面形は無軸の若干凹みのある略隅丸長方形で玄門幅0.6m、奥壁幅0.9m、長さ2.2mを測る。縦断面形は高さ30cmの奥壁状のものを削り出し、天井は入口に向かって高くなっている。

装飾

装飾は入口（玄門）一重目前壁の上面に黒（緑）線で縁取りし、内側に赤色顔料であたかも人が手足を広げて立っているかのような文様が6個並んでおり、左右端に大形のものが配置されている。これには足を表現したと見られるものの下に柱状部様のものが表現されている。なお、人物の表現は具象的でなく、頭および手の中央部には杏仁形の残り残した部分があり、あたかも「邪視文様」を表現しているようにも見える。また玄室に向って右壁のみに同心円文様やそれ以外にも赤色顔料を塗っているのが認められるが周辺が剥がれているため文様は明らかでない。

39号墓

39号横穴墓入口一重目前壁の玄室に向って右壁上面に赤色顔料で円文様を描いているのがうっすら認められる。

出土遺物等はないが、横穴墓の形態から40号横穴墓は7世紀中頃前後のものと考えられる。

一鬼手横穴墓群

62号墓
構造

本横穴墓群は現状で86基の横穴墓が確認されており、装飾が描かれている62号横穴墓は丘陵の舌状部の先端にあり、他の横穴墓に比べ墓域が広い特徴を持つ。さらに庇構造も丁寧であり、この横穴墓のみが装飾文様が描かれている点など他の横穴墓に比べ傑出したものであることが理解できる。

62号横穴墓は南方向に開口する。全長は約4m、標高は羨門下部付近で32m前後である。玄室主軸方向はN-21°-Eを測る。入口（羨門）は3段の方形に杵取りした庇構造になっている。入口一重目は幅3.1m、高さ1.3m、二重目は幅2.0m、高さ1.1m、三重目は幅1.1m、高さ1.0mを測る。羨道は長さ0.6m、幅0.8m前後を測る。玄室平面形は若干袖部を有する卵形で、幅は中央部が最も広く1.7m、長さは2.8mを測る。縦断面形は奥壁を形成せず、床面は奥に向って徐々に上り、天井は徐々に下がって行って最奥で両者が接合する形態である。

装飾

装飾文様は羨門中央を基準線としてほぼ左右対称に赤色顔料のみで同心円文が描かれている。入口一重目最上段に推定10個（実際確認できるのは3個）を横方向に並列し、同中段上半に左右1個づつ、二重目中段上半にやや大きめの同心円文様を左右1個づつ描いている。

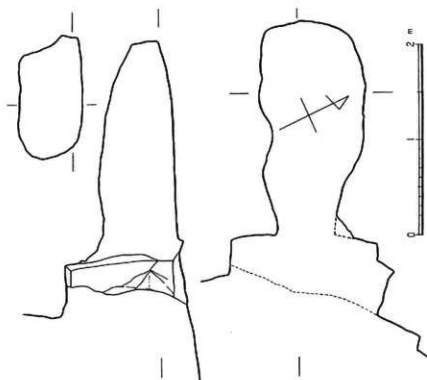
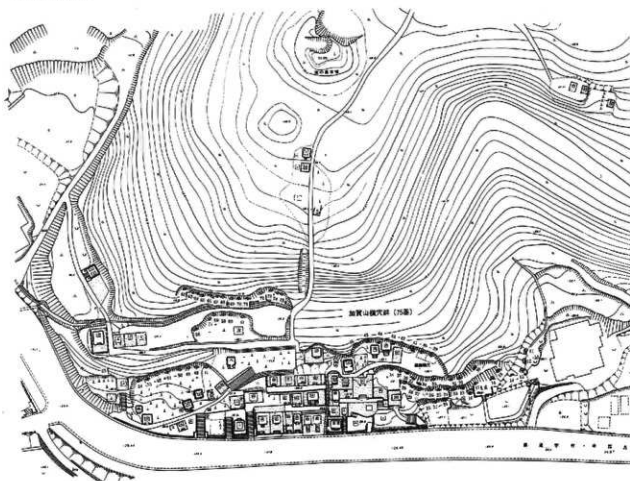
本横穴墓も出土遺物等は無く時期は明らかではないが、横穴墓の形態から加賀山40号横穴墓より若干古い形態を示しているところから7世紀前半前後のものと考えられる。

まとめ

四日市横穴群については覆土などの保存施設が作られており、直射日光等装飾文様を退化させる要素を取り除いているので文様も良好な状態で残っている。

参考文献

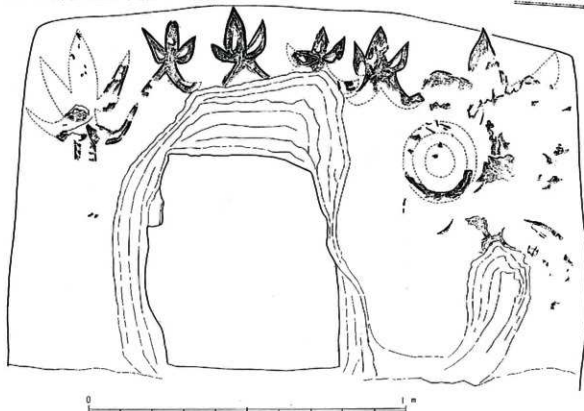
- a. 「宇佐地方の装飾横穴」『鶴見古墳』（宇佐市教育委員会、1975年）
 b. 「四日市横穴群」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』（宇佐市教育委員会、1988年）（村上）



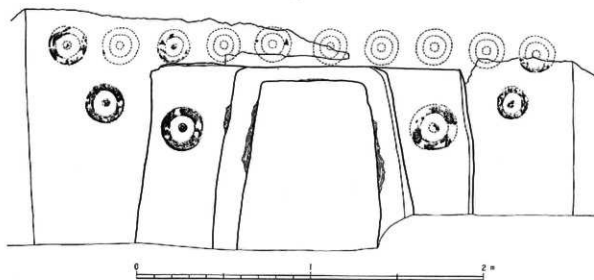
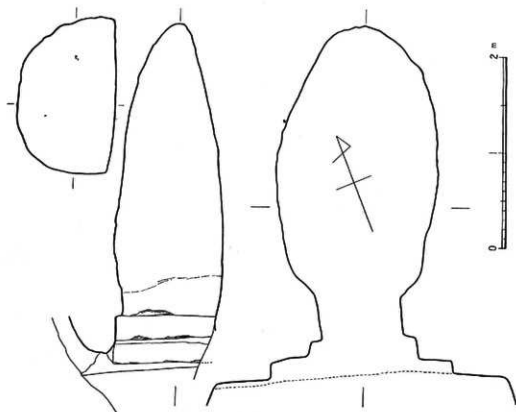
第42図 加賀山40号横穴墓測量図（文献aより転載）



第41図 四日市横穴墓群 (文献bより転載)



第43図 加賀山40号横穴墓測量図 (文献aより転載)



第44図 一鬼手62号横穴墓測量図（文献aより転載）



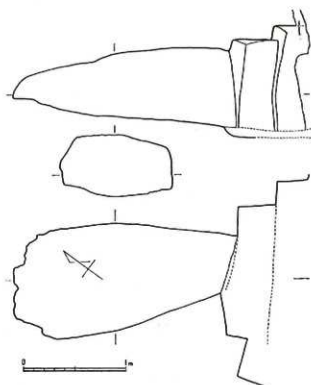
加賀山40号横穴墓



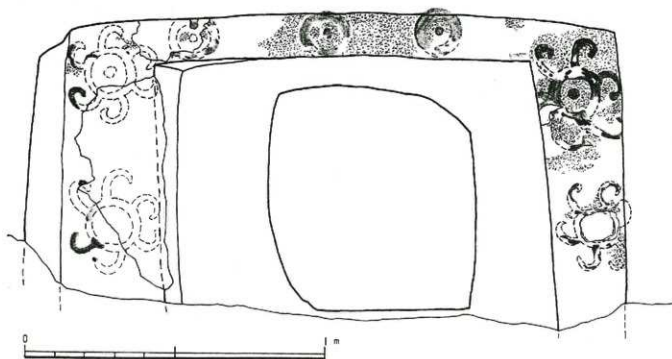
一 鬼手62号横穴墓

15. 貴船平下の裏山装飾横穴墓

位置	宇佐市大字山下、上元重
指定	昭和46年3月23日 県指定史跡
立地	宇佐市の西南奥に位置する。八面山から南北方向に派生する丘陵の一つで、この丘陵には凝灰岩崖面が露頭している場所が点在する。この部分に横穴墓が築造されており、後述する観音山横穴墓群も同一丘陵上にある。貴船平下の裏山横穴墓群は1970年の分布調査では60～70基の横穴墓の存在が明らかになっている。本装飾横穴墓も丘陵舌状部の先端にある。
構造	本横穴墓は東南方向に開口する。全長は約3m、玄室主軸方向はN-36°-Eを測る。入口(玄門)は方形に枠取りした二重庇構造になっており、入口一重目の前面幅は1.9m、高さ1.0m、二重目の前面幅は1.2m、高さ0.8mを測る。炭遣は造られてなく、玄門は幅、高さともに0.7mの不整方形である。玄室平面形は無軸の奥に向って広がる袋状を呈し、奥壁幅1.0m、長さ2.0mを測る。縦断面形は奥壁を形成せず、床面は奥に向って徐々に上り、天井は徐々に下って行って最奥で両者が接合する形態である。
装飾	装飾文様は玄門中央を基準線としてほぼ左右対称に一重日前壁に描かれていると推定される。本横穴墓の装飾の場合黄色粘土を全体に化粧塗りし、その上に赤色顔料で上面に4個の同心円文を横方向に並列し、左右壁には六脚同心円文を2個ずつ上下方向に描いている。
まとめ	本横穴墓も出土遺物は無く時期は明らかでないが、横穴墓の形態が加賀山40号横穴墓同様炭遣部が認められない点などが共通しているところから7世紀中頃前後のものと考えられる。 本横穴墓については覆屋があり、直射日光等は遮られており保存状態は良い。なお、周辺の横穴墓の中に装飾横穴墓があるとの指摘もあるので近い将来、地形測量図作成を含めた組織的な調査が望まれる。
参考文献	「宇佐地方の装飾横穴」「鶴見古墳」(宇佐市教育委員会、1975年) (村上)



第45図 装飾横穴墓測量図（報告書より転載）



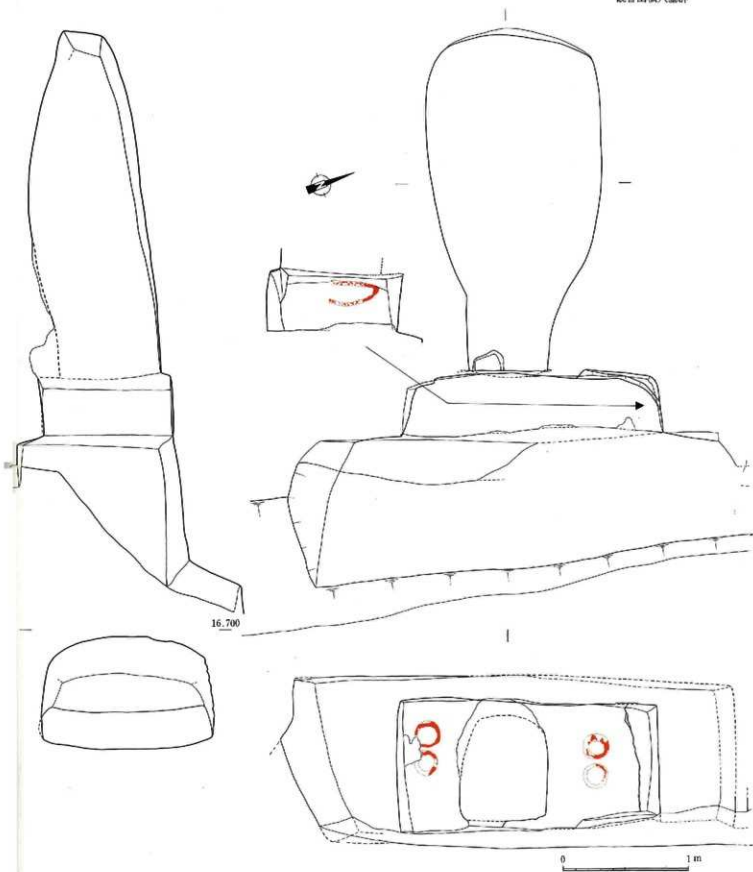
第46図 装飾横穴墓奥門の装飾（報告書より転載）



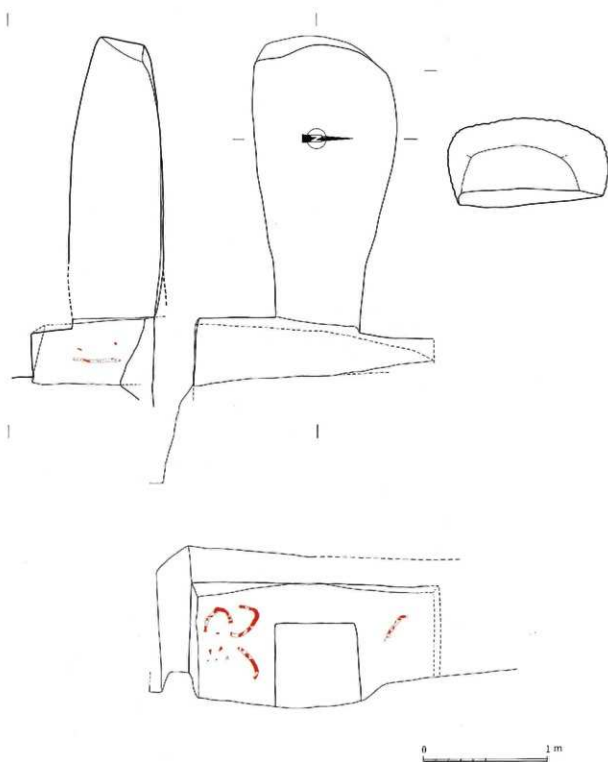
横穴墓

かんのんやま
16. 観音山横穴墓群

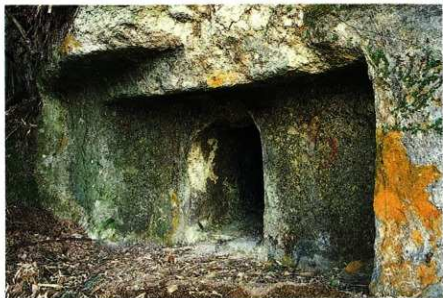
位置 指定 立地	宇佐市大字上元重字観音山 未指定 岩船平下の真山横穴墓群より南へ1.5km山側へ入った地点の凝灰岩崖面が露出している所の丘陵状台部突端に2基並立して装飾横穴がある。本装飾横穴墓は宇佐市教育委員会が発見したものである。本横穴墓群については全体の横穴墓数など明確でないので装飾横穴墓番号をA、Bと仮称しておく。
A号墓 構造	A号横穴墓は東方向に開口する。全長は3.2m、標高は羨門下部付近で16m前後である。玄室主軸方向はN-70°-Wを測る。入口（羨門）は2段の方形に枠取りした庇構造になっている。入口一重目の前面幅は3.3m、高さ1.4m、二重目の前面幅は2.1m高さ1.0mを測る。羨門は天井が崩落しており高さは推定0.85m前後、幅は0.65mの隅丸台形を呈す。羨道・玄室の平面形はトックリ形を呈す。羨道部は幅0.65m、長さ0.5mを測り玄室との境は明瞭でない。玄室平面形は無袖の奥に向かって広がる袋状を呈し、奥壁幅1.2m、長さ2.1mを測る。縦断面形は高さ0.35mの低い奥壁を形成し、天井は中央が最も高く0.9mを測る。
装飾	装飾は入口（羨門）一重目の玄室に向かって左側壁の中央から下面にかけて赤色顔料で弓（半月）状のものが描かれている。右側壁にも同様なものが描かれていたと推定されるが壁面が落盤しているため下面のみしか明らかでない。さらに二重目中央にはほぼ左右対称に円文が赤色顔料で描かれている。また、右壁下面に赤色顔料の塗布が見られるが文様は明らかでない。
B号墓 構造	B号横穴墓も東方向に開口する。全長は2.7m、標高は羨門下部付近で15.5m前後である。玄室主軸方向N-90°-Wを測る。入口（玄門）は2段の方形に枠取りした庇構造になっていたと考えられるが、右壁が落盤しているためその規模は不明である。玄門は幅、高さとも0.7mの方形を呈している。羨道は造られてなく、玄室平面形は無袖の奥に向かって広がる袋状を呈し、奥壁幅1.1m、長さ2.35mを測る。縦断面形は高さ0.35mの低い奥壁を形成し、天井はほぼ水平で床面からの高さは0.85mを測る。
装飾	装飾は入口二重目の前面左側に鉤状脚を表現しているような文様が赤色顔料で描かれている。上方の二本は左回転で、下方一本は右回転である。右側にも鉤状脚様の文様が認められるが、落盤が激しく明確でない。
まとめ	本横穴墓は近年発見されたもので覆屋等の施設はないが、装飾の前面に板囲いをしており、応直射日光を遮ぎっている。しかしながら、横穴墓は落盤が著しいのでその保存対策と地形測量図作成を含めた組織的な調査が望まれる。 (村上)



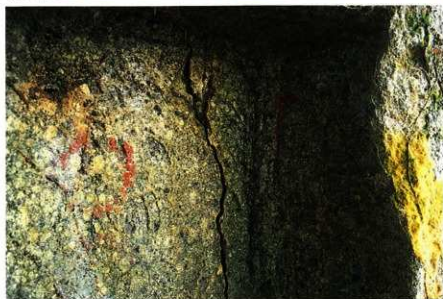
第47图 A号横穴墓测量图



第48図 B号横穴墓測量図



A号墓



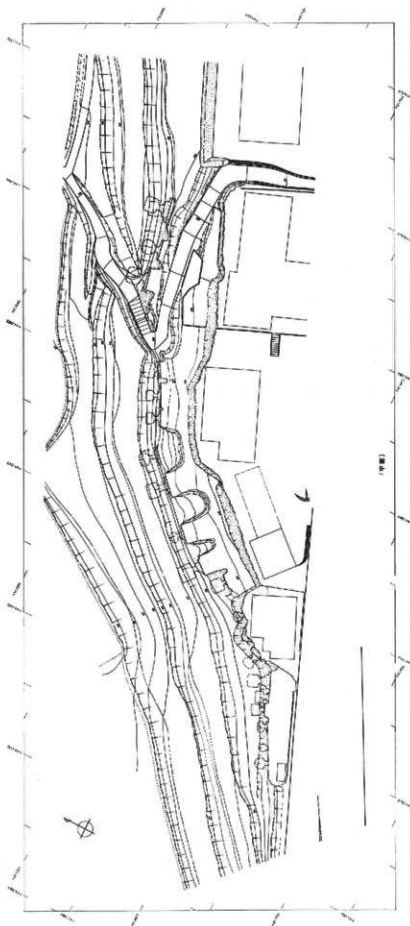
A号墓



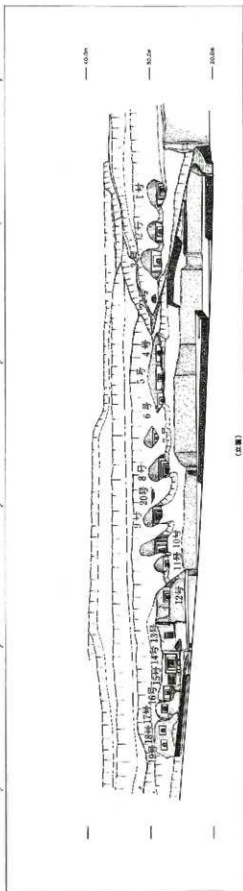
B号墓

17. 穴瀬横穴墓群

位置	豊後高田市大字美和、土屋敷
指定	昭和46年3月23日 県指定史跡
立地	桂川の右岸に沿った北側の凝灰岩崖面に21基の横穴墓がほぼ一列に並んでいる。21基の横穴墓群の中で、彩色のあるものは12基であり、大別して2種の装飾がみられる。前者は玄室内や羨門の前面全体に赤色顔料を塗ったものが8基みられる。後者は円文、同心円文やその他の図形を描いているものが5基認められる。ここでは後者を説明する。
2号墓	2号横穴墓は南方向に開口する。全長は約3.5m、標高は羨門下部付近で28m前後である。玄室主軸方向はN-7°-Wを測る。入口は2段の方形に枠取りした庇構造になっている。入口一重目の前面幅は3.1m、現状の高さ0.9m、二重目の前面幅は1.4m、現状の高さ0.85mを測る。羨門は側壁が崩落しており、高さは現状で0.65m、幅は0.8mの隅丸方形を呈す。羨道は長さ0.7m、幅0.9mの略方形である。玄室の平面形は長さ1.9m、幅2.3mの隅丸方形を呈する。奥壁は幅2.25m、高さ0.75mを測る。縦断面形はアーチ状を呈し、天井は中央が最も高く1.2mを測る。天井下部には鴨居状の稜線を作り出している。羨道天井部との差は明らかである。 装飾文様は入口一重目の玄室に向かって左側に円文が4個、同右側に円文が2個以上が赤色顔料で描かれている。さらに二重目にはベタ塗り状に赤色顔料が左側前面に認められる。 本横穴墓からは遺物等の出土はないが横穴墓の形態が玄室平面形は略方形、断面形がアーチ状を呈することから6世紀後半～末前後のものと考えられる。
4号墓	4号墓は入口（羨門）左右壁幅を約1m前後広く整形して庇で囲い、ここに文様を描いている。むかって左壁には上下方向に帯をならべ、一部にはじ字形になっているようにも見える。現状では8～9本見える。右壁は右側に赤色顔料で円文の中に十字状の文様いわゆる車輪文様が描かれている。他は全体を赤色顔料で全体をベタ塗りしている。
5号墓	5号横穴墓は南方向に開口する。全長は約3m、標高は羨門下部付近で26m前後である。玄室主軸方向はN-24°-Eを測る。入口（羨門）は2段の方形に枠取りした庇構造になっている。入口一重目の前面幅は4.1m、高さは現状で1.3m以上、二重目の前面幅は約1.5m、高さ1m以上を測る。羨門は現状で幅0.7m、高さ0.8mの隅丸長方形を測る。羨道は長さ約1.0m、幅は羨門付近で約1.0mを測る。玄室は長さ1.5m、幅2.3mの横長隅丸台形を呈する。縦断面形はややいびつなアーチ状をなし、天井は中央が最も高く床面から約1mを測る。羨道部天井とは若干の段を持って続く。 装飾文様は退色が著しく明確でないが、入口一重目には壁面左右に二列の同心円文を横並びに描いている。二重目の壁面左右上方にも各々1個の同心円文を配している。 本横穴墓からは遺物等の出土はないが横穴墓の平・断面形から7世紀前半前後の時期が考えられる。
7号墓	7号横穴墓は入口の土砂堆積が著しい。入口は二重庇となっており、羨門上方の壁面に一重目は3個の同心円文、左壁面に1個の円文、二重目は羨門の左右上方に各々1個の円文等が認められるが詳細は不明である。また、円文の縁を線刻している。
16号墓	16号横穴墓は風雨にさらされて彩色はわずかに残っているだけである。二重庇構造の一重目入口前面に羨門中央やや右側に中央にしてほぼ左右対称に円文が描かれており、羨門上方の4個の円文は横方向の帯で連結され、さらに左側2個は外郭が三角状の鋸歯文様に見える。
まとめ	本県の装飾横穴墓の中では、形態からみて最も古く遡るもので、集中度や横穴墓の構造等、やや特異である。 (村上)

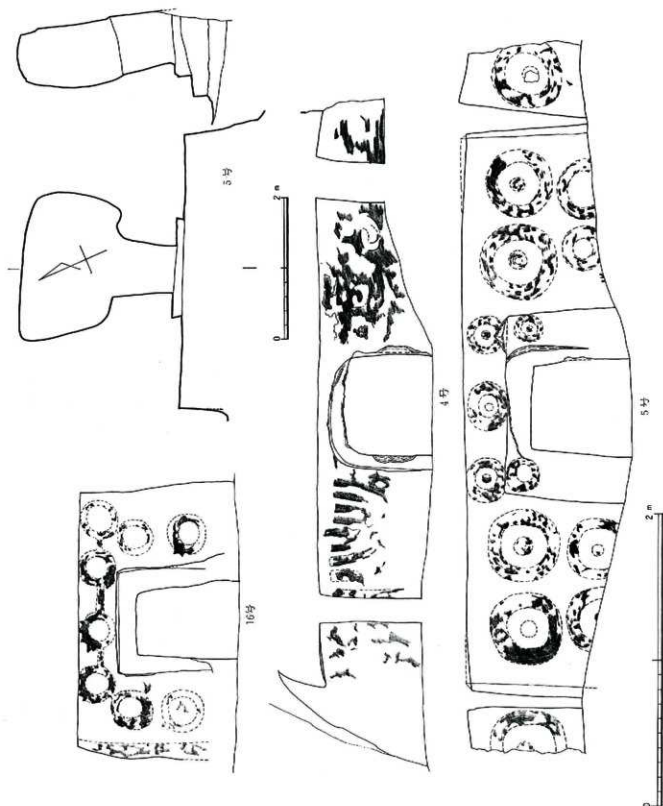


(写真1)

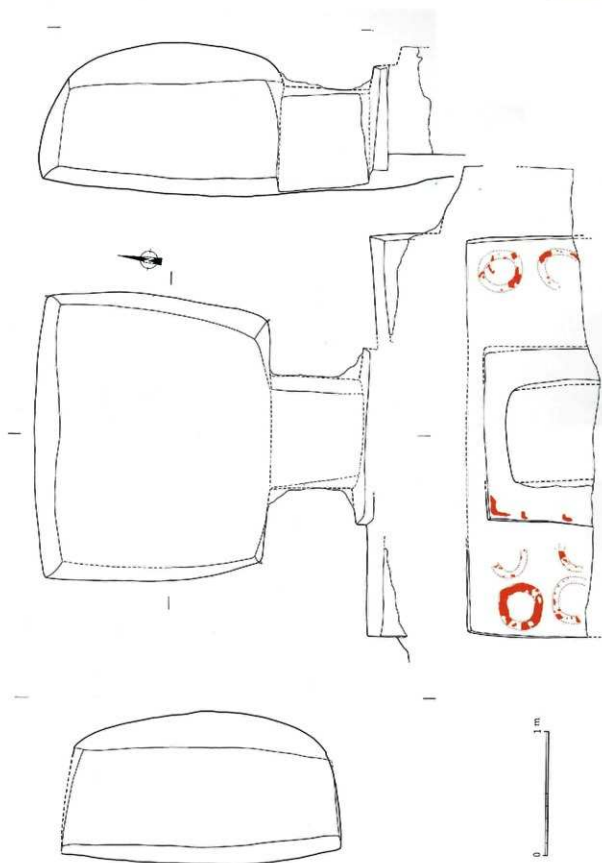


(写真2)

第49図 穴瀬横穴墓群測量図 (600分の1)



第50図 4、5、16号横穴墓の装飾（報告書より転載）



第51圖 第2号標穴墓群断面圖



第4号横穴墓



第16号横穴墓



第2号横穴墓



第5号横穴墓



第7号横穴墓

第5章 石室内温湿度測定調査

ガランドヤ1号墳石室内の温湿度測定

日田市石井町に存するガランドヤ1、2号墳は装飾古墳である。両古墳とも封土の流出により、それぞれの石室は床面から120cm程の位置にある地表面以上がむき出しの状態となっている。そのために石室を構成する石組みの間の粘土も多くなくなり、そこから外気や雨水が侵入し内部にカビの発生を促すことなどで装飾部分が劣化させていた。昭和60年頃より石室全体を覆うようにビニールシートが掛けられ、環境としては幾分改善されたものの十分という状況ではない。いずれにしろ、恒久的な保存措置が必要であることは論を待たないであろう。

これらの古墳の構造や装飾については他章に譲るとして、ここではガランドヤ1号墳の石室内において温湿度を測定したことについて以下述べてみる。なお、この古墳の石室内部では以前（昭和59年度から60年度にかけて）も筆者が温湿度の測定を行っている。

測定

平成5年12月13日、玄室奥壁より25cm、床面より30cm、右側壁より140cmの位置（以下下側と略）で温湿度を、また奥壁より230cm、床面より280cm、右側壁より140cmの位置（同上側）で湿度を測定した。

測定装置 白山工業（株）製データマーク

本体

記録部

センサー部

温湿度計1個（下側での測定用）

湿度計1個（上側 〃 ）

1月6日、3月25日、8月31日、翌2月3日の各日にアースマン通風乾湿計で下側の位置で温湿度を測定し、その値を校正値とした。また同日にはパソコンによるデータの回収も行った。なお、日田測候所で測定されたその間の月別平均温湿度値（同市内）のデータも得た。測定の期間中石室全体はビニールシートで覆われ、玄室と前室との間（玄門部）もビニールシートで遮蔽されていた。

前回の昭和60年3月13日から翌2月28日まで行った温湿度測定は、玄室中央部床面より70cmの位置（同中央前）で行った。測定は自記温湿度計で行い、一週間毎にチャート紙を交換し、一月毎にアースマン通風乾湿計で校正した。この時も日田測候所から月別平均温湿度値（同市内前）のデータを得た。また測定期間中、6月14日から7月18日以外は石室全体がビニールシートで覆われていた。玄門部の遮蔽は、6月14日から9月25日以外は行われていた。なお、6月14日から7月31日まで養道の一部において発掘調査が実施されている。

結果と考察

表1は月別平均温湿度のデータである。ただし、ここでいう湿度とは相対湿度（％）のことで、また測定誤差として約5～6％、温度（℃）も1～2℃ほどを考慮に入れておく必要がある。温度と湿度の間には、常圧で一定容積のもと温度が上昇した場合湿度は反対に下降し、温度が下降した場合は上昇する関係にある。なお、中央前のデータのうち3月分については、その月の途中からのデータをもとに算出したもので、3月分の正確なデータではないことに留意してもらいたい。表1から温度と湿度について図1と図2を描いた。

図1から、上側と下側の温度を比較すると4月から10月までは上側の温度が高く、それ以外の月はほぼ同じか上側が低い。市内と下側それぞれに上側では、上側が常に市内より高く、下側は4月から8月までは市内が高くそれ以外の月では下側が高い。これらのことをまとめると、春から夏にかけては石室が暖められることと温室効果とで上側が常に外

表1 月別平均温湿度

月	湿度（％）				温度（℃）			
	下側の奥壁	市内市内前	下側の奥壁	市内市内前	下側の奥壁	市内市内前	下側の奥壁	市内市内前
1	95	78			9.0	8.6	4.4	
2	91	71			8.4	8.3	5.5	
3	87	99	69	76	9.5	7.6	9.8	7.2
4	86	98	69	70	13.9	12.8	16.3	15.6
5	88	88	66	74	18.1	17.7	21.4	19.7
6	89	94	77	79	20.6	20.9	23.7	22.3
7	90	94	68	76	28.1	25.2	31.3	29.4
8	95	90	69	69	27.5	26.4	31.7	29.6
9	98	93	74	80	25.4	24.5	27.5	27.2
10	96	95	74	80	21.3	19.1	22.1	17.3
11	95	92	76	80	17.2	13.6	17.2	12.4
12	95	93	78	79	12.8	7.5	12.3	7.1
1	96	93	73	75	9.3	5.1	8.8	3.9
2		94		72		5.3		2.5

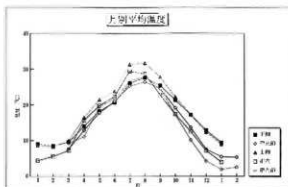


図1

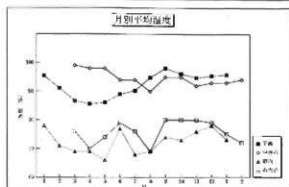


図2

気より高く、下側は外気により暖められるが地下の比熱が大きく緩衝的に作用するために温度は上がらず外気より低い状態となる。秋から冬にかけては、外気により上側は冷やされ冷気層となり下側は地下からの熱供給を受け暖気層となるものの石室内部に対流が生じ均質な温度となり、図1からもそのことが窺える。石室内部では外気、地下そして対流の三つの条件により前述したような温度変化があらわれるのである。中央前と市内前では、下側と市内との関係に酷似している。これらのことから、石室内部の温度は今回も前回同様全体として外気の変化と連動しており、しかも夏場と冬場の温度差は大きいといえる。

図2から、下側の湿度は4月頃を最低に9月が最高となるような変化で、年間を通して常に85%以上の高湿度となっている。市内の湿度に連動しているが、6月の梅雨時期の変動に対してはほんのわずかの運動である。一方、中央前では3月頃が最高で8月が最低となり、年間を通して87%以上の高湿度となっている。市内前と比較すると梅雨時期から晩秋にかけては比較よく連動しているもののそれ以外の時期は連動しているとはいえない。下側と中央前とは、初秋から初冬にかけてはよく似た変化であるが、それ以外の時期は反対の動きである。特に、最高最低の時期が全く反対となっている。これらのことを鑑みると、測候所のデータと石室内の湿度の変化は概ね連動しているが、測定年の違いはそのままデータの違いとなってあらわれているといえよう。石室内部の湿度変化は、石室全体がビニールシートで覆われていることから、床面から湿気を供給される量の変化と考えられる。測候所の湿度データは降雨などの気象変化に大きく依存する。また降雨は地下に水分を供給し、それが石室内部の湿度に影響を及ぼす。つまりは、外気の湿度変化は石室内部の湿度変化となってあらわれてくるのである。

表2は週別温度湿度のデータである。今回のデータは平成6年1月1～7日を第1週とし、前回のデータは3月12～18日を第11週としてそれぞれ約1年間測定したものである。表2から図3（湿度から70を減じて同様の図にしている）を描いた。これらの表や図から、温度では今回と前回を比較すると今回のデータが総じて高いことが分かる。図1の市内と市内前の温度を比較すると市内の方が幾分高い。それは今回の方が外気が高いということでもあり、石室内部の温度もそのまま高くなったと考えられる。なお、石室内部では冬場の最低気温は今回と前回がそれぞれ7.4℃と3.8℃で、凍結の可能性はほぼないと考えてよさそう。

図4は今回の2月1～4日までの石室内部の温度湿度（湿度より85を減じている）である。温度は下側が上側より常時高く、連動して変化している。石室内部の温度は、外気の変化により上側が連動する形で変化し、下側は上下の温度差で対流が生じることから結局連動というかたちとなって現れる。では温度と湿度の関係はどうであろうか。下側の空気は床面より温度と湿度を供給されそれぞれ高くなり、対流によって上昇する。上昇した空気は天井などで冷却され過飽和の水分を結露という形で放出しやがて下降する。床面まで下降してきた冷えた空気は温度を供給されることで湿度が低くなり、結局湿気も床面より供給される。このようなサイクルの中で、湿度の上昇や下降が大きければ大きいほど対流も早くなり、加温や結露が下1分な状態となる。図4から温度の上昇部分では湿度が下がり、下降部分では反対に上がることが窺えるであろう。

表2 逐时温度

月	日	湿度 (%)						温度 (°C)								
		下侧			中央前			下侧			中央前			上侧		
		最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1	1	99	94	97				10.0	9.5	9.8				10.0	9.1	9.2
	2	95	94	95				9.8	9.1	9.5				9.4	8.8	9.2
	3	95	93	94				10.0	8.0	9.2				9.6	8.0	8.9
	4	95	94	94				8.5	7.4	8.0				8.1	7.1	7.5
2	5	94	93	93				8.3	7.7	8.0				7.9	7.3	7.6
	6	93	91	92				8.8	7.4	8.2				8.6	7.4	8.0
	7	92	90	91				8.4	7.8	8.1				8.2	7.5	7.7
	8	90	89	89				9.3	8.4	8.9				9.6	8.2	9.1
	9	89	88	89				9.3	8.6	9.0				9.4	8.5	9.0
	10	88	87	87				9.9	8.8	9.4				10.5	8.8	9.7
	11	87	86	86	99	97	98	9.9	9.2	9.5	7.1	4.8	5.8	10.3	9.1	9.7
	12	86	85	86	99	99	99	10.3	9.2	9.9	10.1	6.5	7.8	11.0	9.6	10.5
4	13	85	85	85	99	97	99	11.2	11.0	11.1	10.7	9.7	10.3	12.7	12.3	12.4
	14	86	84	85	99	98	98	13.3	11.2	12.3	12.5	10.7	11.3	16.5	12.2	14.8
	15	85	85	85	99	99	99	13.9	13.1	13.6	13.3	12.3	12.8	16.5	14.9	15.8
	16	86	85	86	99	98	99	15.0	14.0	14.6	15.1	12.3	13.6	17.8	16.0	17.0
	17	86	86	86	99	98	98	15.9	15.0	15.4	15.6	14.0	14.9	19.4	16.6	17.8
5	18	87	86	86	98	98	98	17.2	16.0	16.8	17.5	15.0	16.5	21.3	18.6	20.3
	19	87	85	86	99	98	98	17.9	17.0	17.6	18.6	17.2	17.9	21.6	19.6	20.7
	20	86	85	86	99	95	97	18.5	18.0	18.3	19.5	17.3	18.5	22.0	19.8	21.3
	21	87	86	86	98	98	98	19.6	18.3	18.9	20.1	18.5	19.3	23.6	20.6	22.5
6	22	88	87	87	98	97	98	19.9	19.4	19.6	20.9	18.7	19.5	23.7	21.8	22.7
	23	88	87	88	97	92	92	20.7	19.9	20.3	23.5	18.4	20.0	24.7	22.2	23.8
	24	89	89	89	97	85	92	20.9	20.1	20.3	22.8	18.4	20.5	24.9	21.9	22.9
	25	90	90	90	96	94	95	21.0	20.4	20.7	25.5	20.2	21.8	25.0	22.3	23.2
7	26	91	90	90	96	96	96	22.8	20.8	21.8	24.3	21.8	22.7	27.4	24.3	25.9
	27	91	89	90	98	96	96	25.2	22.8	24.0	26.3	23.2	24.7	31.5	27.3	29.5
	28	90	89	90	97	93	96	26.8	25.2	26.0	26.3	24.3	25.5	33.1	31.0	32.1
	29	90	89	90	94	89	92	27.5	26.9	27.3	28.8	24.3	25.3	33.5	32.5	33.0
	30	92	90	91	92	89	91	27.7	26.9	27.2	26.8	24.4	25.6	33.0	29.7	31.3
8	31	93	92	93	91	85	89	27.7	26.8	27.2	28.2	25.7	26.7	33.1	30.3	31.7
	32	93	93	93	91	82	88	28.1	27.8	28.0	28.5	25.8	26.8	33.6	32.0	32.8
	33	95	94	94	90	81	87	28.0	27.3	27.5	28.2	25.7	26.8	32.2	30.9	31.3
	34	99	96	97	96	75	91	27.7	27.2	27.4	27.6	25.0	26.2	31.7	30.8	31.3
9	35	99	97	98	98	77	96	27.4	27.1	27.3	27.0	24.5	25.7	31.4	30.2	30.9
	36	100	98	99	98	97	97	27.2	26.6	26.9	25.8	24.5	25.2	31.1	29.4	30.2
	37	100	98	99	97	73	93	26.8	24.9	26.0	25.9	23.1	24.8	30.2	27.2	28.7
	38	98	97	98	94	93	94	25.0	24.1	24.5	26.3	23.8	25.0	27.0	25.6	26.1
	39	97	96	97	95	94	94	24.1	23.1	23.5	23.8	19.9	22.2	26.0	24.1	25.1
10	40	97	96	96	96	93	95	23.1	21.8	22.6	20.8	18.5	20.1	24.3	23.0	23.8
	41	97	96	97	97	95	96	22.2	21.9	22.1	20.4	18.8	19.9	23.9	22.6	23.2
	42	97	96	97	95	94	95	21.9	20.8	21.5	20.4	17.3	18.9	23.6	21.2	22.7
	43	96	95	95	91	93	93	20.6	19.2	19.8	18.5	16.7	17.3	21.1	19.3	20.0
11	44	96	94	95	94	90	92	19.4	17.8	18.6	19.7	15.9	17.9	19.7	17.9	18.8
	45	95	95	95	93	91	92	18.0	17.5	17.7	17.5	13.9	16.2	18.2	17.5	17.8
	46	95	94	95	92	92	92	18.1	17.4	17.8	13.9	10.5	11.9	18.7	17.4	18.0
	47	95	94	94	92	92	92	17.7	16.0	16.8	11.5	10.3	11.0	17.7	15.6	16.7
12	48	95	94	95	93	92	93	15.9	14.8	15.1	12.6	9.4	11.0	15.5	14.3	14.7
	49	96	94	96	93	92	93	14.8	13.4	13.9	10.8	7.5	9.1	14.5	13.0	13.6
	50	96	94	94	95	93	94	14.1	12.6	13.7	7.5	4.9	6.5	13.9	12.3	13.4
	51	97	95	97	94	93	94	12.6	11.3	11.7	6.9	5.0	5.9	12.2	10.6	11.1
	52	96	95	95	94	94	94	11.6	11.0	11.3	8.5	6.5	7.3	11.2	10.4	10.8
1	53	96	95	95	94	92	93	11.1	9.9	10.7	8.4	5.0	6.4	10.5	9.5	10.1
	54	97	95	96	94	93	93	10.3	9.3	10.0	5.7	3.8	4.8	9.8	9.0	9.5
	55	98	96	97	94	93	93	9.4	8.4	8.8	6.0	4.3	5.2	9.0	7.8	8.2
	56	96	94	95	94	93	93	9.4	8.6	9.0	6.0	4.5	5.3	9.1	8.2	8.6
2	57	97	95	96	94	93	94	8.6	7.4	8.0	5.5	4.4	5.0	8.1	6.9	7.4
	58				94	93	93				4.9	4.0	4.4			
	59				94	93	93				6.4	4.6	5.6			
	60				95	93	94				6.5	4.8	6.0			
	61				95	94	94				6.0	4.5	5.1			

図5は今回の8月1～4日までの石室内部の温湿度(湿度より65を減じている)である。常に上側の温度が下側より高いことから対流を生じ、従って外気による通動は上側で起きてても下側ではほとんど起きていない。一方、湿度は石室内部に対流がないことから外気の影響を受けそうにないものの、実際にはわずかであるが反対の運動をしている。この反対の運動はどのようなメカニズムで起きるのかを推察してみよう。まず石室の天井部が外気により暖められ、その放射熱によって床面は極わずかであるが暖められる。暖められた床面の湿度は温度

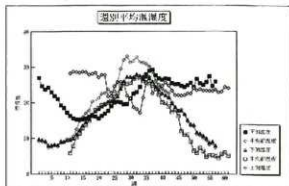


図3

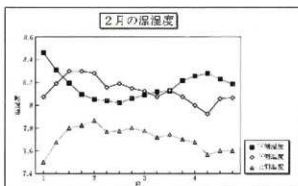


図4

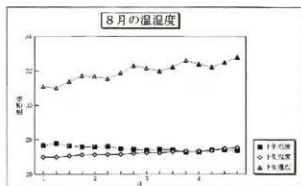


図5

が上昇したことで反対に下がると考えられる。図5からは温度変化はほとんど分からないが、日盛りを拡大してみると若干上下で運動があることが分かる。

これまで述べてきたことは、平成3年から同4年にかけて筆者が行った宇佐鳳土記の丘内免ヶ平古墳主体部(竪穴式石室)での温湿度測定の結果に非常によく似ている。免ヶ平古墳はその前年度までの4年間で墳丘と主体部の整備を行った。整備では石室の上部より観察ができることなどの条件から、覆土を架け墳頂部までの封土を築かなかった。そのため石室の上部は外気の影響を大きく受けることとなった。特に、冬場の石室内部における対流は床面の粘土床に対して温湿度を間断無く変化させ悪影響を及ぼしている。ガランドヤ1号墳の奥壁の装飾部分に対しても決して好ましいものではなく同様のことがいえるであろう。これからのガランドヤ古墳の整備にとって本調査がその一助になれば幸いである。

参考文献

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 『理化学辞典 第3版増補版』 玉虫文一他 | 1981、岩波書店 |
| 『ガランドヤ古墳群 大分県日田市所在装飾古墳の調査報告』 | 1986、日田市教育委員会 |
| 『研究紀要 Vol.8』 | 1993、大分県立宇佐鳳土記の丘歴史民俗資料館 |

第6章 まとめ

1. 大分の装飾古墳

大分の装飾古墳は、5世紀代に遡る石槨系や石障系のものは確認されておらず、6世紀後半になって筑後川上流域を中心とした地域によりやぐ壁面系のものが出現する。さらに6世紀後半から末には豊前南部から国東半島北側の地域において横穴墓にも装飾が施されるようになり、7世紀前半に盛行する。その内、まず壁面系の彩色壁画について見てみることにする。

彩色系装飾古墳

大分の彩色系装飾古墳は、装飾を絵画という点から見た場合、福岡県の竹原古墳や珍塚古墳に代表される叙事詩的で具象的な絵画や、王塚古墳に代表される幾何学文を多用する絵画を頂点とする表現技術の中ではやや下位に位置するのは否めないが、その反面ガランドヤ1号墳や鬼の岩屋2号墳に見られるように稚拙ではあるが自由画的な伸びやかさを見ることが出来る。しかし、これらが独自に発達したのではなく、描く対象にしても、その表現にしても地理的に近い筑後浮羽方面の影響下で出現したものであることは明らかである。

具体的には、奥壁に大型同心円文を配し大胆な赤彩を施す福岡県浮羽郡古畑古墳との共通性が指摘されている玖珠鬼塚古墳のように全体の構成や雰囲気類似するもの、また、船首と船尾の区別が付かないゴンドラ形の舟の表現(ガランドヤ1号墳、穴観音古墳)、穴観音古墳の舟上の棺と思われるものの表現、同心円文の多用など個別の類似性が指摘できるのである。

また、一方彼地との相違点としては口田・玖珠地方の装飾には武器、武具類のモチーフが採用されていないこと(別府湾岸の鬼の岩屋1号墳で、今回新たに収められた文様が発見された)、そして小さな飛鳥を表現すると考えられている「十字形」の文様を共通して持つなどの特徴をあげることができる。

また、県内の装飾古墳の石室構造が筑後から肥後地域のもものと類似しているのは、装飾の持つ意味を考えると示唆的である。つまり、豊後では横穴式石室墳自体数が少ないが、その内石棚や疑似石棚、石原形、あるいは屍床部を持つ、あるいは玄室に副張りが認められるなど、明らかに筑後から肥後北部地域の影響下にあるものについては、ほとんどといって良いほど装飾を持つ。このことは、石室構築と、石室内への装飾という行為が一体のものとして取り扱われていたことを示している。また、横穴式石室墳全体の中でも装飾のある古墳は大きな割合を示す。つまりH田・玖珠地域では横穴式石室墳は計12基程度が確認されているにすぎないが、その内実に6基に装飾が認められるのである。また、別府湾岸の大分・別府地域では横穴式石室墳が6基確認されており、その内3基に装飾がある。つまり、横穴式石室の半分には装飾があることになる。これは横穴式石室を持つ群衆墳がほとんど無いという地域性にもよるが、首長墓として石室墳を築くことと装飾を施すことが、ほぼ同じレベルで導入されたことを如実に表していると考えられる。

日田・玖珠地域では、首長墓系列の古墳として6世紀になっても前方後円墳が造られ、その後中規模の円墳が7世紀前半まで引き続き造られる。そして、それらは2〜3基程度の群として存在し、小地域の首長墓系列を示す。さらに小さな地域をいくつかまとめた、後の「郷」に匹敵する地域の統括者は、やや規模の大きな古墳を造っているようである。このように理解できるとすると、ガランドヤ古墳群、穴観音古墳とその周辺、法恩寺山古墳群などのそれぞれの小地域に拠って立つ首長墓系列には必ず装飾壁画が描かれていることになる。後期と考えられる内容の不詳な瀬岸寺古墳群や日田盆地北側の幾つかの古墳群にもまだ装飾古墳が存在する可能性が高いであろう。

一方玖珠盆地でも前方後円墳壱起古墳が6世紀前半代に築かれるが、その後鬼塚古墳と鬼ヶ城古墳がそれぞれ地域を異にして築かれる。壱起古墳の内部主体は不明であるが、後者はいずれも装飾古墳であり、小地域の首長墓として理解が可能であるとすれば日田地域と同様に理解することができよう。

また、別府湾沿岸では後期になると前方後円墳が築かれなくなり、その後鬼の岩屋古墳群、弘法穴古墳、正殿古墳、千代丸古墳などの円墳が築造されるが、前述のようにその内の3基に装飾が施されており、こもやはり地域の首長墓に採用されていると考えられるのである。

このように、H田・玖珠地域から別府湾沿岸地域にかけて、装飾壁画は地域の首長墓系列の古墳に横穴式石室と同時に採用されたものといえるだろう。そして、その下位に位置する横穴墓には基本的に装飾は施さなかったのである。

ところで、前記のように大分では彩色系装飾古墳は筑後川上流域のH田・玖珠地域と別府湾沿岸の別府・大分地域に見られる。その内、今回の調査であらためて判ったように、後者に属する別府の鬼の岩屋1号墳、2号墳の装飾は判然としない部分はあるとはいうものの、やはり筑後川流域のものに近い。つまり、別府湾沿岸に影響を与えたのは海岸ルートで下ってくる豊前地域ではなく、筑後川を通り水分峠を越える筑後方面からであった可能性が高いことである。5世紀代の臼杵市臼塚古墳と下山古墳の石製短甲の存在に示される筑紫地方と瀬戸内交通を見通した豊後西部地域との繋がりは、後期になっても引き続き行われていたと考えられるのである。

線刻系装飾古墳

大分県下において確認された線刻系装飾古墳は、国見町伊美鬼塚古墳、玖珠町鬼ヶ城古墳、大分市千代丸古墳の3基である。線刻については迫刻等の要素もあり、当時の線刻文様の復元については十分な注意が必要である。しかしながら文様モチーフなどから後述するように周防灘沿岸部に多く分布する線刻系装飾古墳と一致している。

これら線刻系装飾古墳はいずれも横穴式石室を主体部としており、前記したように横穴式石室がほとんどない豊後地域においてはこれらの古墳が首長墓系譜に連なるものであることは疑いない。さて、第4章ではとりあげなかった古墳に6世紀初頭前後の宇佐市鶴見古墳がある。今まであまり注目をされていないが、鶴見古墳の天井石の外側には平行線、格子目文様などの幾何学文様が細線によって描かれている。これの系譜については不明であるが、近年日田市草場遺跡、福岡県築上郡穴ヶ葉山墳墓群において石棺の小口部に同様な文様が見られる。時期は古墳時代初頭前後と考えられており直接的に系譜を認めることはできないが、何らかの関連も窺われる。なお、6世紀後半以降のものとしては鞍手郡古月横穴墓、中間市瀬戸14号横穴墓、築上部穴ヶ葉山1号墳、築上部山田1号墳などがある。

ついで6世紀末から7世紀初頭のものとして国見町鬼塚古墳、玖珠町鬼ヶ城古墳がある。鬼塚古墳は1980年の保存整備事業の事前調査で玄室内から須恵器が出土し6世紀末～7世紀初頭のものであることがわかった。ここでは玄室内に船・鳥・人物等が認められる。特に船は準構造船や帆船を描いたものがあり、福岡県鳥飼墳古墳に代表されるような葬送儀礼に伴う船の意味でなく被葬者の生前の活動を窺わせるような感じが強い。同様な線刻文様を刻した古墳に豊前市黒部古墳があるが、ともに周防灘を真近に見下す丘陵上にあり、前述したように古墳の立地からも被葬者が周防灘の海上交通に重要な役割をはたしていた人物である可能性が高く、それが線刻壁画の一部に表現されているのであろう。同じく7世紀初頭前後のものとして玖珠町鬼ヶ城古墳がある。ここでは玄門左袖石上半部に群鳥を、下半部には取下さる大形木葉文が認められる。この文様モチーフは山国川下流域の穴ヶ葉山1・3号墳、山田1号墳などにあり、九州の装飾古墳の文様モチーフとしては異趣な感があり、小山宮土雄氏は山国川下流域に535年に屯倉が設置されたのを契機として秦氏の管掌者とする渡米系氏族が定着したことは、大宝2年の豊前国戸籍にも見えることなどの情況証拠を重ね、これら線刻木葉文を持つ古墳の被葬者を秦氏と同族関係を形成した有力者としている。このような関係で見ると山国川を通じて玖珠盆地にも秦氏に連なる有力首長が居た可能性もあろうか。いずれにしても玖珠盆地には筑後川流域の装飾古墳に系譜を持つ鬼塚古墳と山国川流域に系譜を持つ鬼ヶ城古墳が混在することが重要な意味があろう。

以上は周防灘周辺部に系譜を持つと考えられる線刻系装飾古墳であるが、豊後独自のものと推定されるものに大分市千代丸古墳がある。時期は横穴式石室の形態から推定して7世紀初頭前後のものである。石棚前面

に赤色顔料をベタ塗りしその上に連続山形文、四角文、人物、動物が線刻されている。このような技法及び文様モチーフは県内の他の線刻系装飾古墳には認められず、豊後独自に発想されたものと考えられる。類似したものに彩色系装飾古墳では別府市鬼の岩屋1号墳がある。これは赤色顔料をベタ塗りし、その上に黄色(?)で連続山形文を描いている。石室形を持つ形態のもので肥後型石室の系譜に含まれるものである。このような彩色系装飾古墳の影響を受けながら、千代丸古墳の線刻系は成立したのであろうか。いずれにせよ他に類似はなくこの文様モチーフ、技法については今後の課題としたい。

装飾横穴墓

大分県下の装飾横穴墓は中津、宇佐、豊後高田、院内、玖珠と地域的なまとまりを見せた分布をし、全て彩色系のものであることが特徴である。装飾横穴墓の場合、全て開口しているため出土遺物がなく時期の決定が難しい状況にある。しかしながら行橋市竹並横穴墓群をはじめ遠賀川流域や南豊前、豊後において横穴墓の形態編年が明らかになりつつある。横穴墓は地域的な変化が著しく一様にはいかないが一定の変化原則があるようである。まず、玄室形態では6世紀後半までは有袖の大型隅丸方形プランを基調とし、6世紀末から7世紀初頭では袖部が退化し、7世紀前半から中頃で無袖化する。玄室奥壁は6世紀末前後から出現し、天井は6世紀末から7世紀初頭では菱門部との段差がわずかになり、7世紀前半から中頃で無くなる傾向が認められる。このような傾向は同時期の横穴式石室でも認められることであり、横穴墓と横穴式石室との強い関連性が窺える。このような横穴墓の形態変化をもとに大分県下の装飾横穴墓の実態を探ってみよう。

装飾横穴墓は次のように分類できよう。装飾文様を付ける位置としては入口部分と玄室内に分けられ、施工方法としてはベタ塗りと文様を描く二つに分けられる。玄室内を赤色顔料でベタ塗りをする方法は行橋市竹並横穴墓群、三光村上ノ原横穴墓群などの5世紀後半から6世紀前半の横穴墓に大部分認められ、一部中津市城山横穴墓、院内町水雲横穴墓などの7世紀初頭前後の横穴墓にもある。入口部をベタ塗りしたものは豊後高田市穴瀬1号、10号などに代表され6世紀後半から7世紀中頃前後まで認められる。入口部に装飾を表現するものの中で最も古いものに穴瀬2号横穴墓がある。これは形態から6世紀後半から末前後のものであり、これには円文が描かれている。ついで6世紀末から7世紀初頭のものに中津市城山、院内町水雲、穴瀬5号横穴墓が認められよう。この内水雲D号横穴墓には若干問題はあがるが、船(?)のような具象文様が認められる。この種の横穴墓の最も多い時期は形態的に見て7世紀前半から中頃にかけてのもので、宇佐市四日市横穴墓群、同貴船平下の裏山横穴墓群、同観音山横穴墓群、穴瀬16号横穴墓、水雲横穴墓などがある。特に宇佐地域に集中する傾向が認められる。文様は円文、同心円文、車輪文、六脚同心円文などの幾何学文様が主体であるが、弓矢(観音山横穴)、人物(加賀山)など具象文様も認められる。玄室内に装飾を表現したものに県下では唯一玖珠町鹿島横穴4号墓がある。これは横穴の形態から6世紀末から7世紀初頭前後のもので玄室奥壁に円文、山形文(?)、右側壁に人物(?)が描かれている。

以上、県下の装飾横穴の状況を概観した。これをまとめると地域的には周防灘沿岸部に集中し、一部筑後川最上流にも認められる。6世紀末前後から出現して7世紀前半から中頃をピークとしている。文様は円文、同心円文等の幾何学文が主流で若干人物、弓等の具象文様が入る。これは、ほぼ同時期に存在する横穴式石室の装飾文様のモチーフと若干異なるものと考えられる。

2. 大分県装飾古墳の現状と課題

装飾古墳は、その重要性から多くが国及び県の史跡に指定されている。特に、横穴式石室を主体部とする装飾古墳は、玖珠町の鬼塚古墳・鬼ヶ城古墳を除いて全てが国史跡に指定されている。その最も古くは、昭和8年に日田市穴観音古墳が、同9年には大分市千代丸古墳が指定され、最も新しい例では日田市ガランドヤ1号・2号墳が平成5年に県史跡から国史跡に昇格した。

こうした大分県の装飾古墳については、「全てを直接に観察することができ大変喜ばしい」という意見もあるが、

装飾文様の保護の上では無防備と言わざるを得ない。また、過去には保護上の調査もほとんど行っていないことがなく、今回、改めて多くの問題が指摘された。以下、それについて記述するが長期的な保護策と早急な対応を必要とするものがある。

穴観音古墳は、口下八光教授により壁画の模写がされており、また、保護施設として昭和47年に墳丘上に覆屋が建設された。覆屋は、石室内への雨水の流入を防ぐためであり、これによりある程度の成果は観察されるが、墳丘は雑草すら生えておらず、表土は乾燥状態にあり盛土の流失が生じている。このため覆屋の撤去を求める声もあるが、壁画に影響を及ぼしているかどうかは明らかでない。石室内の温湿度測定と盛土の流失防止策が急がれる。また、指定範囲は墳丘そのものになっており、周囲がブロック壁で囲まれているが、今回の調査により墳丘端部が指定地外で確認され、将来的には指定範囲の見直しが必要となる。

グランドヤ1・2号墳は、盛上の流失が著しく特に1号墳は石室が完全に露出した状態にあった。このため石室内への雨水の流入が激しいことから県内外の研究者により壁画保護の声が高まり、昭和59・60年度の2か年にわたって、H市教育委員会が遺跡保護のための基礎資料を得ることを目的として確認調査を実施した。その結果はすでに報告書が刊行されているが、1・2号墳からは多数の副葬品が出土し、2号墳東壁中央部には緑色顔料による騎馬人物像等が新たに発見された。現在は石室内の温湿度測定が行われ、一方では整備委員会が組織されその保護対策が検討されている。

法恩寺山3号墳は、7基ある古墳群の一つで5基の古墳が国史跡に指定されている。それぞれの墳丘裾には金網フェンスが巡らされている。石室は羨道部が破損しているため、前室入口部に木製の扉が設置され鍵を市教委で管理しているが、過去には自由に入れたため壁面に落書きが認められる。現在は見学者が少なく、石室はほぼ密閉状態にあるため壁画そのものの保存状態は他の古墳より良好である。

鬼の岩屋1・2号墳は、いずれも墳丘外形が著しく変形している。装飾古墳としては1号墳だけが知られていたが、その後2号墳にも壁画のあることが判明し、今回の調査でより鮮明になった。しかし、その両者は他の古墳とは異質なもので、今後もさらに図柄の解明が必要である。石室内は、1号墳の壁面に数カ所の亀裂が生じており、2号墳は封土の流失により雨水の流入が認められる。両古墳の墳丘は木で覆われており、石室の亀裂にはその根が大きく影響していることが明らかで、強風等による樹木の揺れによって石室そのものの崩壊の危険性もある。大木の伐採あるいは枝打ちなどが急がれる。また、冬季の石室内は非常に乾燥しており、壁画はホコリに覆われた状態にあり、石室内の温湿度測定が必要である。さらに、墳丘は、民家、市道等により墳端部を大きく削平されており、長期的には墳端部の確認調査や整備計画が望まれる。

玖珠町鬼塚古墳は、昭和28年に県史跡に指定。石室は羨道部を失い、前室入口部に鉄製扉が設けられている。墳丘は大きく削平され、露出した石室を河原石で覆い墳頂部には伊勢神宮の造拝所としての社殿が建てられている。また、石室は西に開いており、午後には西日が玄室入口付近にまで差込むため、その付近までは特にカビの発生やコケの繁殖が激しい。早急に日光の遮断が必要であり、将来的には社殿の移転と墳丘の整備が必要である。

国見町伊美鬼塚古墳は11基あったとされる西山古墳群の一つで、樹木・木ノ葉・舟・人物・二羽が向い合った鳥等が刻まれ、昭和32年に国史跡に指定された。しかし、はやくから羨道部天井石が崩落しており、室への出入りは袖石直前のところから、さらに墳丘盛土の流失も著しく石室天井石や壁積石の一部が露出した状況であった。このため昭和37年には落書き等から壁画を守るため、欄干及び柵網の設置が行われたが、その後、石室壁画のカビの発生、コケの繁殖が問題となり、昭和42年には墳丘の土盛りや入口扉の設置が行われた。しかしこの土盛り工事は、雨水の浸透を防止するに至らず、再び壁画はカビやコケに覆われるようになった。このため昭和59年に墳丘及び羨道部の発掘調査が行われ、60年には墳丘と羨道部の修復、外周の整備、扉工事等が行われ、玄室内にはキャップタイヤコート付の防湿型携帯型投光器が設置された。線刻系であるが、大分県の装飾古墳では唯一の保存整備された古墳である。

千代丸古墳は、墳丘を著しく失っているが石室そのものの崩壊の危険性は見られない。また、線刻画を含む石

室のレプリカも製作され大分市歴史資料館で展示されている。しかし、管理の面では自由に出入りが出来る状況にあり、落書き等が懸念される。さらに墳丘は民家に接近しており、将来的には規模の確認や墳丘の整備が望まれる。

鬼ヶ城古墳は、横道部が失われ墳丘の盛土もかなり流失している。また、最近の台風による風倒木により現状は惨憺たる状況である。石室内は、前室の袖石にかかる大井石に亀裂がみられ、壁面の一部には剝離が生じている。壁面の剝離や亀裂には、土木工学や建築学の見地からの調査が必要である。

横穴墓系では、宇佐市四日市横穴墓群が国史跡、同市貴船平下の裏山横穴墓群と豊後高田市穴瀬横穴墓群が県史跡に指定されているが、玖珠町鹿巣横穴墓は私道の建設、宇佐市観音山横穴墓は広域農道の建設に伴う発掘調査によって近年発見された。また、これらの横穴墓のうち鹿巣横穴墓のみが玄室内に彩色文様が描かれているが、その他は横道部入口前面に描かれている。このための四日市横穴墓群と貴船平下の裏山横穴墓は、その部分に覆屋が設置されているが、その他は日光や雨水が直接あたり、彩色文様の保護には極めて憂慮すべき状況にある。また、玄室内においても壁面の剝離が進行しており保護上の課題は多い。

以上が大分県における装飾古墳の現状と課題であり、先ずカビやコケに対しては石室を密閉して開口以前の安定した状態にもどす方法が考えられるが、それ以前に現状での石室内の温湿度測定、壁面の老化・微生物や析出物などの調査が必要である。また、鬼の岩屋1、2号墳や鬼ヶ城古墳など、木根や亀裂により石室そのものの崩壊の危険性のあるものに対しては、構造力学的な調査が必要となる。いずれにしても、それぞれの古墳の壁面は保存科学的な調査が早急に必要である。

装飾古墳の保護については、昭和50年、文化庁より石室を密閉、一定期間を除いて非公開とし、写真撮影も禁止する、という基本方針が関係機関に通知された。つづいて昭和52年には、佐賀県鳥栖市で装飾古墳保存対策協議会が開かれ、福岡・熊本・大分・佐賀県と関係市町村の担当者が集まり、装飾古墳の保存と公開方法などについての意見が述べられた。そしてその後、各県では誤り・錯誤をくりかえしながら完全密閉、観察用のガラス窓を備えた密閉式の保存施設の設置などの方法がとられたのである。しかし、ガラス窓を備えた施設は、公開と保護の両立を目的としたものであったが、側壁部分の壁面が見えなかったり、細かい部分の観察が出来ないことから、見学者にとって不親切だという意見も少なくなかった。こうしたことから熊本県ではやくから熊本県立美術館に装飾古墳室が設けられ、また、平成4年には鹿本郡鹿本町に県立装飾古墳館が建設された。特に県立装飾古墳館では、熊本県を代表する装飾古墳12基の石室や石棺のレプリカをはじめ、石室内に置いたモニターカメラを操作することによって、各部分の細部まで自由に観察できる仕組みがされ、さらに装飾古墳に関する情報システムや映像室等も備えられている。壁面の保存と延命を目的とすれば、完全密閉あるいは制限付きの公開は必要な措置であり、一方見学者に対しては装飾古墳館といった施設によって積極的な情報提供をすることも必要である。

装飾古墳の保護では他県に大きく遅れをとっている大分県では、県及び関係市町村が中心となり公開を含めた総合的な基本整備計画を早急に作成し実施していくことが必要である。

大分県文化財調査報告書 第92輯

大分の装飾古墳

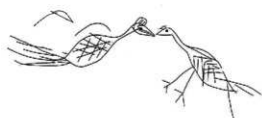
1995年3月31日

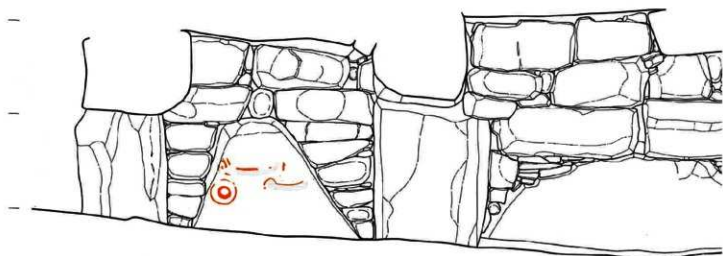
大分市唐内町3-10-1

発行 大分県教育委員会
(0975-36 1111)

大分市古国府1155-1

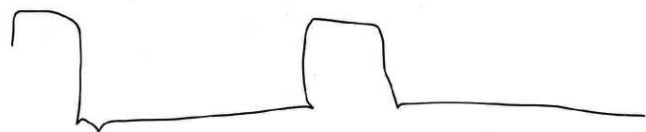
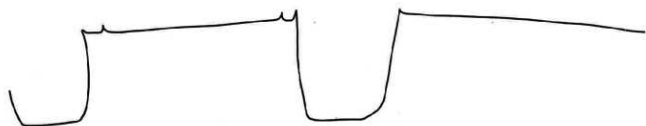
印刷 佐伯印刷株式会社
(0975-43 1211)





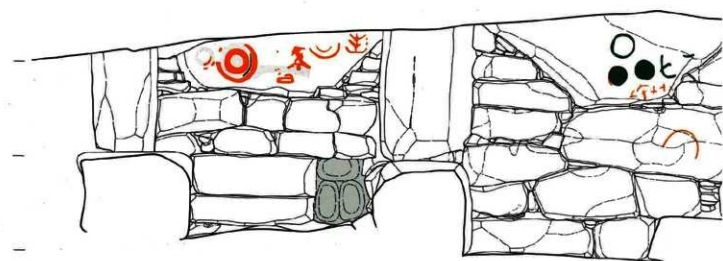
(A)

(B)

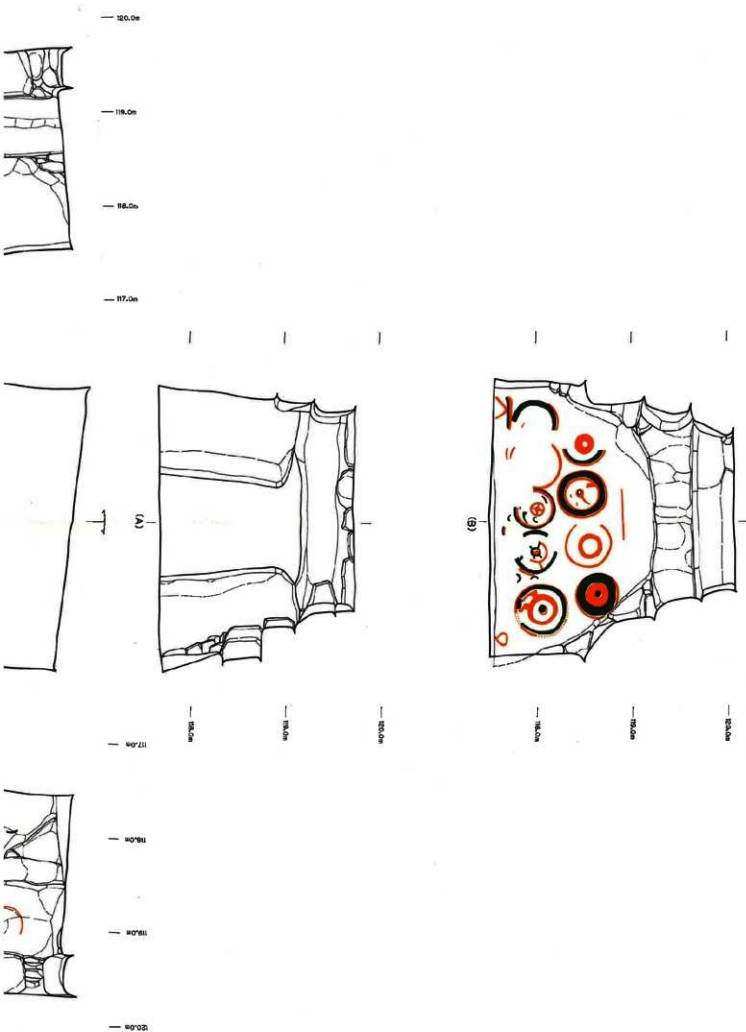


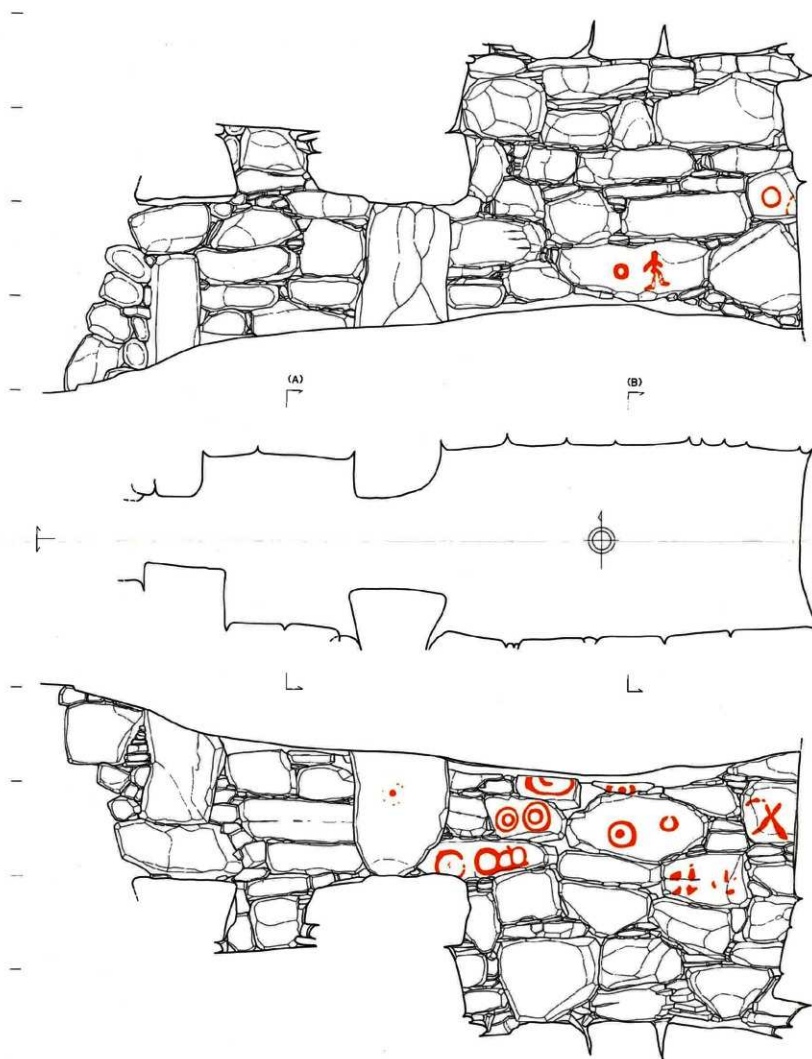
L

L

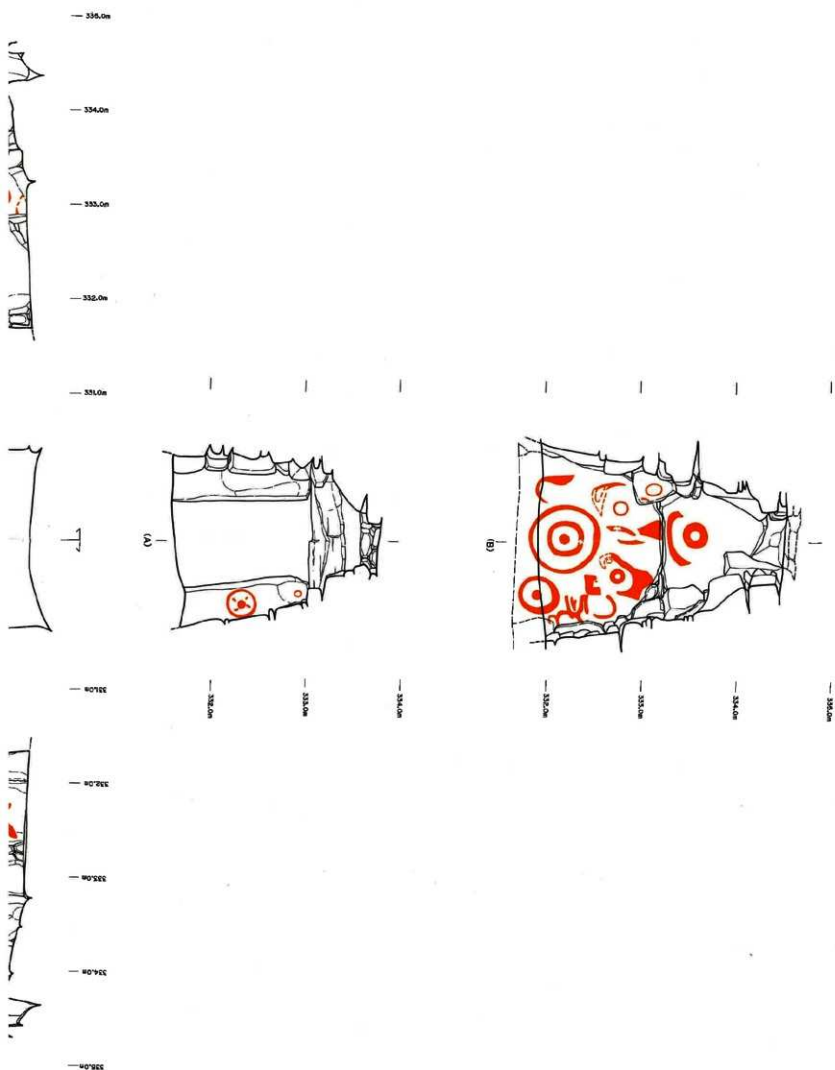


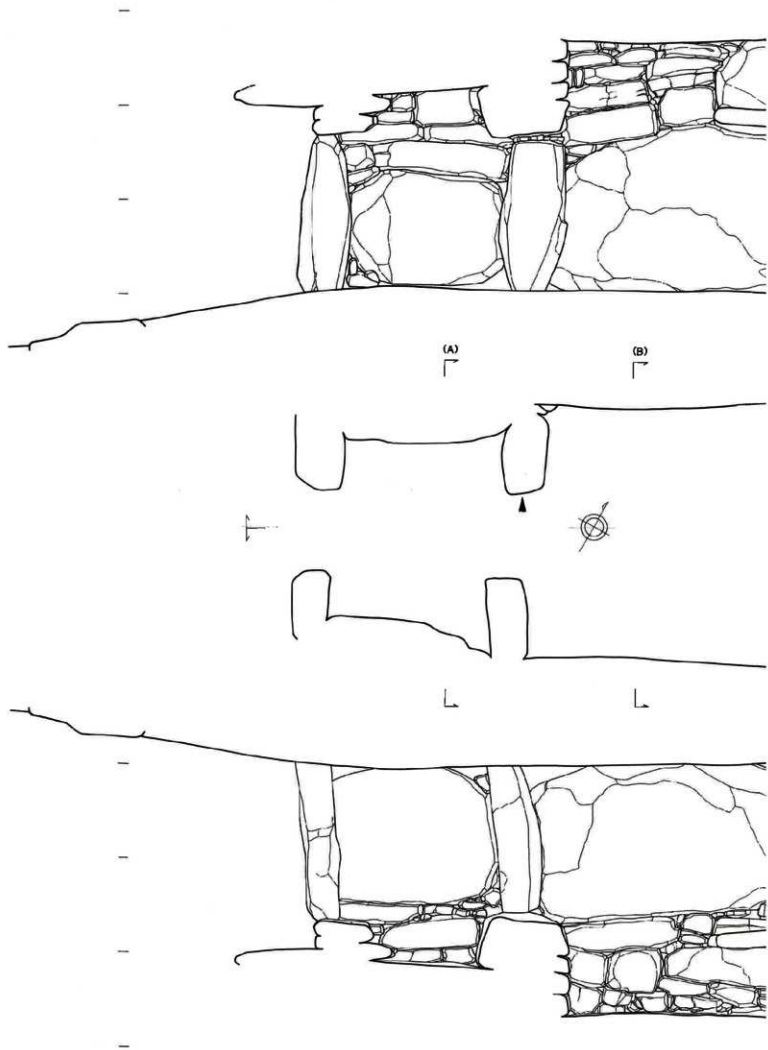
觀音古墳



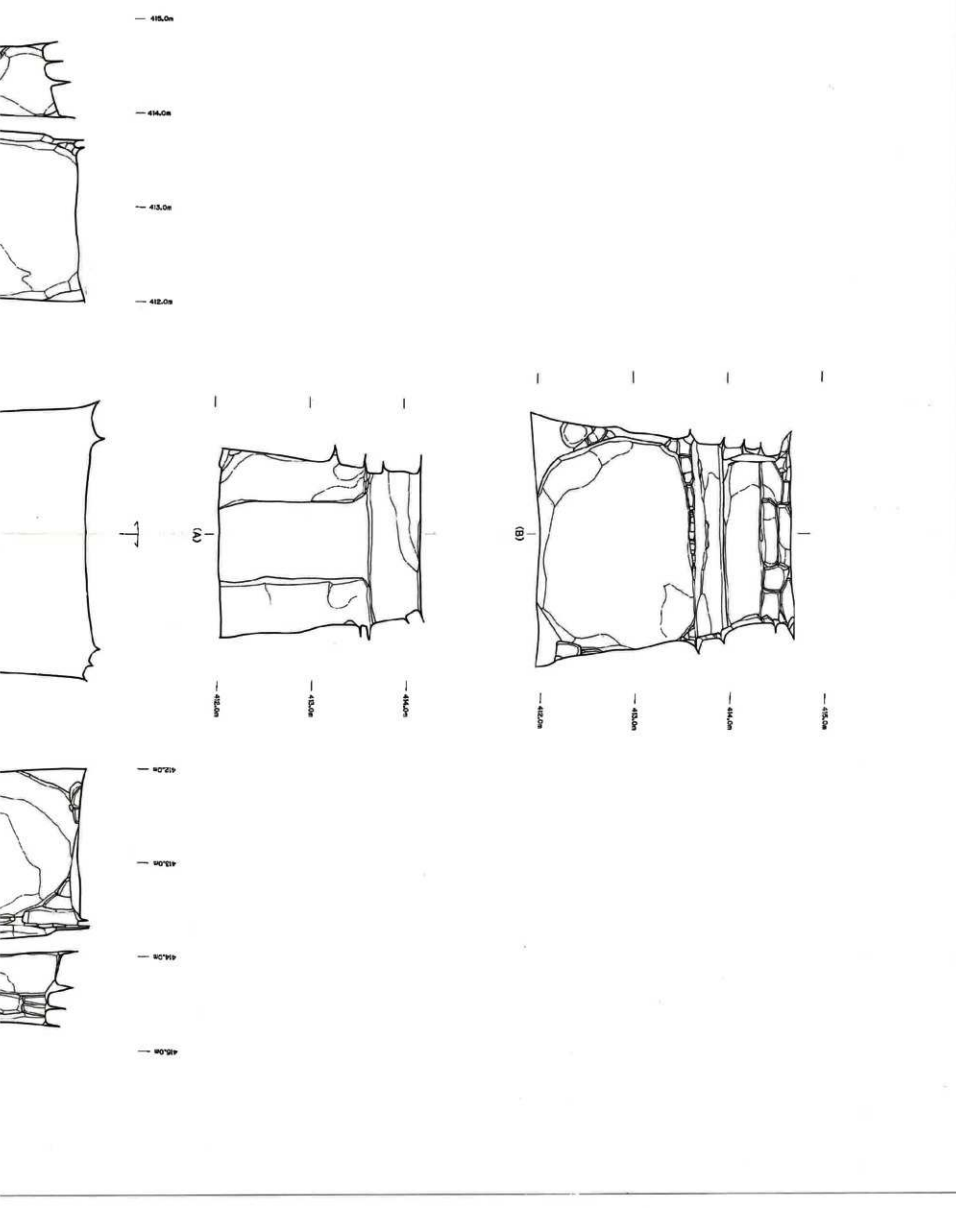


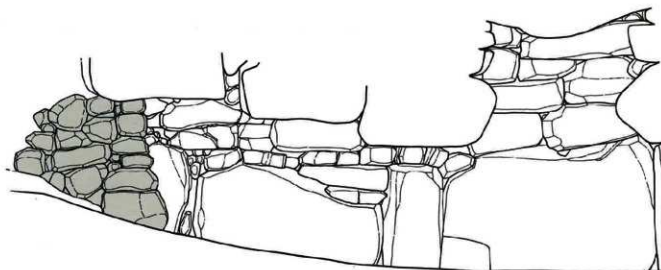
塚 古 墳





ケ 城 古 墳





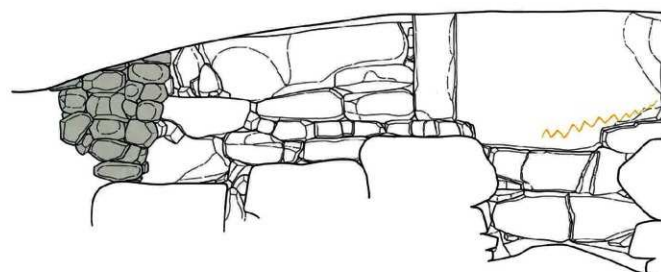
(A)

(B)

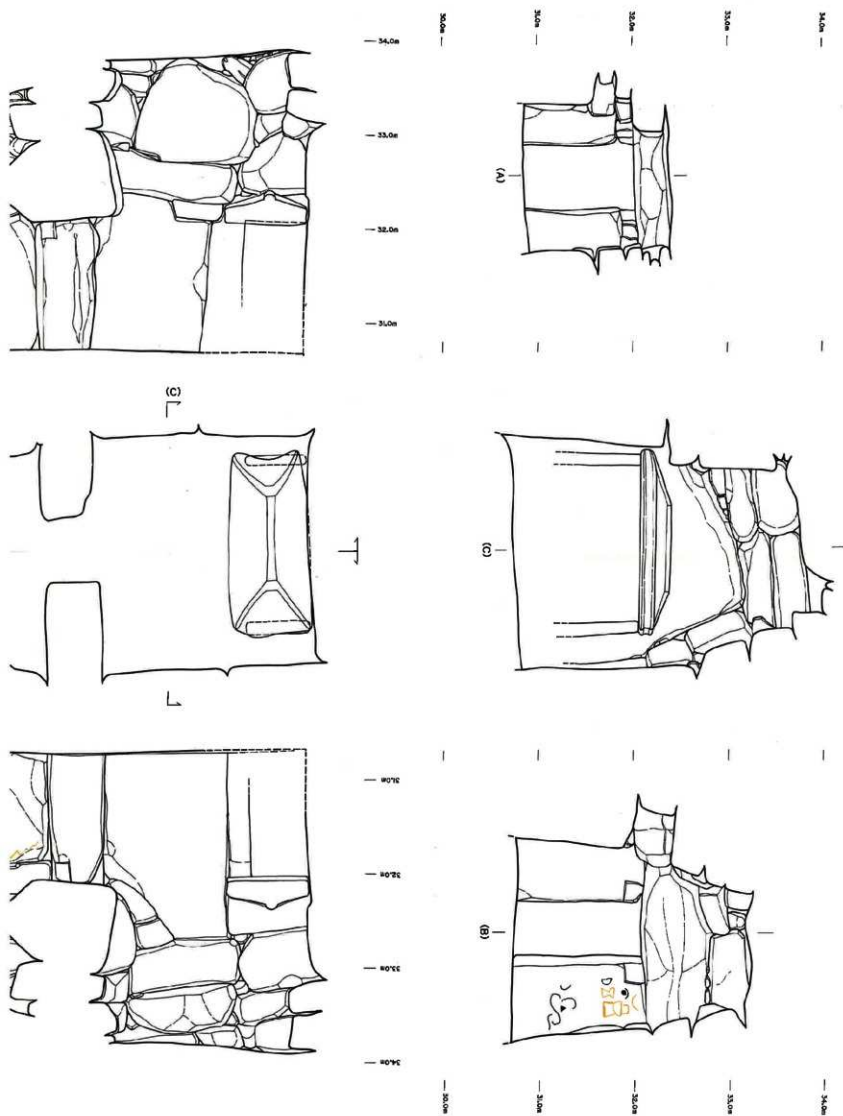


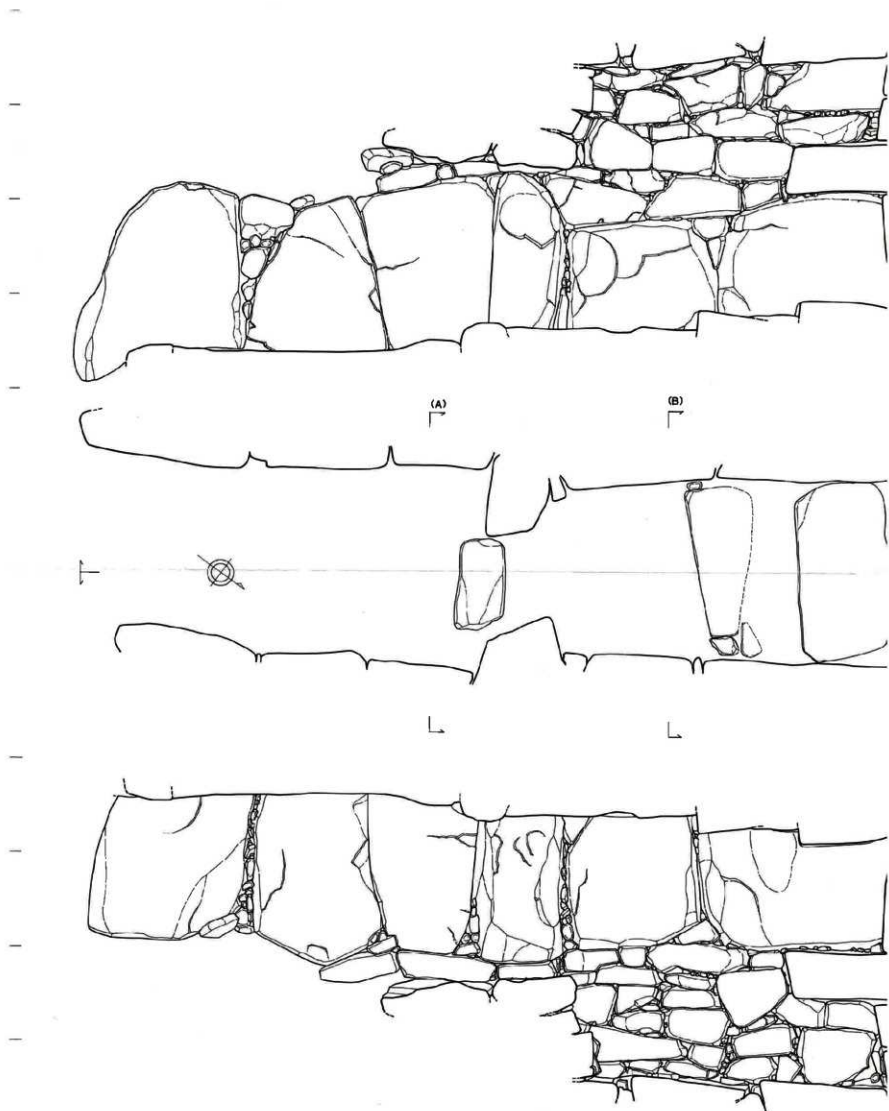
(A)

(B)

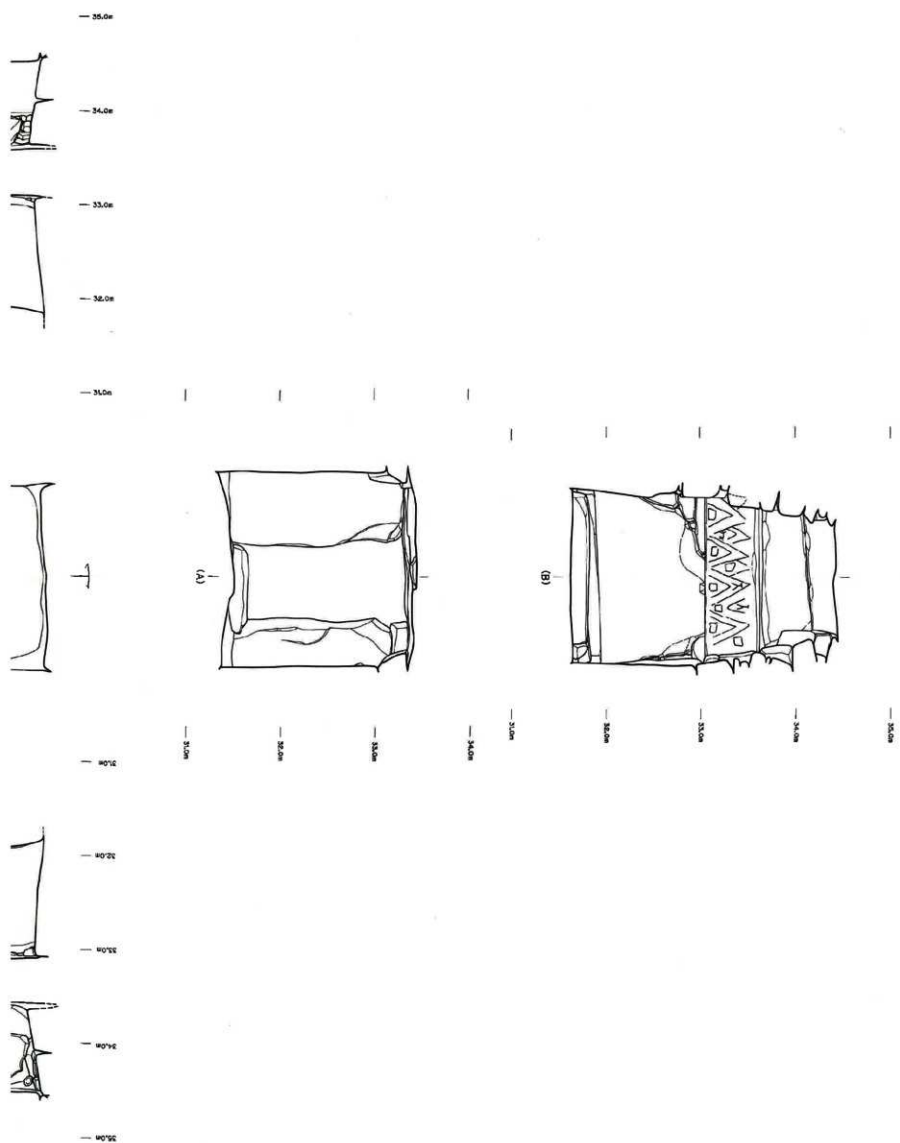


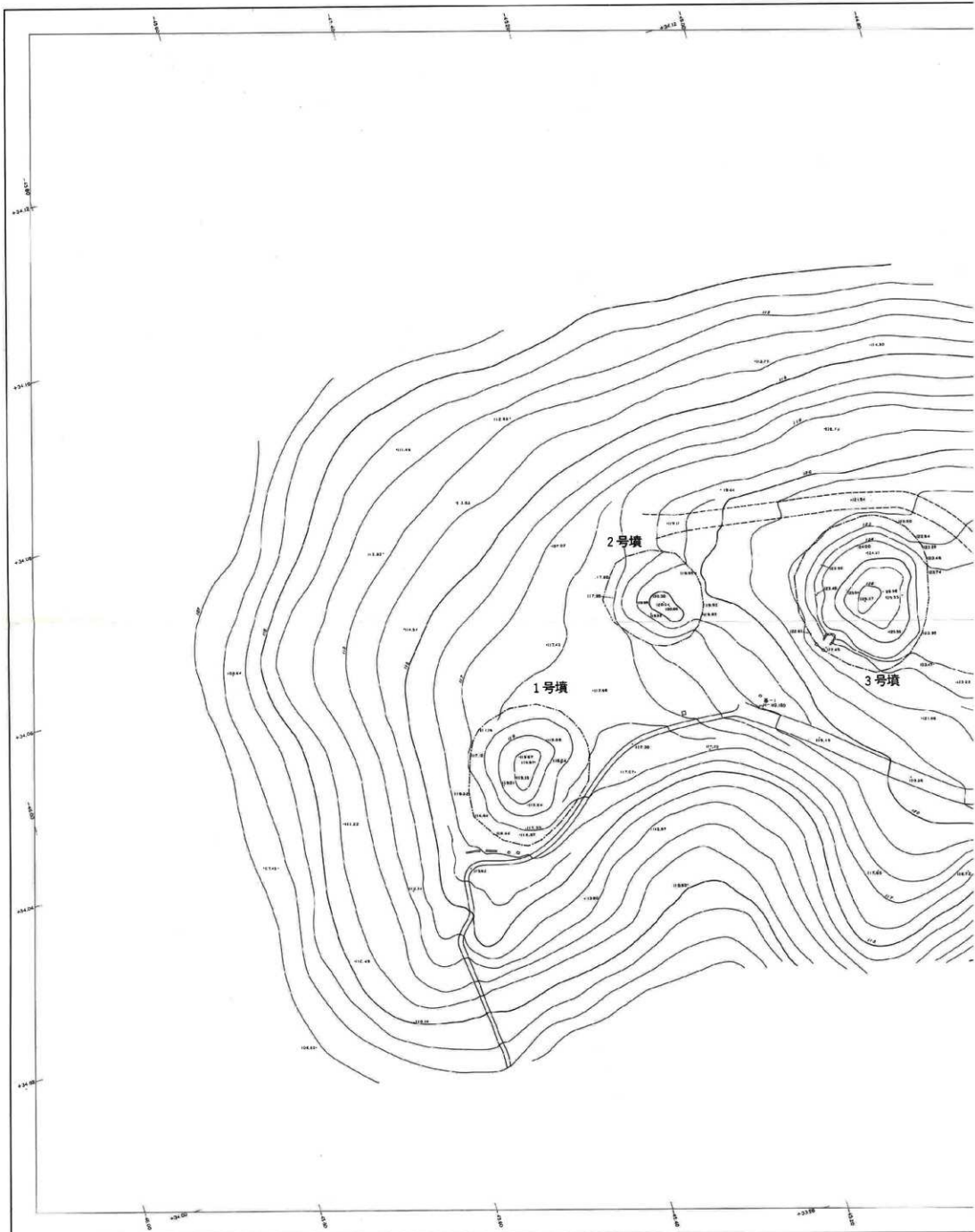
岩屋 1 号墳





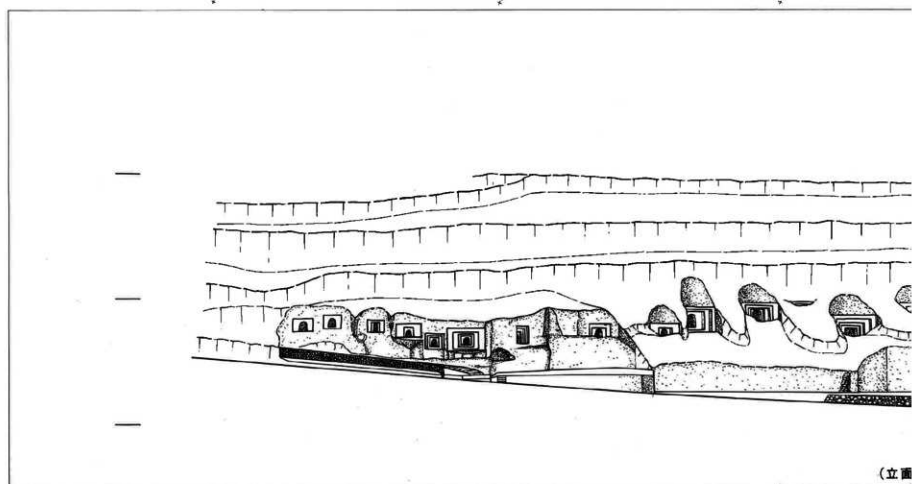
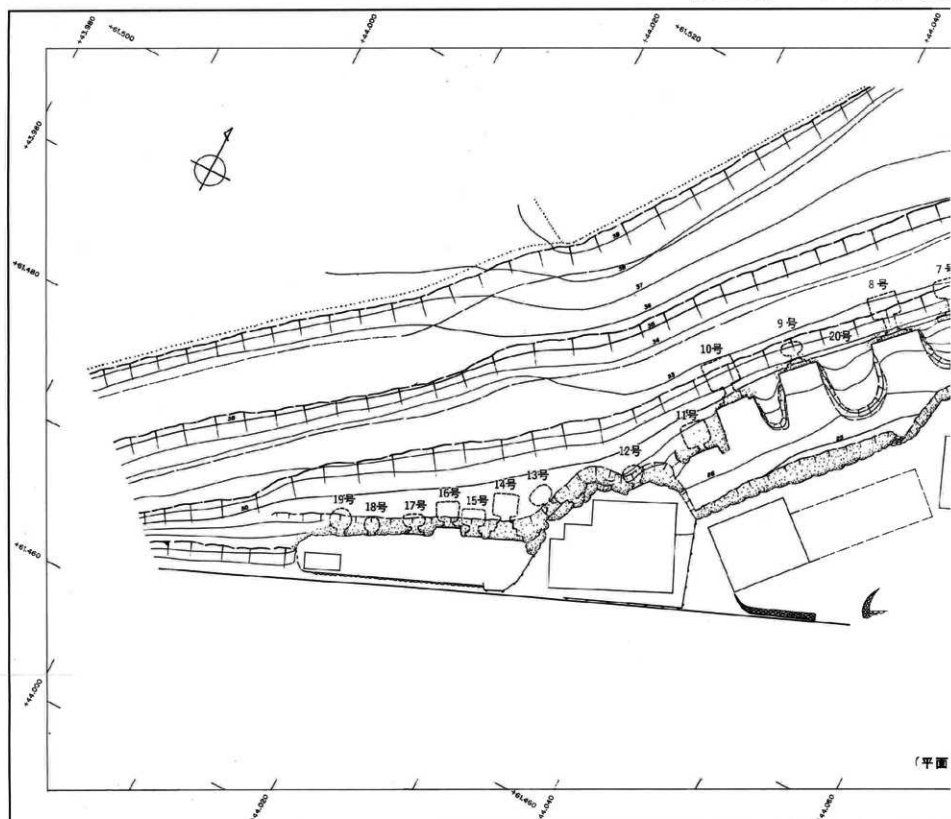
代丸古墳



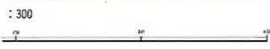
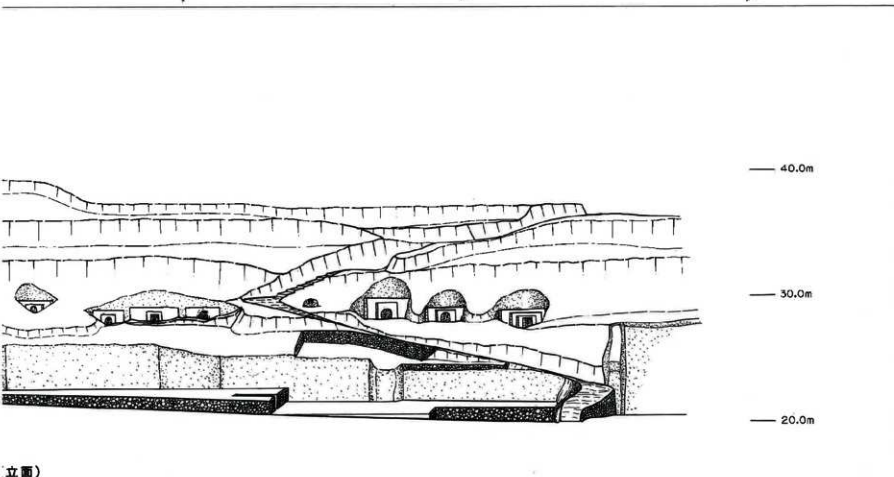


寺山古墳群





横穴墓群



大分県教育庁文化課